
ノーライフキングダム

番場蛮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーライフキングダム

【Nコード】

N9367U

【作者名】

番場蛮

【あらすじ】

東京湾沿岸に建造された巨大人工島、特区。

人と、人以外の者の平等を謳うこの地では凶暴な魔族による事件が数多く起こっていた。

魔法士と呼ばれる、魔法の使い手達が日々奮闘する中で、彼らの力が及ばない敵が現れた時に現れる最強の魔法士がいた。

曰く、年端もいかない少年である。

曰く、神父の服装をしており、鋼鉄の棺桶を背負っている。

曰く、不老である。十代半ばに見えて実は二十代後半。

件の少年、蓮杖誠は表向きは高校生として暮らし、夜は跳梁跋扈する魔族を狩る日々。

神父が夜をかける時、戦いは始まる。

第1話 『特区』

『君達は知っているだろうか？』

戦後、高度経済成長を経てバブル経済に突入。まさに日本の経済が世界の中心となった一九九〇年四月、それは世界中のテレビ、ラジオ、新聞、ありとあらゆるメディアを介して発信された。彼のジョン・F・ケネディのもとで行われたアポロ計画。その一号が月面着陸が世界中に放送された際の光景を彷彿とするその光景だった。人々が未知に対する期待と興奮、恐怖と忌避の視線を集める先、そこにいたのは月面を飛び跳ねる不格好な人影でも蒼く丸い地球でもアームストロング艦長でもなかった。

『世界の広さと言うのは諸君も知るところであろうが、深さと言うのもなかなかのものだろう』

画面に映るのは初老の男性だった。コーカソイドの顔立ちには皺が深く刻まれており、頭髪は余すところなく白く染まっている。スーツを纏い、スカーフを襟元に巻き、モノクルを嵌める様子は中世の貴族を思わせるが、ただそう言うにはためらわせる様な躍動する生命力が彼の眼にはあった。

『既に多くの人の間で噂になっていると思う。そう、私は吸血鬼だ』

ざわめきが起こる。吸血鬼と名乗った老人はテレビの奥の取材陣にフラッシュをたかれながらも臆することなく喧騒が静まって行くのを見守る。

『世界中に我々の同胞がいる。

吸血鬼だけではない。狼男や魔女、超能力者、エルフと呼ばれる妖精族にドワーフ、巨人族……数を上げればきりがない。彼らは人の世に紛れながらひっそりと暮らしてきた』

魔術、魔法、超能力、妖術。異能と異形は人の眼を憚り、また時には争い、双方ともに多くの犠牲を被ってきた。

『ルーマニアの地にて生を受けて五〇〇と余年。色々なものを見てきた。

渡り歩いた戦場の数など覚えていない。人間の妻を娶り、子を儲けた事もあった。

しかし皆、時の歩みと共にこの世を去ってしまった。

戦った者も、手を取り合った者も、愛した者も、憎んだ者も全てだ。妻の命日は忘れず覚えている。数一〇〇年も前の事であるし、何より暦の読み方も違ってしまっただが……そう、四月九日だ。

何度か不義理をしてしまった事はあるが、その日になると赤い薔薇の花束を持って墓前に捧げる事にしている。

自慢の妻だった。

綺麗で気立てもよく、何より心に通った芯を持っていた……まあ、料理は下手だったか』

老人がニヒルに笑うと取材陣もつられて笑う。遙か彼方を懐古するその顔は穏やかで優しげですらあった。

『彼女が教えてくれたのだ。

もしあの時、あの戦場で剣を交えた相手が手を取り合った友人だったなら、憎んだ相手を許し、憎まれた相手に許しを請う事が出来たのならばどうだったであろう。

しかし、もう遅い。私に彼らの眠りを邪魔する権利はない。彼らの子孫に合わせる顔もだ』

そして胸元から一枚の封筒を取り、中身を取り出して読み上げる。

『共栄平和条約、締結の地名を取り東京条約と呼ばれるであろうこれは種族と、歴史と、思想、信条、信仰の垣根を超えるための箱舟だ』

そして老人は書面に対してペンを取る。

『人類初の人と人ならざるもの達の栄えある未来を願って
B A B E L 最高評議会議長、ヴラド・ツウペシュ』

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

世界は変わった。一九九五年十月、米国に本社を構える巨大コングロマリットのCEO、ウラド・ツェペツシユは記者を目の前にした定例会見で発言した。

『私は吸血鬼だ』

その荒唐無稽な言葉を世間は笑い飛ばす事が出来なかった。それまでの数年、世界では様々な異変が起こり始めていた。津波や暴風地震などの天変地異に生物の奇形。人々の困惑を集めるに十分すぎた。

何よりウラド自身の地位の高さがその言葉を軽んじる事を許さなかった。BABEL、彼自身がトップを務める企業複合体は世界中に根を張り、特に米国に対して支払う法人税、経済的寄与貢献度の高さを鑑みれば米国はBABELによって成り立ち、その怪物とも呼べる企業を成り立たせているウラドは大統領よりも重要な人物ともいえた。未だに笑い話として語り継がれているのは、当時の大統領は就任してまず初めに行うことは所信表明演説ではなくウラドに挨拶をする事だということ、それは事実だった。

人々も変わった。肌の色、言葉、宗教、民族単位で区別され、時には戦争と言う殺し合いすら演じた人々の隣にいるのもはや人ではないのだ。吸血鬼はもとより、狼男、人魚、妖精族、ドワーフ、魔女、数え切れないほどの人とは言えない者達がウラドのカミングアウトと共に社会の明るみに出始め、今では人と生活し始めている。もはや人種ではなく種族で判別される時代となっていた。そして

「見てください。今年で落成十五年目を迎えたこの東京経済特区、通称特区。そしてそれを支える大地、人工島が人々の営みと経済を支え始めて十五年物歳月が経とうとしています」

経済特区開発プロジェクト。高度経済成長の煽りを受けて一九七〇年代初頭に計画された東京湾沖に人工の巨大出島を建造するといふものだった。まるで炭酸の気泡の様に無為に膨らんだ日本の経済力の暴走。世界中の誰しもが（とうの日本人も含めて）その無謀に眉をひそめた。

世間が騒ぎ、マスコミや評論がたたき、さんざん世間を騒がせた事情の裏には秘密裏に行われた日本政府に対する資金援助の影があった。大規模事業を行っても余りある程の資金がもたらされたのだ。

かくして人工島は完成し、その落成と時を会わせてウラドはその人工島を人と人ではない者達が分け隔てなく暮らせる理想郷とし、日本政府の理解を得ている事を発表した。そう、特区と言う島を造り出したのは日本政府ではなくウラド自身だったのだ。



蓮杖誠は机の上で頬杖をつきながら手元の携帯電話からワンセグでニュースを眺める。

「・・・雛森明菜の特集はやらないか」

蓮杖誠は中庸な少年だった。身長は百六十センチ台半ばで高くも

なく、低くもなく。高校の制服と、襟元に付けられた二年生を示す？のバッジをつけている。十代半ばの容姿に、不精で伸びてしまった黒髪、ややつり目である瑪瑙色の瞳を持つ、温和そうな何処にでもいる少年だった。

クラスメイトに蓮杖誠について聞けば、『優しそうな奴』、『大人しい』、『もの静か』など、あまり珍しくない評価を聞く事が出来るだろう。しかし、同時に彼の印象が薄いと言う共通点も窺える、そんなありふれた高校生が蓮杖誠だった。

空は明るいながらも窓の結露を見れば気温がそれなりに低い事が分かるだろう。当然だ。既に十二月の半ば。年末なのだ。

誠は臍肩にしているアイドルの紅白初出場の報を聞いていても立ってもしられず携帯から目ぼしい情報を漁っていたが、不作も不作。昨今の紅白不人気の話題は本当らしい。かれこれ一時間近くワンセグも含めてネットサーフィンにいそしんでいるが、紅白の紅の字もできやしない。

「つとと、そうだ次の授業は・・・」

経済特区に設けられた学校。東京都の港区とほぼ同じ広さを持つと言うその土地にはそれだけ人も多い。無数の企業と、それを支える従業員と、彼らが支える家族によって彩られた街。そして自然、学校施設もそれなりに多くなる。その一つに誠は在籍していた。

「・・・・」

数？Bの教科書をしまいながら顔をしかめる。正直、あまり勉強は得意な方ではない。特に理系科目は最近理解が追いつかなくなっ

てきた。

すると背中に衝撃。

「まっことっく何してんだよ!」

「ぐはっ」

振り向くと恐らく振り下ろしたばかりであろう手を掲げてにやりと笑う人影が立っていた。

「やはは、そんなところでそんなこと、まったくよう根暗ったらありやしねえ」

一八〇を軽く超える長身を包む学校指定の紺のブレザー、その上からでも分かる程に均整のとれた体に乗る顔は、伝法な口調に反して驚くほど整っている。金系の様な髪は短く整えられ、白磁の肌、エナメルドの瞳を見れば、日本人ではないことが一目瞭然なのが、それが気にならない程に普通の人にはありえない部分があった。

長い耳。まるで水辺の辺に佇む妖精の様だった。

「エミユル・・・」

「ははは、俺、じゃねえ、あたしを少しは見習えよなっ」

エミユルと呼ばれた少女は快活に笑う。

「君も今は女なんだから、少しはそれらしい物腰を持ったらいいんじゃないか?」

「ははは、それは無理つてもんだ。ずっと男になるとばっかし思ってたもんだからよ」

エミユルは妖精族だった。

妖精族の特徴として、総じて美しく、十五歳ごろ、中学を卒業するくらいまで、雌雄が未分化である事があげられる。

エミユルとは中学入学からのなかだが、それでも最初は男か女か分からない、美貌ではあるが、中性的な見た目をしていた。しかし、

「最近じゃあよう、重くなってきたまんねえよ」

少女はたわわに実った己のそれを、わしっと掴むと重たげに揺らす。

くわっ

「ん、どうかしたのかよ、誠」

「い、いや」

鼻を押さえて前かがみにもじもじする誠。

この少女は自分が女である事に対する意識が低い。故に年頃の少女とは考えられない程に無防備だ。それが目に毒だ。

「大丈夫かよ」

「・・・あ、ああ、大丈夫。それよりも次の授業は魔法実技？だ」

魔法、ここ数十年で認知された人以外の種族。それとは別に、科学以外のテクノロジーの応用と研究、それも急速に進んできている。特に魔法の研究は、既に自然科学のそれと同等か、それ以上の勢いを持っている。

「俺、苦手なんだよね。魔法実技……」

魔法は工業、医療技術の分野において目覚ましい飛躍を遂げている。だが、それ以上に注目と期待を以ってそれを見守る存在、それは……

「でも、軍や警察は魔法実技が出来れば即採用って話だぜ？」

幸か不幸か、魔法を暴力として行使するには才能を選ぶ。魔力で領域を満たし、魔導制御力で緻密に、あるいは強引に事象を改編する。魔導演算力の高さは、複雑な魔法の発動までの時間に多いに関わってくる。

つまり、魔法を使う上での軸は持続力とリーチに関係する魔力、馬力の強さ、威力に関わる魔導制御力、魔法の展開の早さと複雑性を司る魔導演算力の三つになる。

かつて、銃器に始まる飛び道具の出現で、個の強さが圧倒的に薄れてしまった時代から一転、ごく限られた領域の者達ではあるが、一軍に匹敵する存在も現代には存在する。

「……エミユルは軍人志望なものな」

「ああ、今年中に《中級一位》までは取りたいぜ」

当然、魔法という暴力が武器として成り立つ時代だから、それに応じて一人一人にタグをつけて管理しなければいけない。

「こいつが金色に染まる日も近いな」

魔法士、そう呼ばれる存在は、下は《下級三位》から、上は《上級一位》の九種類に分かれている。下級を抜け出して一人前、大抵の者は中級の一位か二位で終わり、上級は一流の領域、選ばれし者達は全体でも五％に満たない。そしてエミユルが自慢げに見せる左腕の手の甲に刻まれた円形の魔法陣の様な銀色の紋様が、そのタグだ。

魔法テクノロジーがふんだんに利用されたそれは、刻まれたものが行使した魔法を記憶、記録するものだ。魔法による犯罪抑止に貢献しているそれは、下級の者は銅色、中級の者は銀色、上級の者は金色に分かれている。

因みに誠の左腕にタグはない。授業以外で使う事はないので必要がないのだ。免許制で、様は使えても使わないければ問題はない。

現在、高校二年生に在籍しているエミユルと誠だったが、エミユルの《中級二位》は歳の割には高い実力を持つていると言えるだろう。普通は社会に出て経験を積んでから取得するものだからだ。学校内における大多数の高校生はタグを持っているが、その殆ど全てが銅色だ。案外、エミユルのタグが金色に変わるのとはそう遠い未来の話ではないかもしれない。

「でもなあ、」

「ん、どうしたんだよ」

「いやあ、上には上がいるって思うとよ」

エミユルは携帯を取り出すと、見せる。ネットニュースの画面だった。

「んん、十三使徒、プロメテウスが米国議事堂に爆破テロ」

魔法は人に進歩をもたらしたが、その半面、強大な脅威ももたらした。集団を凌駕する個、その最高峰の理不尽を人は『十三使徒』と呼ぶ。

「・・・ああいうのは、別だろ」

「そうは言っけどう、同じ魔法士ってことには変わらない訳だし・
・」

予鈴が鳴った。

「ああ、そろそろいかないと」

「・・・でもよう」

使徒って、腕にタグ付けてねえから

普通の人と違いが分からないって話だろ。

まあ、犯罪者だし、そんなもん付けてたらおかしいけどよ。
でも、少し怖いだろ？

そう言っただけでエミユルは素早く席に戻ると学校指定のジャージを取りだして更衣室に向かう。また後でな、と手を振る彼女に挨拶を返すと、遅れて誠もジャージを取り出す。

「・・・ああ、そうだな」

人知れず呟いた誠の言葉を聞いた者は誰もいなかった。
？

第1話 『特区』（後書き）

SFとファンタジーが混ざった様な、そんな物語です。血沸き肉躍る、ハードコアなバトルを描いていきたいと思うので、どうぞよろしく。

第2話 『暗夜行』

夜の繁華街に雨が降り注ぐ。

昼間の晴れが嘘の様に夕方から降りだした雨は、初夏とも言える暑さもあって、道行く人々に息苦しさを与える原因となっている。

派手なネオン、屋上の上の大きな看板には最近流行りの女優がグラスをあおって、人の酒に涼を求める心を煽っていた。

しかし、風景に反して、通りは酷く空虚だ。出勤途中のホステスも、仕事帰りのサラリーマンも、彼らが目当ての娼婦も……、誰一人としていない。

「封鎖はどうなっている」

『既に完了しました。外はともかく、通りには人っ子一人いないはずです』

了解、そう返して通信機をきった男は黒いベレー帽に濃紺の戦闘服、それらを防弾装備で覆った白人の男だった。歳は三十代半ば、装備の上からでも引き締まった体と顔で、軍人特有の厳しい顔立ちをしていた。

男が話した言葉は日本語だった。彼を隊長とする特区管理公社の警備局作戦部第一課行動部隊の勤務区域が日本国領内というのが第一の理由だろう。彼だけではなく、隊員全員が日本語を扱えるように教育されている。部隊内でも日本人は三割弱、また人以外の種族が五割近いのも、勤務地に合わせて言語を統一した理由の一つだろう。

う。また、彼自身もアメリカ合衆国を出身国としている。

「さて、そろそろだな」

全体が良く見える、繁華街でも一般的な高さの屋上でそう呟く。
緊張した様子ではあつたが、適度に力は抜けている。その様子が歴戦の戦士のそれを彷彿とさせたが、男の周りの数人の部下達はそうもいかなかった。

「何だ、緊張してるのか」

「た、隊長・・・・・・・・」

「緊張は良いものだ。体に力を与えてくれる。しかし適量でなければならぬ。出なければ体を強張らせて、死ぬ」

「・・・・・・・・」

「だが、大丈夫だ」

部下達は顔を上げる。

「お前達は特区警備隊でも精鋭たる第一作戦部隊の隊員だ。訓練は楽ではなかっただろう？」

だから誇りを持って、そう言うとな部下達の瞳に自信と活力が灯った。

（やれやれ、楽ではないな）

確かに精鋭ではある。優秀ではあるが。経験が足りないものが多い。

無線機から部下の報告が聞こえる。

ここ数十年で急速に現れて来た人以外の種族、それは知性的に人の社会に入り込んで共存できる者もいれば、そうでない、俗に魔族と呼ばれる存在の出現も伴っていた。

Eから始まりSまである魔族のランクはBまでは通常戦力、つまりは軍隊など、それ相応の準備をすれば斃す事は出来る。Aは局地災害、Sに至っては天変地異とされ、歴史を紐解いても数えるほどしか確認されていない。

そして今回の標的、ベオウルフと呼ばれる存在のランクはB、また、街中という悪条件が隊員達の心を圧迫していた。

「チームα、臭素グレネードを投下後、通常弾にて一斉射撃、弾倉を交換後、法儀式銃弾に切り替えて奴の頭を押さえろ」

『了解』

ベオウルフの足元にグレネードが投げ込まれる。それは光を発生させる訳でもなく、爆発して金属片を撒き散らすでもなく、ただ色の薄い煙を撒き散らした。

グオ、オオオ・・・

ベオウルフは苦しげに頭を抱えると膝をついた。形質として狼のそれを備えているベオウルフの鼻に、ダメージを計算されつくした臭気の攻撃がくわえられる。

ダダダダッ

耳をつんざく様な銃声と共にベオウルフに銃弾の雨が降り注ぐ。
小さな傷を造るものの、アサルトライフルの銃弾に撃たれたにして
はありえない程の耐久力だ。

そして一瞬、空いた間の後の銃撃……

オオオオ、オオオ、オオオッ

苦しげに、地面の上をのたうち回った。法儀式により降魔の力を
持った銀の弾丸がベオウルフを決る。

かすり傷程度しか負わなかったベオウルフの毛皮が、見る見る血
に染まっていく。

『戦術目標被害拡大、攻撃を継続します』

更に銃弾と肉の爆ぜる音がする。

『法儀式銃弾、銀弾がきれます。三……二……一……』

そして銃声が止んだ。

ベオウルフは苦しげにもがきながら、体からもつもつと煙を出し
ていた。

「くそ、浅いか」

確かにダメージを与えることはできたが、しかし、法儀式銃弾の残りはない。あれは高価なのだ。

「・・・チームβ、γ、通常弾で頭を押さえろ」
『了解』

再び銃弾がベオウルフを襲う。ダメージは薄いが、ベオウルフは防御の姿勢をとったまま動く事が出来ない。

「チームα、シルバーバヨネットを着剣準備」

『・・・了解』

通信から聞こえてくる声に緊張が垣間見えた。

「我々も準備だ」

ローガンが部下達に告げると、部下も準備を始める。

「チームαは私を含むチームωと息を合わせる準備をしろ。奴に白兵戦をしかける」

狼の化物相手に白兵戦、その無謀ともとれるローガンの言葉であったが、しかし、その言葉に反抗する者は皆無。皆が銃剣をアサルトライフルに装着して命令を待つ。

弾幕が薄くなってきた。

ベオウルフが反攻の機会を伺い始めた。

（頃合いか・・・）

「白兵戦チーム、魔法を展開、なお、展開魔法は肉体強化の一点に限る」

魔法による肉体の強化。そう、彼らは魔法士の兵隊なのだ。通常の軍隊では対処できない、極めて魔法的な事件、事故に対する即応集団。

（・・・・よし）

自らの左拳に宿る金色の魔法陣が薄く光り、魔法の発動を確認できる。《上級三位》の魔法士資格を持つローガンと同じように、ローガンの部隊は殆どが上級資格か、《中級一位》の資格を持つ一流の兵士によって組織されている。

「化物、軍隊の、人の恐ろしさを教えてやる」

二つの白兵戦部隊が控えていたビルの屋上から一斉に躍り出る。

迫る地面も難なく衝撃を逃がして着地した。

魔法における肉体の強化、強化魔法と呼ばれるものであるが、それは精々、超一流のアスリートが体を鍛えて出せる全力の一二〇パーセント程度でしかない。人の魔法で人を超える事は出来ないのだ。明らかに眼の前の化物はそれを遥かに上回るが、しかし、ここからがローガン達の真骨頂だ。

最初に接敵した二人の隊員が、アサルトライフルを撃ちながら、その銃剣を思いっきりベオウルフの脇腹に突き刺す。

「パージッ！」

ローガンが叫ぶと素早く手元を操作して銃剣をアサルトライフルから外す。

苦しんだベオウルフは両手を振りまわして二人の隊員を弾き飛ばすが、強化魔法のおかげで死んではない。骨くらいは折れているかもしれないので後方に待機させる。

オオオオッ

悲鳴を上げながら、脇腹に深々と刺された銀の銃剣を外そうと試みるが、柄まで銀で拵えている。掴んだ途端に掌を焼いてしまうので、なかなか外す事が出来ない。

「グレネードッ」

隊員の内一人が叫ぶと、再び臭気グレネードを投げ込む。

ブシャ、とガスが吹き出る音と共にベオウルフが苦悶の声を上げる。

（ナイスな判断だ）

ローガン自ら訓練に加わって鍛え上げて来た兵たちだ。その成果

を誇らしく思う気持ちが一瞬起こる。

（だが、今は）

「総員、突撃！」

まるで、中世の様な戦の掛け声を上げて弾丸の様な早さで駆けるローガンと隊員達は、まるで馬に跨った騎士だった。

オオオオオオオ

四方八方から一〇以上の銀の銃剣に貫かれたベオウルフは苦悶の声を上げ、そして弱り、最後の抵抗で暴れようとするも、銃剣を捻ってとどめをさす一撃で力を失くし、斃れた。

「よし」

小さく洩らすローガンの声に、隊員の間に安堵の空気が漏れる。雨は未だに振っている。ベオウルフの死骸から洩れる血が地面を濡らし、更には雨で薄まって消えていく。

ローガンは自分の体が雨以外に、返り血と汗で濡れているのを今更自覚した。さらには

（・・・酷いな）

最後の臭気グレネードは決め手の一つだったが、その臭いが酷い。完全にこちらにも移ってしまっているだろう。消すのに骨が折れそうだった。

顔を顰めながら部下に撤退命令を出そうとした時、ホストクラブが入るテナントビルの屋上に眼をやり、凍りついた。

オオオオオオオオオオオオオオオオッ！

更にもう一体、そこには今斃したもののより更に大きい個体が轟きの声を上げていた。身の丈は四メートルを超えているだろう。先程とは比べ物にならない程の力強さを秘めた、新しいベオウルフ。

「番い、いや、母親か！」

確かに、ヘオウルフにしてはやや小柄な個体ではあった。まだ若い個体なのだろうと考えて戦っていたが、近くに更に強力な母親が潜んでいたとは。

「敵襲ッ！！」

常の号令よりも更に声を張り上げて降す命令に、動揺もなく、あるいは消し去り、即座に答える隊員達。魔法を抜きにしたとしても、世界中の軍隊、特殊部隊を探しても、ここまで高い錬度を保持している部隊は少ないだろう。

オオオオオオオオオオオオオオオオッ！

母狼は怒っていた。我が子を殺された悲しみだろう。その嘆きに

は怒りが滲んで見えた。

（まずいな・・・）

一体だと思っていた。既に法儀式銃弾は使いきってしまったのが痛い。

ベオウルフが跳躍。地面に降り立つと、コンクリートが砲撃でもされたかのように弾けた。

そして身がかがめ、力を溜めて更に地面を蹴り碎く。運動エネルギーを全て推進力に使ったベオウルフは凄まじい速度でローガン達に迫る。

「構え、撃てえ！」

命令通りにベオウルフに銃弾を浴びせるが、残りの弾数も少なく、薄い弾幕では殆ど足止めをする事も出来ない。

途中で隊員達を跳ね飛ばしながらローガンに迫る。どうやら集団の長を把握したらしい。高い身体能力と耐久力、そして知能がベオウルフの脅威でもある。

（まずい！）

自分に迫ったベオウルフが爪を振りかぶったのを見て咄嗟にアサルトライフルごと強化魔法をかけて楯にする。

ガギンッ

凄まじい音を立ててアサルトライフルが拉げた。

折れ曲がった銃で何とか攻撃を凌いだローガンは、一瞬でも気が抜けるとそのまま体を両断されそうな攻撃に耐えつつ、部下に命令を降そうとするが、その余裕がない。

そもそも、視界の端には倒れた部下達の姿。ベオウルフの巨体に跳ね飛ばされると言う事は、そのまま車にはねられるようなものだ。強化魔法を使っても、簡単には立ち上がれない。

ローガンは自分の状況が本格的に不利なものとなって来ている事を悟った。

（くそ、このままでは）

残った部下が銃剣をベオウルフに突きたてようと迫るが、それまで持ちこたえそうにない。

（ぐう、ここまでか！）

ドッ

何か、肉を打つ様な音と共に体中に掛る負荷が消えた。

「何？」

見れば巨大な砲弾の直撃を受けて跳ね飛ばされるベオウルフの姿だった。

「一体何だ!？」

ベオウルフは壁に激突するが、大したダメージにはならなかったのだらう。こちらを伺うようにのっそりと立ち上がる。

ローガンはベオウルフを吹き飛ばしたのを見て、それが砲弾などではない事を知った。

(これは・・・棺桶か?)

鉄色に光る西洋式の棺桶だった。まるでドラキュラでも出て来そうなそれは、ところどころに薔薇の彫刻をあしらひ、その優美な外観を台無しにするようにぐるぐると銀色の鎖で縛りつけられている。

「そこをどけ、ド素人ども」

静かに、そして傲然と告げるその声に惹かれる様に振り向いた先には、カトリック式の黒い僧服に身を包んだ少年の神父が立っていた。

「聞こえなかったのか、木偶どもが」

人外の脅威を目の前にした気負いも、そして一切の遠慮もなく、その神父は現れた。

それがローガンにとって墓守騎士、グレイブナイトグレイブナイトと呼ばれる戦士との最初の邂逅だった。

第2話 『暗夜行』 (後書き)

大分ストックが溜まっているので、ちよくちよく更新していこうと思います。

第3話 『墓守騎士』

現れた小柄な神父は、急ぐでもなく、ただ悠然と歩み、そして恐らく投げたのだろう棺桶の元に辿り着いた。

茫然としていたローガンは、彼が意外な程若い事に気がついた。

（十歳過ぎ・・・いや、東洋人は若く見えるから十代半ば・・・）
未だに子供とも言えるその顔には、年頃特有の甘えや、温かさは一切なかった。

ただ冷徹、冷酷。戦場を分析し、彼我の実力を思考し、ただ勝ち、殺す事しか考えていな様な、そんな眼をしている。

（・・・中東でもこんな眼をした少年兵はいなかったぞ）

少年は棺桶に巻きつけられた鎖を手にとると、片手で棺桶をリュックの様に背負う。ローガンは更なる事実に気がついた。

「こ、これは鉄で出来ているのか!？」

滑らかに光るそれは、確かに金属の質感だった。

これが全て金属でできていたとしたら、中身がなかったとしても一〇〇キロ近いはずだ。それを砲弾と見違える程の早さでベオウルフに直撃させた。その臂力の凄まじさたるや想像を絶するものがあるだろう。

「俺は下がれと言ったはずだが」

ローガンの言葉に應えることなく告げた少年の言葉に言いようの知れない圧力を感じて、下がる。戦場で、自分がこんな年端もいない子供の言う事を素直に聞いている事に衝撃を感じた。

（一体、なんなのだ）

部下達も茫然としながらローガンの元に集う。

「た、隊長、彼は一体・・・」

危機を救ってくれたのは事実だ。しかし、その得体の知れない様子に言いようの知れない怖気を感じ、部下達の声と体は震えている。

（部下達が怯えている？・・・あのベオウルフにも立ち向かった勇敢な兵士達がか？）

わからん、と答えつつも神父からは眼を離せない。

「さて」

神父はベオウルフに向き直った。

ベオウルフは警戒する様に唸りながら様子を窺っている。

「来ないのか？」

棺桶を背負っていない方の手の平で挑発すると、怒号。怒ったべ

オウルフが先程ローガンに迫った時よりも凄まじい速さで突進。

避けるでもなく、ベオウルフが迫る直前で担いでいた棺桶を楯にする。

ガギィ

ベオウルフの爪の一撃を受けた棺桶だったが、傷一つ付いていなかった。むしろ攻撃を防がれ、はじかれて体勢を崩した状態の敵に棺桶ごとタックルを喰らわせる。まるで車にはねられたかの様に吹き飛び、居酒屋の壁を突き破って中に突っ込んだ。

「ちっ、以外に丈夫だな」

ベオウルフは瓦礫の中から這い出てくる。よろりよろりとしているが、その瞳に戦意の衰えは見られなかった。

しかし、ローガンはただのタックルでベオウルフにあそこまでのダメージを与えられた事に驚愕する。

（強化魔法を使っているのは間違いない・・・しかし）

明らかに人体の限界を超えた力だ。普通は出せないし、出せたとしても肉体が一瞬で崩壊する。

（まさか、使徒・・・）

しかし、その考えは即座に否定する。人類の敵が自分達を助ける

とは思えない。

神父の手には白い手袋がはまっていてタグを確認することは出来なかった。

どちらにしてもただ人に出来る事ではなかった。

今度は彼の方から仕掛けた。ベオウルフを更に上回る速度で間合いを詰めると、棺桶を前に構えて激突、衝撃で壁が崩れない様に棺桶と壁でプレスする。

オッオオオオッ

苦しげに声を上げるが、力を緩めない。壁に亀裂が入り、崩れそうになった直前で棺桶を下げて、ベオウルフの脇腹に回し蹴りを加える。

ゴルフボールの様に飛ばされるベオウルフを見ながら、その圧倒的ともいえる戦いにローガンは戦慄した。

「あ、あんな事が・・・」

正に自分の心情を口に出した隣の部下を、私語で注意する事は出来なかった。

確かに、ベオウルフは天変地異のS級、A級に比べれば脅威としては薄れるかもしれない。しかし、それでもなお、確かな力を持った魔族なのだ。先程は、あれ程準備して、戦って討ちにされた敵を

サッカーボールの様に蹴倒して転がしている。

転がされ、そしてよろけながらも立ちあがったベオウルフに迷いが出る。目の前の脅威を正しく認識したのだ。明らかに自分よりも強い存在である。

撤退、その様な事を考えたであろう瞳が、自らの子の亡骸を目にした途端、再び怒りの色に変わる。

オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

怒りを全て戦意に変えた獣の闘志、殺意に貫かれても、神父は眉ひとつ変えることはなかった。

「息子を殺されて、怒ったか」

淡々と懺悔を聞く聖職者の面持ちで言った。

「復讐の心を刃に変えて立ったか」

神父の、ただ淡々と処理する様に戦っていた顔に、初めて感情が浮かぶ。

「ふざけるな」

その眼は軽蔑するように、唾棄すべきものを見る様に、圧倒的な殺意と、嘲笑、怒り、ありとあらゆる感情を乗せた声と瞳にベオウルフが僅かに押され、下がる。

「勝手な事をほざくな。お前だって、人の、人間の縄張りでさんざん好き勝手やってるんじゃないか」

まるで審判を降すかのような言葉に、ローガン達も聞き入っていた。

「人を殺し、喰らうつもりだったのだろう？」

だったら、自分が殺し、喰らわれたって文句はいえない。

姿が消えた。

否、消えたのではない。単純な速い踏み込みが消えた様に見せたのだ。

グオッオ、オオオオオ・・・・・・・・・・

次の瞬間、ベオウルフは抜き手に胸を貫かれていた。胸元に居る敵をかき殺そうとするが上手くいかず、膝を突き、体から抜けた力と共に命を失った。

「・・・・・・・・エイメン」

最後に彼は小さく呟いた。

雨の音以外が聞こえない、静寂が訪れた。返り血を浴びた僧服を雨が洗い流していく。

しばらく呆ける様に立っていたが、やがて状況に興味を失くしたかのように背を向けて去ろうとする。

「そこの君！」

ローガンは声を張り上げた。大きな声に周りの部下まで驚いて肩を竦ませる。

「・・・・・・・・」

ただ歩みを止め、ゆっくりと振り返る。

冷たい瞳に貫かれながらも、ローガンは臆することなく感謝を述べた。

「ありがとうっ、助力に感謝する。君のお陰で、部下共々命を長らえる事が出来た！」

しばらく、彼は何の反応も見せなかったが、再び背を向ける時に、ただ軽く手を上げた。

そして跳躍、その場から消える。

ベオウルフ二体の死骸を残して、本当の戦いの終わりが訪れる。

地面にへたりこむ隊員達を責めることは出来なかった。

それに倣いたい誘惑を振り払って撤退命令を出す。今日の交戦報告をどう書き記すか大いに悩んだのだった。



誠は確かに鍵が閉まっているのを確認すると、アパートの一室を後にした。

第七区域の工業地区の近くに建てられたそのアパートは、近くに工場に勤める従業員をターゲットにした飲食店、その他商業施設がひしめいている。既に暗いにも関わらず、放課後の暇を持て余してそのまま夜遊びにふける高校生や、赤ら顔で居酒屋を渡り歩くサラリーマンや大学生、彼らを目的にした飲食店の呼び込みで賑やかだった。

三階建てのアパートメントから出た誠は、そんな喧噪を眺めながら帰路に就く。さっきまでアパートにいたのだが、そこは荷物を置く、言わば倉庫だ。自宅は別にある。

「お兄さん、お兄さん」

時計を見ながら足早に駅に向かおうとするが、かけられた声につられて思わず振り返る。

「お兄さんを占ってしんぜよう」

そこには、机にテーブル、椅子に座りながら、その横に手相の看板を掲げた占い屋の中年男性の姿があった。

学校のブレザー姿の誠に椅子に座る様に誘う。

「さあ、その御椅子に座りなさい。今なら安くしておくよ」

その何処にでもありそうな中年の軽薄な顔に顔を顰めると、呻く様に言った。

「『易者』か……」

忌々しげに言う誠だったが、『易者』と呼んだ男の近くに寄る。しかし、用意された椅子には座らなかった。

「やあ、グレイフ ナイト墓守騎士」

親しげに男は話しかけて来た。

「首尾よくベオウルフを始末したみたいじゃないか」

調子よく、テンポよく男の言葉は続く。

「しかし、君が学校に通っていると知った時はビックリしたよ。まさか、級友達も君の本性がこんなだとは思ってもいないだろうね」

誠の瞳が揺れる。

『易者』は意地悪く笑った。

「どうだろう、君の正体を今この場で、皆に晒したらどんな反応を示すだろうかね」

誠は無言で眼の前の机を蹴りあげる。その机が宙に浮き、背後に音を立てて転がるまでの間に、無造作に『易者』の首を掴んで締め上げる。

「ぐへっ」

「あまりに調子に乗るなよ」

悲鳴が上がる。机の音と共に周囲の注目を集める誠だったが、一切構わずに『易者』の首を絞め続けた。

「たかだか局長の連絡役の一人の癖して、いい気になりすぎだ」

小声で、囁く様な声であったが、それを聞いた者がいたとして、そのあまりの冷たさに背筋を凍らせるほどだろう。

『易者』の顔がどす黒くなっていく。怯えと、死への恐怖、絶望に彩られた事を確認して手を離れた。

「げほっ、げほっ、……はあ……はあ」

苦しげに息をしながら膝をつく『易者』を傲然と見下ろす。

「さっさと渡す物を渡せ」

慌てた様に懷から取り出した厚い封筒を誠に差し出す。ひつたくなるように手に取ると中身を確認し、懷にしまった。

「次に余計な事を言ったら殺す」

今度こそ誠は振り返らずにその場を去った。好奇の視線も直に消えてなくなる。夜の喧騒の中に少年の姿は消えた。
？

第3話 『墓守騎士』（後書き）

間違い更新しますた。

幕間 『在りし日』

車の外を男の子が眺める。

高速自動車道に行く4WDは時速一〇〇キロのペースで風を切りながら走る光景は、普段、彼が見る風景とは段違いに迫力があって、その幼い心をときめかせていた。

座席の前を見れば、運転席に座る父親がハンドルを握っている。

彼は父親が好きだった。

起こると怖いけれど、理知的で優しい。彼にとって父親は何でもできる存在だった。

自慢の父親だった。

助手席を見る。

母親が座っていた。

近所でも美人と評判の母親。

甘えて抱きつくといい匂いがして、料理も上手だった。

その母親のお腹は大きい。

弟か、妹か、分からない。

だが、彼はその新しい家族の到来を楽しみにしていた。

父親と母親の自分に向けられる愛情が減ってしまうのは不安があったが、それでも新しい家族が欲しかった。

今は母親の実家のある田舎まで車を走らせている最中だ。

「北条さんの奥さんもおめでただって？」

「ああ、そうらしいな」

「今度、おめでとうって言わなきゃね」

「逆に言い返されてりしてな」

くすくすと両親が笑うのに合わせて彼も笑う。会話の内容は全然分からなかったけど。

「名前は何がいいかしら」

母親がお腹を撫でる。

「名前かあ、でも性別が分からないとな」

正面から目を話さず、窺う様に言った父親に、母親が苦笑する。

「そりゃ、お医者様から教えてもらっているけど・・・まだ駄目ですよ」

彼も新しい家族が弟か、妹かは淒く気になったが、それでも我慢

した。

サンタさんと同じなのだ。

プレゼントされるものが分かっていたら、十二月の二十四日をあれ程はしゃいで過ごせない。

この幸せが永遠に続くと思っていた。
？

幕間 『在りし日』（後書き）

ここまでがプロローグです。次回から本格的に物語が動いていきます。

第4話 『捨て子』

二〇世紀初頭から始まっていた魔法という分野の研究。

大々的にその存在が公のものとされた平成二年まで、それは映画や、漫画の空想の世界での存在でしかなかった。

しかし、それから二十年以上の月日がたち、その存在が広く知られる事になり、今や、魔法に触れた事のない者はいないだろう。

特に、ここ十年ほどでは軍事の分野における魔法の技術的完成がめざましく、タグもその技術の一環であった。

医療においても、現在の医者 of 癌などの外科手術や、治療の最先端は魔法により治療する医療魔法の使い手、医療魔法師が主流なのだ。

魔法の種類としても、筋力の強化、耐久性の向上を可能とする強化魔法、医療魔法、自然現象を操作する事の出来る属性魔法、古き時代からの陰陽師、魔術師らが連綿と受け継いできた古式魔法、そして体質として独自の魔法を固有魔法。また、そのどれでもない。無系統魔法がある。

また、最初の三つ、強化魔法、医療魔法、属性魔法は、以前から存在していた古式魔法などを、才能が左右することなく、万人が使う事の出来る技術として確立したものとなっている。

もっとも、どれだけ領域に到達できるかは才能によってしまのだが・・・

人類は普遍化を可能とした三つの系統の魔法を主軸として、技術、経済、軍事の再編を始めた。急激な価値バランスの変化に時代はどの様に対応していくのか。

そして、様々な種族が渦巻くと共に、魔法文明の最先端の地でもある特区に、特区第五魔法学院に答えがあった。

「はっ」

魔法行使を前提として設計されたドーム型の訓練室、通称闘技場で行われた二年生の魔法実技の格技の講義が行われていた。

その一画で裂帛の気合が少女の声で響く。

「ぬおっ」

気合と共に放たれた右の上段回し蹴りを僅かに避けながら、誠は情けない悲鳴を上げた。確実に強化魔法が使われているであろうその一撃は、丸太を一本へし折りそうな勢いとキレがあった。

僅かに踵が前髪を擦ると、焦げ臭いにおい。

慌てて誠は目の前の金髪少女から距離を開けた。

「ちょ、たんま、たんま！」

「えー、またかよ」

講義も佳境に入り、大分運動している筈だが、少女に疲れた様子は見受けられなかった。

「あんまり休んでちゃ練習にならないぜ？」

少女、エミユルの不満の声を受け流しながら「分かってるよ」と返す。

魔法学院において行われている魔法実技という名を借りた戦闘訓練、ひと昔前だったら政官民のすべてから大きな非難を寄せられそうなそれは、魔法により価値観が変化した世界では、特区では平然と行われている。

（いや、特区だけだろうな）

この都市は巨大な実験施設、モデルケースなのだ。恐らく、特区の人工島を出て本土に向かえば、申し訳程度の魔法実技の講義を行う普通の学校であふれているだろう。

人の価値観も右に同じで、教育における実践的、実戦的魔法の習得を組み込むことによる社会的影響。あくまでも実験であると言う言葉に濁らされているその講義は、特区が設立して以来、ずっと続いている。

各国の軍や警察のリクルーターもたまたに見学に来ているのだ。

「痛いのは嫌なんだよ」

「でも、なんだかんだで上手く避けてんじゃないかよ……よー

し、本気出す」

エミユルの周囲の空気が帯電し始める。

「ちよつ、待てっ」

誠の悲鳴に近い制止の言葉をにやりと笑って無視する。

現代人が使う魔法は、主に三つに分かれているが、一人一つしか使えないと言う訳ではない。大多数の者が一点特化型の魔法士だが、エミユルは強化魔法と属性魔法の一つである電磁魔法を使う事が出来た。

同じように組み手をしていた周囲の学生達も手を止めてこちらに注目していた。誠の目の前には物騒極まりない光景が展開されていたが、直面する当の本人以外はやや驚く程度の表情しか浮かべていない。むしろ、実力を値踏みする様な視線が二人に集まった。

魔法士の世界は実力主義である。力ある者は優遇されるが、ないものは何の恩恵もないのだ。学院の卒業生の全てが魔法士になるわけでもないし、軍人や警察官の職に就く者も、その中で更に一部である。

事実、この魔法実技の講義も、格技の他にも医療系の実技講習、工業系の魔法加工の実践と選択の幅があり、エミユルや誠の様に格技を選択している学生は全体の二割弱だろう。

だがそれ故に、自らの実力に自信を、誇りを持っている者が多い。

「覚悟しろ」

エミユルの顔には笑みと共に汗が浮かんでいた。極度の集中、魔力を使って外界を改編し、魔導制御力で支配する。その準備だった。手を前に差しだし、そこに電力が集中、プラズマとなった球体がエミユルの制御を離れると共に発射された。

パシュッ

何かが弾ける様に発射されたプラズマ球は、正しく光の速さで誠に迫ると腹に衝突。誠を吹き飛ばした。

まるでゴルフボールの様に飛んでいく誠は、訓練室の壁に思いっきり衝突すると、落下した。

「え、あ、おい！」

エミユルは自分が造り出した光景であるにもかかわらず啞然とし、プスプスと煙を上げる倒れた誠に駆け寄った。

「お、おい、しっかりしろよ、おい！」

必死の形相で語りかけるエミユルに、誠は呻きながら応えた。

「・・・心配してくれるんなら、あんな雷撃、放たないで欲しかった」

「う、い、いつもみたいに避けると思ったんだよ」

ほっとしながらも無然とした表情で拗ねるように言うエミユルに苦笑しながら、「よっこらせ」とじじくさい掛け声で立ちあがる。

辺りは既に自分達に興味を失ったらしく、各々の訓練に取り組んでいる。

「それにしても、今のプラズマを受けて良く生きてたな」

「攻撃した本人が言うなよ・・・まあ、電磁魔法は見た目の割に手加減が効きやすい魔法だからな。室内で人相手だし、無意識のうちにセーブしてくれたお陰だろう」

服がすっかり焦げ臭くなっているのに顔を顰めながら訓練室を出てすぐの場所に設けられたウォーターサーバーに移動して水を飲む。

そこで授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

午後の最後の授業、これで放課だ。

エミユルは夏休みに入った小学生の様な声で言った。

「で、どうする?」

「どうするって?」

「この後の予定だよ。暇なら駅前のゲーセン行こうぜ」

こう言ったところでスイーツなどという言葉が出てこないところが、元が少年であった事を思い出させる名残だった。

「悪い、今日はオルガンのメンテナンスを業者に頼んでるから、帰らなくちゃ」

「ああああ、ああ、そっか……」

面白い程にエミユルがしぼんでいく。まるで反応が男子小学生だ。

「お前も大変なんだもんなあ」

「ご免な」

「まあ、いいよ」

すると一転、天使のような微笑みを浮かべて言った。

「次は絶対に付き合ってくれよなっ！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

誠は手を途中まで一緒に帰宅していたエミユルが、ぶんぶんと振って笑いながら立ち去るのを見送って分かれると、誠は帰路についた。

歩いて五分。

学校関連の施設の多い第五区域は、そこに通う学生や、働く教師、研究員の住居も多い。

誠の自宅も、そうやって設けられた住宅街の一画にあった。

（まあ、住宅街にあっても、民家ってわけじゃないんだよねあ）

人工島自体の歴史も深くなく、全体的に綺麗で完成な住宅街の中に一際大きい建造物が眼に入る。

教会だった。

カトリックらしく、清潔感と優美さを兼ね備えた宗教的建造物。建物の周りを草木が覆う姿が芸術的で、近所の絵描きや、写真を趣味にしている老人がよく取りに来る。

「さて」

閉まっている大きな正門の扉を音を立てて開く。そろそろ油を差さなければなどと考えながら、誠は我が家に帰宅した。

「いや、ない」

誠は言った。その場には誰もいない。いや、いないとは語弊があったかもしれない。誠の視線の先の段ボール、その中に毛布で包まれますやすやと眠りにつく赤ん坊。生後三ヶ月程だろうか？

「い、いや、ないって、ありえない、あれは、その、とにかくない」

その言葉に戸惑いと、恐怖、そしてそれを凌駕する現実逃避と言う名の忘我が含まれていた。

『私はもう疲れました。これからは貴方が育ててください』

まるで拾ってやって下さい。段ボールに描かれて捨てられた犬が猫の様な赤ん坊。それが置き去った人間の勘違いと言うのもありえなくはないと言いたいが、それが置かれていたのは誠の自宅である教会、聖堂部分ではなく、丁寧にも居住部分の玄関の前だ。しかも『蓮杖誠様へ』と丁寧に書かれている。

「いや、ないって、俺って、ほら、あれだから、とにかくない、これがああしてああなって、とにかくない！」

誰かに見られたら一片たりとも言い訳を許されない状況である。

「だっ」

赤ん坊が眼を覚ました。きよろきよろと見渡し、一瞬泣きそうな顔をした後に誠に眼をやり・・・

「だ！」

元氣よく、機嫌良さそうな声を出した。

「う、う、ばあ」

パパ？

「ち、違うよ、違うよ、パパじゃないよ、断じてそんなっ・・・」

「何やってんだよ」

背中から聞こえた声に凍り着いた。

「え、エミユル？」

「ああ、そう言えば、明日は暇なのかって、思ってた……」

そして『私はもう……以下略』を見やる。

いつも元気、笑顔のエミユルの顔が絶対零度のそれに変わった。

「……腐ってる」

「いやいや待てっそれは誤解である事この上ないぞ！」

「認知する気がないなんて……最低だな」

だめだ。完全に人の話を聞く気がない。

（まてまて、良く考えろ！）

信じていたものに裏切られた、絶望した顔で背中を向けて、とぼとぼと外に向かうエミユル。

「ちょっと待って!？」

「……らいだ」

呟く様に言ったエミユルの言葉を消える様に小さく、そして繰り返した。

「誠なんて、誠なんて、大っ嫌いだ！」

脱兎の如く駆け出すエミユルを引きとめる暇すらなかった。

(二体、どうしろって・・・)

う
.
.
.
.
え
.
.
.
.

そして不安を感じさせる微かな声が赤ん坊から。

⌋
^
?
⌊

う、ぶ、びえええええええええええええええええ

じわじわと眼に涙をためると爆発するように泣き出した。

赤ん坊とはよく泣く生き物であることは知識として知っていたが、
 実際目の前で泣かれると焦るものである。

「あらあら、どうしたのかしら」

場違いな程、否、むしろ場に即した落ち着いた声が響いた。

「あら、可愛い赤ちゃんね。男の子かしら」

玄関の扉が内側から開いて若い女性が顔を出した。

歳は二十代後半、化粧気はないが美しく、淑やかという言葉が似合う女性は、低いヴェール付きの帽子を被ったシスターだった。

「叔母さん」

蓮杖寿、母の妹であるこの女性は、誠の保護者でもある。

「叔母さんはやめてね、オバサンは……」

一瞬、叔母の後ろに般若が見えて小さく誠は震えた。

寿は赤ん坊を見やり、『私はもう……以下略』に眼を向けると、
「あらあら」と面白そうに口元を押さえて、面白そうに告げた。

「誠君も、可愛い顔してやる事はやっているのねえ」

「いやいや、違うから。俺、心当たりないから」

叔母の眼が光る。

「あら？心当たりないの？それも寂しい話ねえ」

「……だから何だよ」

僅かに頬を赤くなるのを自覚した。叔母とはいっても、綺麗な女性にそう言った事を言われれば誰でも照れる。

「まあ、面倒みておやりなさいよ」

「誰か引き取りに来るまでは、まあ」

家の中からドタドタと階段を降りる音が聞こえて来た。

「あら、琴音かしら」

蓮杖琴音は寿の娘である。中学二年生になる琴音は、母に似て、既に美人の片鱗を見せ始めているが、そこは女子中学生。『私はもう・・・以下略』を見たらどんな反応をするか、火を見るよりも明らかだ。

それにしても寿は、本当は何歳なのだろう。中学生の娘がいると言う事は、少なくとも三〇・・・

背筋に冷たいものを感じる。

そう言えば、と寿は切り出した。

「教会の方でいつものお爺ちゃんが懺悔室で待ってるわよ」

「ッ・・・分かった」

ひとまず赤ん坊を押しつけるとその場を退避する。聖堂に周り、中の懺悔室に向かう誠の顔を冷たく、厳しく引き締まっていた。

ノックもせず、懺悔室の扉を開けると、網目状に組まれた木のついで、向こうには和装の老人の姿。

「久しいな、墓守騎士よ」

もう一つの名で誠に語りかける老人は不敵に微笑んだ。
？

第4話 『捨て子』（後書き）

お気に入り登録してくれた人有難う！
なんか一人で舞い上がってます（笑）

第5話 『偽りの日常』

空も赤みがかかり、第五区域の住宅街に時報が鳴り響く。

道端で遊んでいた子供達が遊びを中断して空を見上げ、また明日遊ぶ事を約束して各々の家に戻る光景を横目に金髪の少女がとぼとぼと歩いていた。

カンッ

足元に転がったスチールの空き缶を蹴りながら歩く姿は、長身で、幻想的とも言える妖精族の美少女がやると、違和感を覚える事この上ない光景だったが、口を尖らせていじけた様な表情のお陰で不思議と相応に見えた。

「馬鹿野郎」

呟く様にエミユルは言うと、元々悲しげに歪んでいた顔の眉を更にハの字に曲げる。

自分でも何に怒っているのか分からなかった。

エミユルが誠に出会ったのは中学に上がってすぐ、現在の魔法学院の中等部に入学した時のことだった。

当時は誠の見た目も年相応、自分も雌雄確定前の妖精族らしく、男として学校に通っていた中での第一印象は、それ程強くはなかつ

た様に思う。

便宜的に男の格好で学校に通ってはいたが、そのどちらでもなく、更には当時から魔法士として高い素質を持っていたエミユルは、人間以外の種族が多い学校であっても浮いていた。

思えば、見た目は普通なのに、誠も浮いていた様に覚えている。

昼休みに、遊ぶでもなく、ただ自分の席で呆けてお茶を飲んでいく姿などをよく見かけた。

あれ、こいつ、何か違うなっと、当時は浮いている者同士の共感を感じてエミユルから誠に話しかける様になった。最初は鬱陶しそうにしていたが、エミユルの生来の明るさに押されて、それなりに深く付き合う様になる。何度か誠の家である教会にも顔を出した。誠の家族も良く接してくれたが、誠の従妹にあたる妹からは、エミユルが女性体に変異して以降、あまり良い顔をされないの、自然と足が遠のいている。

妖精族は総じて見目麗しく、魔法に対する適性が高い。加えて、最大の特徴とも言える。性別の未分化は、主に一〇代半ばで雌雄のどちらかに確定する。大抵の妖精族はそれまでは男として学校に通っている。

一〇代半ば、と言っても、何か特別なホルモンが分泌される様になる訳でも、そこから特別な成長が急激に起こるわけでもない。切っ掛けは、その年頃の少年少女が最も抱きやすいモノ、異性への興味だ。

性別があやふやな妖精族は、本人が最も好ましく思う相手の性別

に合わせて形態の変化を始める。それは恋愛感情以前の、単純な「ああ、こいついいかも」程度の好意だが、大抵の場合はその者は近しく、親しくしている者が対象となる場合が多い。

さらに、男女問わず妖精族は器量も気立てもいいので、目当てとした相手をほぼ確実に仕留める（？）事が出来る。種族としてかなり完成されたシステムだった。

エミユルは考察する。恐らく、自分の場合は誠だったのだろう。

それはそれでいいと思った。元々、自分達は自身の性別に対する意識が希薄だ。誠がその相手というのはそれ程悪くはない。

エミユルは父が妖精族で母が人間であるが（妖精族の異種間婚姻は八割以上に及ぶ）未だに仲睦まじく、結婚記念日は二人で旅行にいつて御泊りしてくる。

二人は高校時代に出会ったと聞いた。恐らく、自分も誠とその様になっていくのだろくなと漠然と考えていた矢先に……

「あれだ」

怒りをにじませた声が思わず外に出ていた。

既に自分の体は誠に合わせて進化してしまっている。その体が、自分の伴侶となるべき人間の不貞に怒り狂っているのをエミユルは感じた。

「……馬鹿野郎」

カンッ

（別に、そういう関係になった訳でも、約束したわけでもないんだけどさ・・・）

少し落ち込んだ。

ふと思い出す。妖精族が最も犯す確率の高い犯罪は、痴情の縛れによる刃傷沙汰だと言う。遺伝子レベルの情の深さ故だ。

誠がそれを恐れていて、今までは上手く付き合っている振りをしていたのでは考えると更に落ち込んだ。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

「久しいな、グレイブナイト墓守騎士よ」

つい立越しに見る和装の老人は、能登上布の着物と紗の夏羽織を洒脱に着こなして世慣れた隠居を装っていたが、短く刈り込んだ白髪の下に見える鋭い眼光と、細身ながらも長身で、引き締まった様子からは、彼がただの老人でない事を示している。

年齢は分からない。が、第二次世界大戦の末期を満洲で戦ったという話を聞いた事を考えると、それなりに高齢であることは確実だ。

「何で、あなたがここにいます。局長」

特区管理公社、警備局局長がこの老人の、桜木厳十郎の肩書だった。それだけではない。特区管理公社、単に公社と略される事も多い組織の上位意思決定機関、BABEL最高評議会の日本人唯一のメンバー。

恐らく公社のトップは扱いに苦慮しているだろうと思う。部下である警備局局長が上司でもあるのだ。

くだらない事を考えていると、厳十郎が口を開いた。

「私の手の者が失礼をした様だな」

言っている意味は直に分かった。

「別に、気にしていませんよ。それを言いに態々？」

「始末した」

「は？」

一瞬、言っている意味が理解できなかった。

「始末したと言っている。私とお前の契約の中に、お前の領分を侵さない事を遵守する事が含まれている。その事は重々言っておいたのだが、詰まらん色気を出した事は万死に値する。警備局に対する反逆だ。相応のばつは受けさせねばならない」

「・・・だからって殺さなくても」

蔵十郎はじつとこちらを見つめる。普通に見ているだけなのに、何故か睨みつけている様に見える。

「ふっ」

珍しく、名前の通り蔵の様な顔に僅かながら微笑みを浮かべて、懷から分厚い封筒を出し、放る。つい立越しに、狭い机の上に、どさ、と音を立てて置かれたそれを見ながら言った。

「冗談だ。殺してなどいない」

「・・・悪い冗談だ。これは？」

「報酬だ。お前の金をちよるまかしていたらしい。その分の補填だ」

この老人がわざわざここに足を運んできた理由が分かった。この人物は契約とその履行に、自分自身も含めて恐ろしく蔵しいのだ。その不履行の謝罪も兼ねているのだろ。普段は、半年に一度程、様子を見に（恐らく監視の意味も含めて）やってくる程度なのだ。

「それだけだ」

老人は機敏な動作で立ちあがると、杖を使う事もなく懺悔室の外に出る。聖堂を出ると、そこで寿と出くわした。

「あら、もうお帰り？ よろしければお茶の一杯でもいかがですか。いいキンツバがあるんですよ？」

叔母の言葉に蔵十郎は眼を細めると、僅かにお辞儀して誘いを辞

する。

「お誘いいただきありがとうございます。しかし、老骨ながらも忙しくてね。残念極まりないが仕事に戻らねばならない」

にこやかに返すと、丁度教会の前に止まっていた黒いセンチユリ
ーが自動でドアを開く。

「それでは失礼」

正に老紳士然とした雰囲気でその場を後にする蔵十郎を咄然とし
ながら見送る。あまりの変わり身の早さだった。

「あら、振られちゃったわね、仕方ないわ、そろそろお夕飯の準備
にしましょう」

叔母に促されて自宅に戻る。ああ、そうと寿は切り出した。

「琴音への良い訳も考えておいてね」

軽くウィンクしながら告げられた辛い現実には、誠の意識は綺麗な
夕日へと現実から逃避した。

？

カンッ

「・・・・・・・・馬鹿」

？

第6話 『曇天』

東京湾に浮かぶ経済特区は、しばしば雨が降る。

理由は様々挙げられているが、地理的要因とも、また、オカルト的（近頃一気に信憑性のある形容詞になった）要因とも言われている。

また、日本の領海内にありながら、独立自治区という事で、独自に“国土”の警備を行う必要がある特区にも、海上自衛隊から払い卸された一〇〇〇トン巡視船による洋上の警備が行われている。

「定時報告、一七〇〇時、異常なし」

既に空の闇は深く、海の色は暗く、のぞきこむと吸い取られてしまふ錯覚を覚えながら、洋上の警備隊員は提示報告を終えた。

「そろそろ交代の時間だ」

一緒に警備にあたっていた同僚が声をかけてくる。

定時報告をした彼の顔に安堵の色が浮かぶ。

二人は管理公社警備局の警備部、主に洋上警備を担当する第八部隊に所属する隊員だった。

「流石に疲れたよ」

「疲れたって言うても、ただ海を眺めているだけだぞ？」

「だからさ、こんな暗い景色、見ていだけで嫌になる」

「違う、と同僚の首肯で二人に静かな笑いが漏れた。

そろそろ特区の人工島に戻る頃合いだと思っておかしな事に気がつく。

「なあ、この船、少し流されすぎてないか？」

「ああ、操縦担当が居眠りでもしているのか」

懲罰ものだな、と笑いながら起こしに行く事にする。せいぜい、気を抜いているだけだろう。この船には他にも大勢の隊員が乗っているのだ。

海上で揺れる甲板を器用に歩きながら操舵室に辿り着くと、ノックをしてドアを開ける。

「そろそろ進路を特区に……」

彼の表情は固まった。そこには彼と同じように警戒任務についている隊員、休憩中の隊員、そうだ席に座っている隊員、通信設備の前に陣取っている隊員がいたが、彼らの全てが、突っ伏し、あるいは倒れて意識を失っていたからだ。

「おい、どうした……」

後ろからやって来る同僚の隊員も、その光景を目にして言葉を失い、すぐさま仲間達の元に駆け寄る。

「おい、どうした!？」

一人一人助け起こすが、全く反応がない。まるで死んでいるよう
だと思って、恐る恐る脈を測る。

(ツ………)

「こ、こいつら、死んでいる」

もう一人も同じ結論に達したらしい。

「と、とにかく報告だ」

通信機器の前に立ち、無線で本部を呼び掛けるが、ひたすらノイズが奔るだけだった。

「ど、どうする?」

「……とにかく蘇生を」

「いや、もう遅いだろ」

「そうだな、もう遅い」

船室に声が響いた。

「誰だ!」

警備兵らしく、肩から下げたアサルトライフルを振りまわすが、何処にも誰もいない。

「があっ！」

彼は同僚の上げる悲鳴の様な声に驚いて、振り向きざまに銃を向ける。

そこに、二人以外の人が居た。

第三の人物は、同僚の後ろから襲いかかり、その首筋に牙を突き立てている。

人食いかと一瞬思ったが、その喉元が動いているのを見て、直感で血を吸っているのだと分かった。

「やれやれ、やはり男の血は不味いな」

ようやく首元から口を放すと、同僚は床に倒れ、血を吸った人影の姿が露わになる。

男の様だった。様、と言うのは、その男が余りにも人離れして美しく、中性的だったからだ。銀色の髪は、船内の僅かに灯された光が反射して光っているかの様で、ダブルのダークスーツを着こなしている姿は、まるで貴族か王子様だった。その顔には唇の血と共に、完璧なアルカイクスマイルを浮かべている。

そんな事よりも異質で彼の気を引いたものそれは男の血に濡れた唇からのぞく、長い牙だった。

瞳が赤く光る。

吸血鬼、そんな印象を彼は持った。

ようやくそこで、彼は軍人として取るべき行動を取った。

「き、貴様、何のつもりだ！」

銃口をしっかりと吸血鬼の男に照準すると、引き金を絞る。

ダダダダダッ

凄まじい音とマズルフラッシュが起こり、訓練された彼によって撃たれたライフルの弾は、殆ど吸血鬼の体に当たった。穴があき、血がふき、腕が千切れ飛ぶ。

（どうだ・・・）

「どうだ、やったか・・・などと、ありきたりな事を考えてはいるまいな？」

しかし、吸血鬼は銃弾を受けた衝撃に倒れる事すらなく、その傷の痛みに悶える事もなく、ただ平然と立っていた。

「やったか、と思う時の大抵はやっていない時と知れ」

そして、彼は信じられない光景を見る事になる。

飛び散った血が、千切れた腕が、穴が開いた体が、服ごと、映像を巻き戻す様に元に戻っていく。

「なっ」

「そうだ、その顔だ。私はいつも、虫けらが驚き、絶望した顔を見るために攻撃を受けている」

愉悦に満ちた男に言葉を返す事も出来ずに、強力なライフル弾の攻撃をなかった事にしてしまった事実には彼の精神はくじけた。

「・・・もう希望を見出す事が出来なくなってしまったのか。つまらん」

吸血鬼の男は彼を床に引き倒すと、その首筋に喰らいつく。

絶叫は長く続いた。

そして、船内が静かになった頃、吸血鬼の男は彼から口を放すと、血に濡れた口元をぬぐう事もせず、窓枠から見える特区を見つめた。

「待っているがいい」

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

特区第一区域には、公社により運営されている管理機構が多く存在する。

住民登録、確定申告、婚姻届といった、本土であれば市役所が行っている業務から、特区警察省と言った様な、独自の武力による自治権の維持、果ては、本土である日本、その他、特区の甘露を吸い取るうとする者達から政治的に防衛を諮る外交機関まで、ほぼ全ての政府機能が集まっているその姿は、霞が関や虎ノ門を彷彿とさせる。

他国からの侵略を防ぎ、また領内の治安を維持する警備局の本部庁舎もそこにある。三二階で落成から間もない庁舎は、まるでガラスでできた工芸品を思わせる美しさであるが、軍隊と警察の両方の性質を備える彼らは、その訓練を、庁舎の地下に設けられた訓練室で行う。

「動きが鈍っているぞっ！」

ローガン牧島は訓練室で声を張り上げる。

訓練室と言っても、広さは野球場ほどもあり、高さについても同様である。その広大な空間であっても轟くローガンの声に、更に隊員達は訓練に熱を上げる。

「熱が入るな」

後ろから声がした。振り向く前に人物を特定したローガンはすぐさま敬礼する。

「局長、ありがとうございます」

警備局局長、そこには和装の老人が立っていた。

「いつにもまして激しい様だが」

「は、任務を通して、私も含めて未熟を痛感いたしました」

先日のベオウルフはかなり危なかった。ローガンも含めて、隊員は優秀な上、高度な訓練も受けている。慢心はなかったが、それでも、未だに世界中で、ここまで魔法を上手く運用できる部隊も少ないだろうと考えていた。

「情報部の調査ミスだ。部隊長が君に申し訳ないと言っていた」

諜報、情報操作、マスコミのコントロールも含めた、裏方の部隊とは、一度も顔を合わせた事がない。機密保護のためだった。恐らく、局長以外に知るものはいないだろう。

「何にしても生き残ったのだ」

しかし、それは自分達が独力で掴みとった結果ではなかった。無念にも、二体目のベオウルフに破れ去ろうとした時、現れた少年。彼が全てを薙ぎ払った。

ありえない。あんな化物じみた強さを持つ使い手は見た事がなかった。だが、現実として自分達は生き残っている。その戦う様はまるで神代の時代の闘神の様だった。

「……一応、報告に上げさせていただきましたが」

「ああ、僧服の少年神父の事だな。問題ない」

そして次に老人が放った言葉にローガンは驚愕する。

「あれはこちらの手の者だ」

耳を疑った。

「・・・今、なんと」

「ありていに言う仲間だ、あれは。でなければ、間一髪でお前達の援軍に間に合った訳

が説明出来んだろう。情報部の不手際が報告として上がってきたので向かわせたのだ」

驚きが収まらなかったが、どこかで納得する部分があった。

（通りで・・・）

「あれはただ働きで人助けをする程お人よしではない。特に特区の闇に関わる者にはな」

心の内を看破されて思わず息をのんだ。確かに、あの少年神父は正義の徒には見えなかった。ベオウルフが暴れていると言う事を含めても、自ら戦場に立ちそうな雰囲気ではなかったのだ。

本人が聞いたら怒りだしそんな酷評を心の中で降す。

しかし、と思う。

自分は《上級三位》、他の隊員も勝るとも劣らない非常に優秀な魔法士である。それなりに長い軍隊経験の中で《上級一位》と呼ばれる最高峰の戦士達とも戦友として戦った事もあった。それでも、あの少年程の強さを持っていたとは思えないのだ。

（あれでは、あれではまるで使徒ではないか）

人類の敵、災厄の超越者達。人でありながら人を辞めた強さの持主たち。

「別に、人類の敵が使徒なのではない。使徒が人類の敵となるのだ」

「それはどういう・・・」

「人類を守護する使徒が居たとしても構わないだろう？」

そして、と続ける。

「やつは《墓守騎士》グレイフナイトは人類を守る使徒だ」

裾を翻して立ち去る警備局長に慌てて敬礼をしながら、後ろ姿を見送る。

呆然としながら敬礼の状態で固まり、そして考える。

（そうだ、まだまだ足りない。練度も、経験も）

老人と入れ替わりに一人の女が入ってくる。

「せいが出るわね」

妙齡の女性だった。

賢狼族の特徴である犬耳に尻尾、そして、それ以外はほとんど人間と変わらない事から、比較的に人間社会に深く、多く入りこんでいる種族の一つ。

第二課行動部隊の隊長、マリアキャンベル。整った顔立ちながらも、軍人として厳しく引き締まった顔立ち。後ろから部下達を、女王に傳く家臣の様に引きつれてくる。

「先客がいた様でけれど・・・合同訓練なんてどうかしら？」

「ああ、構わないさ」

警備局は部隊間のいがみ合いは殆どない。が、合同訓練となる以上、互いの威信と言うものが関わってくる。ローガンは自分も含めて、第一課の隊員達の気持が引き締まるのを感じた。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

「九〇一、九〇二、九〇三・・・」

ギシ、ギシ、と何かが軋む音と共に、規則的に響く小さな声。

静かで、それ以外は何も聞こえない。一つ一つ丁寧に刻まれてい

く数字はやがて九五〇を超え、さらに千に至った時、勢い良く何かが開け放たれる音がした。

バンッ

「お兄ちゃんッ!？」

ドアを勢いよく開け放って現れたのは、蓮杖誠の従妹、蓮杖琴音だった。

母親に似て目鼻立ちの整った、綺麗な顔をしている。長い髪の毛をポニーにし、シャツにホットパンツという部屋着姿だが、琴音も一四歳、最近は眼の毒になってきたと思う今日この頃である。

「今日はお風呂掃除はお兄ちゃんが……きゃあっ」

勝気な瞳が一転、驚きに変わり、羞恥に落ち着くと、悲鳴を上げて琴音が飛び退く。

誠は自分の部屋で、上半身裸で腹筋をしている最中だった。専用の器具に上半身に何も着ずに寝転がる男と言うのは、確かに思春期の女の子には刺激が強く映るのだろう。

「どうかしたの？」

「ちょ、いいから、早く何か来てよ!」

体をタオルで拭き、適当にシャツを拾って着る。

「で、どうかしたの？」

「……ふる掃除、ちゃんとしてよね」

リアクションを無視された琴音はじと眼で誠を睨んで、ドアを閉めて去って行った。

「……………」

再びシャツを脱ぐ。まだ腕立て伏せが残っているのだ。

「一、二、三、四……………」

誠は強化魔法しか使えない。馬鹿力と、異常なまでのタフネスでひたすら力押しをするのが誠の戦法である。

常軌を逸したほどの魔法の加護を得る事が可能だが、土台となるのは自身の体である。こうして、毎日鍛えて少しでも力を受け入れられるキャパシティをつくっていく事は必要不可欠だった。

小柄な体ではあるが、腹筋は綺麗に割れ、胸筋、後背筋は恐ろしい程引き締まっている。しかし、その体に筋肉質であったり武骨といった印象はない。むしろ、鋼の束が寄り集まって彫像になった様な、一種の機能美の究極がそこにはあった。

体が熱を持ち始め、汗ばんでくる。数は百を超えていたが、勢いが衰える事はない。

誠は小柄である。故に筋繊維の積載量にはおのずと限界があり、

であるからこそ、密度を高める事に力を入れている。

黙々と、囚人が暇にかまけてするようにトレーニングを消化していく。

やがて回数が千を超えると、そのまま倒立、ゆっくりと足を地に下ろして床に立つ。

「ふう」

筋力トレーニングは終わったが、これは準備運動に過ぎない。これから本格的な鍛錬が始まる。

誠は、誠と繋がっている存在を眼ではなく、魔力で感じ取り、チャンネルを開く。

「ぐつ、ぬ、お・・・」

その瞬間、僅かにではあるが、濃密な魔力が漏れる。人である誠ではありえない程の力の気配が誠から放たれるが、すぐさま、その力の手綱を握る。暴れ馬の様に暴走するのを無理やり押さえこんでいく。

とある事情により、誠には無尽蔵とも言える魔力が供給されている。しかし、それを制御しきれなければ意味はないのだ。魔力は生命力であり、人によって大きく変わるものではない。故に、魔導制御力は魔導制御率と言われる事もあり、魔力を一とした場合、普通の魔法士の制御率は四〇％から六〇％と言われている。つまり、効果として現れる魔法は〇、六であるが、誠の場合、魔力の一を、五にも十にも出来る力を持っている。魔力が増える程制御力は落ちて

いくため、少しで力を発揮できるために少しでも掌握出来る魔力量を増やす鍛練が必要だった。

「・・・・・・・・・・はー」

ゆっくり、肺から絞り出す様に息を抜いていく。

誠は構えた。空手の型だ。小学生のころ、はじめてすぐに止めてしまったが、僅かながら道場に通っていた時期がある。魔法士となつて以来、その型を思い出しながらなぞるのが日課となっていた。

正拳を突く、首刀を入れ、膝で碎き、抜き手で貫く。ゆっくりと空気を揺らさない様に慎重に、確実に。

その動きには一切の澱みがなく、独学ではあるものの、誠の技がかなり高い水準で練られている事を証明している。

まるで舞踊の様な厳かさがそこにはあった。

だが・・・

う、う、ひぐ

「あ、あれ？」

誠の顔が焦つたものになる。見れば、ベッドに乘せておいた赤ん坊の姿。寿は買い物中、琴音からは『自分の息子でしょ』と切り捨てられて、結局放っておくわけにもいかずに近くにおいていた。

琴音が心配そうな顔をして部屋を覗きに来了。

また上半身裸に顔を赤くし、眉を吊り上げるが、凄絶に泣く赤ん坊を見て仕方なさそうに溜息をついて言う。

「ほら、かして」

⌈
^
?
⌋

「お兄ちゃん、ごつごつしてて痛いんだよ、きつと」

誠から琴音の腕の中に収まると、ピツタリ泣き声が止まる。

「お、よしよし、良い子でちゅね」

ドヤ顔で誠を見る琴音。

だが、現実はそのままで甘くなかった。

う、
う、
びえええええええええええええええええええええ

「な、何で？」

「ちゃんと女の子だよ？」

誠は考える。きっと自分たちに足りないものがあるのだ。いや、あるものか。寿にあつて、自分たちにはないもの。あるいはあるもの、それは……

（あっ）

「なあ」

「何よ」

「思っただけど」

琴音の胸を見て

「ごっごっしてて痛いんじゃない？」

「……死んじゃえ、馬鹿！」

綺麗な上段回し蹴りが、誠の側頭部に決まった。
？

幕間 『煉獄』

焔、苦しみに呻く人々、流れる血。

それは、彼が生きて来た中で最も恐ろしい光景だった。

自分達が乗っていた車の上には大きなトラックが乗り上げている。

恐怖で足が竦みそうになった時、母親の事を思い出した。助手席のある位置まで回って、蜘蛛の巣の様にひび割れて中が良く見えな
い窓ガラスを叩く。

「お母さんっ、お母さん！」

叩いて、叩いて、掌が血まみれになって来たところでガラスが割れた。

「おかあっ」

母親は死んでいた。

顔じゅうのありとあらゆる穴から血を噴き出し、首をありえない程捻じらせ、白眼を向いて……惨い死に方だった。

「う………ぐっえ」

唐突な吐き気を耐えきれず、その場で嘔吐する。

自慢の母親だった。優しくて美人、近所でも評判の母親だった。

彼は何か何だか分からなくなってきた。

「うつ……」

運転席の父が呻いた。

「お父さん！」

咄嗟に、運転席の前までまわる。こちらの窓ガラスは既に割れていた。

「お父さん！」

「……お前か」

口から血を吐き、ガラスで体中を切り裂かれていたが、父親は生きていた。

「お父さん、お母さんが！」

「……ああ、お母さんはもう駄目だ」

血が喉にからまるのだろう。不明瞭な声だったが、目だけは強い意思の光を灯していた。

「お前はもう行きなさい」

「え、何で!？」

一瞬、父が何を言っているのか分からなかった。

「ここは危険なんだ。お父さんも後から追いかけるから、安全な場所避難しなさい」

「で、でも、お母さんが、お腹の赤ちゃんだつて！」

「分かってる、ちゃんと助けて後から追いかけるから……」

苦しげにせき込んだ。

「……だから、だから先に行きな」

「本当に？」

本当にお母さん大丈夫？」

「ああ、心配いらない」

「お父さんもだよ？」

「ああ、ちゃんと追いかけるから」

父は車の中から手を伸ばし、彼の頬に触れた。

「お前は良い子だ」

優しく彼を撫でていた父の手が、急に彼を突き飛ばした。

「うわっ」

思わず尻もちをついた。

ズゴオオオオオオオッ

車の上に乗っていたトラックの重量に耐えきれず、彼の目前にあった父と母と未来の家族となるべき存在は押しつぶされた。

「う．．．わ．．．．．」

感情が暴発しそうだったが、彼は父親が残した逃げると言う言葉を忘れていなかった。根拠はなかったが、言うとおりにすれば、後から父が追いかけてくるような気がしたからだ。

彼は立ち上がる。

逃げる場所を探そうとして、ある一点が彼の視線を釘付けにした。

高速道路を覆う外壁に、まるでサーカスの様に立ちながらこちらを見下ろす人影。

女だった。歳は十代半ば、銀色の髪に白磁の様な肌、まるで妖精の様な可憐な顔立ち黒いドレスを身に纏い、冷然と彼を見下ろしている。

「．．．．．」

彼は、その瞬間だけ、家族の喪失も、自分の体の苦痛も全て忘れ

てしまっていた。

綺麗、ただ、美しいものに対する感動の心がそこにあった。

第7話 『黒蛇』

特区は第一から、第七区域までである。

政府機能が集中する第一区域を中心に、第二、第三と、数珠つなぎの様に輪を成している。

第五区域は住宅街や学校施設、第七区域は工場施設が集まっている。では、間に挟まれた第六区域は、と言うと、一番外からやってきやすい地域であるため、商業区域に指定されている。もちろん、他の区域にも商業施設はあるが、民間企業のオフィスから、デパート、総合スーパーなど、様々な店が立ち並ぶその区域は、特区でも有数の広さを誇っている。

「おっそいなあ」

態々声に出して不満を漏らすのはブレザーを着た女子高生だった。夏である事を考えるに、まだ入学したての一年生なのだろう。未だに初々しさの様なものがある。さっそく短くしたスカートを揺らし、特区における、電車に変わる交通手段であるモノレールの駅の前で、壁に寄り掛かっていた。

「まゆみ、おっまたせ」

友人が手を振りながら走り寄って来る。

「どうしたの高子、いつも早いのに？」

「いやあ、医療魔法概論で赤点取っちゃって」

同じ制服を着る二人が、学校談に花を咲かせている。まゆみと呼ばれた少女が、眼鏡をかけて、いささか真面目そうな文学少女顔をしているのに対して、高子と呼ばれた方は明るく快活で、よく日に焼けている。まるで陸上部の短距離選手のようなスポーティな体が表示通り、活動的な少女だった。

特区の学校は、多かれ少なかれ魔法の講義を生徒に受けさせている。出てくる話に魔当然の様に魔法が上がる辺りが、特区にしか見られない光景かもしれない。

「また？」

確か、数学もぎりぎりじゃなかったっけ？」

「うん、まゆみは医療魔法得意だから羨ましいよ。卒業したらそっち関係の専門に通うんでしょ？」

「そのつもり」

「まあ、あたしにはその分実技があるからさ」

拳を突き出す高子。

「高子は警察で魔法士になるのが夢なんだもんね？
就職は本土？」

「ああ、そこなんだよなあ。欲を言えば特区の警備局に行きたいけど、あそこってすごいレベル高いんだよね」

進路の不安、悩みに相談も、この年頃にしか出来ない事。通りか

かった年配のサラリーマンや、買い物に訪れた主婦達が、聞こえて来た会話にそつと微笑む。

「ま、補修もめでたく決まった事だし、今日は切り替えて遊ぶぞ！」

「・・・後で一緒に勉強しようね、高子」

元気よく歩き出した高子が、『あっ』と立ち止まる。

「どうしたの？」

「いや、今、変なの見た気がする」

何かを探す様に辺りを見渡すが、これと言って特別なものは何も見えない。

「いやさ、子供みたいな神父さんが空飛んでたんだよ」

何それ、年頃の少女らしく、二人で元気に笑った。

▼
▼
▼
▼
▼
▼

『どうかしましたか？』

誠は強化魔法を使いながら一〇階建てのデパートから跳躍、緩やかな弧を描いて、五階建てのテナントビルの屋上に着地した。

「いや、何でもない」

一瞬、鼻がむずむずしたただけだ。

『気をつけて下さいね？』

その地域は特別人が多いので・・・』

耳のイヤホンが繋がれたマルチ無線から聞こえた声は若い女性のそれだった。凜としていて聞き取りやすい。明瞭だが、不思議な温かみを覚える声。

「分かっているさ」

誠は屋上の、鍵がかけられた扉を引きちぎるように開いた。

（魔法が認知されている事の利点は、無自然な現象を見ても、そこに住む人々の感覚が不自然に麻痺しているから問題にならないと言う事だな）

階段を使って降り、やがて最下層の一階に着くと、何事も無かったかの様に自然に外に出た。

そこは繁華街だった。夜になれば明かりを灯すであろう店も、今は午後の昼過ぎのうらかな時間を静かに過ごしている。

人通りの少ないその通りの端に、目立たない様に止めてある車が一台。

白のワンボックス。車体にはジェットクリーニングと飾り文字のプリント、一見してただのクリーニング屋の車に歩み寄ると、中から長身の男が出て来た。

「おう、主役の登場だ」

歳は二十代半ばだろうか。黒いスーツをラフに着こなしたホスト風の男は、耳元のピアスと茶色い長髪を揺らして誠を出迎えた。

「それで、俺の玩具は？」

コン、コンと男は車体を叩く。中には白いワイシャツやコートに埋もれる様に棺桶の姿があった。

「かなり重かった。強化魔法を使っても辛い」

『でも、誠さんはこれ担いで戦っているんですよ？』

「いや、俺とこいつを比べられても困るんだよ」

どうやら、時間前についた様だ。

僅かに安堵の表情を浮かべながら車体に寄り掛かり、首から垂らされた口ザリオを指で弄ぶ。

ホスト風の男は胸元から煙草を取り出すと口に咥えた……………

・誠を見て

「吸う？」

「……おい、ホスト」

ホストと呼ばれると、露骨に顔を顰める。常にへらへらしている

様な男がそんな顔をするのだ。かなり嫌なのだろう。

「あんな女衞みtainな連中と一緒にしないでくれよ、俺の名前は塚本英四郎」

「それは、お前が以前勤めた店が悪質だったってだけだろう？」

世の中の大多数は、倫理と法令を順守する善良な市民たちだ。法を犯してその名を汚すのは、いつだって圧倒的少数である。

「ま、そうなんだけどね……ほい、これ」

車内から紙の束を掴むと誠に放る。

「敵の情報、まあ、情報部の奴らが調べたやつだからあてになんないんだけどね」

『……多分、情報部の方々は聞いてますよ？』

「へ、まじ？」

「あいつらは、ストーカーみたいに人をつけまわして盗聴に盗撮は平気でやる真性の変態どもだ。いちいち気にしていたら生きていけない。空気だと思って黙殺しろ」

誠の言葉に塚本は眼を丸くすると、噴き出す様に笑った。通信機越しからも笑いを堪える気配が伝わる。

誠がやや憮然とした顔になったのを謝りながら告げる。

「いや、悪い、悪い、考えてみればそうだな。俺達の頭はあんたなんだから、そんなもん、今更気にしたってしょうがないよな」

「・・・礼儀は守っているつもりなんだけど」

更に笑う。

塚本が更に何か言おうとした時、遠くで爆発音が聞こえた。

「来たか」

「の、ようだな」

「言ってくるよ」

すると塚本は「おう」と応えて、無線機の声と言葉を重ねた。

『「ご武運を」』

二人は、誠を戦力として活用するために蔵十郎が付けたバックアップ要員だった。

あれは持つて行こうか？

やめた。目立ちすぎるからだ。近くにあると言う事が確認できたのだ。周囲の状況が整備されていない、人が多い商業区域で行動するのに、あまり目立ちすぎるのは良くない。

誠はコンクリートの地面を蹴り砕く様に駆けだした。誠の強化魔法は、すぐに人類の限界を突破すると、更に力を込めて跳躍。信号

に足を駆けて、更に跳び、三階のビルの壁面に着地するとまた跳んだ。

そうして六階の建物の屋上に降り立った誠は、眼を細めて音のした方向を睨む。

「あそこか」

火が上がるのが見えた。

『急いで下さい、人の非難が終わっていません』

耳元から放たれる緊迫した声、下を見れば、道路を走り付いてくるジェットクリーニングの文字。

前方、宙を舞いながら状況を俯瞰する。燃え、煙が立ち上り、人が逃げまどう。阿鼻叫喚の戦場に、誠は跳び込んだ。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

特区でも大型の部類に入るショッピングモール、その中でも、若い女性をターゲットにしたブティックが軒を連ねる一画は、放課後の学生とカップルで賑わっていた。

「ねえ、今度はあの店見てみようよ」

高子に腕を引かれながら、次々と店を冷やかすまゆみは、はしゃぐ友人の勢いに押されながらも、その人の多さと活気に驚いていた。

まゆみは本土から居を移した外資系企業に勤める父を持つ、典型的な家族移住者の一人だった。魔法が強い力を持つこの地に憧れを抱いて、期待に胸を膨らませていたものだが、実際に住んでみると、それ程以前の生活と変わらない。学校もあるし、普通科目の授業も当たり前存在する。しかし、失望は全く感じなかった。

（とても、綺麗・・・）

街並みがだ。

人工島の建造に合わせて、その上に乗る人々の生活基盤が急速に整えられたため、本土にある様な、開発時期がばらばらな雑然とした印象が全くない。計算されつくした街の景観、人の流れ、建物。幼い頃に家族旅行で行ったヴェネチアの様な、統一された様式美が感動的に美しかったのだ。

まゆみも高子も人間の日本人だが、特区にはそれ以外の種族も多い。特区以外ではあまり見かけない彼らも、この地では当たり前仕事をして、学校に通って、買い物をする。今も、通りかかった金髪の美しい男性に眼を奪われた。口元からのぞいた牙が長かったから、人ではないのだろう。

ここに来るまでは、多少ではあるが持っていたた種族に対する忌避感や偏見も、今ではすっかり無くなっている。

「ねえ、ちょっと聞いているの？」

思わず呆けていたまゆみは、意識を現実に戻した。

「ごめん、ちょっと・・・」

「もう、ほんわかしてるんだから」

目の前の高子とも、今の学校の中等部に通い始めて直に仲良くなった。

特区の学校は、日本の様に極端な学力差が出ない様に工夫されている。特区が運営している区立の学校に限るし、私立学校もあるのに、必ずしもそうではないが、単位制で、様々な目的を以って学校に通う学生達との生活はとても楽しいものがあつた。

（あたし、日本人じゃなくて特区人になつたんだ）

綺麗で、可愛い、しかし、値段は手ごろな雑貨屋で色々手にとつて唸る高子を眺めながら、漠然と思った。

どうやら、お気に召したものがあつたらしい。銀色の小さな花をあしらつた髪飾りをレジに通した高子は、店の外に連れていくと、買った髪飾りをまゆみの髪につけた。

「はい」

「え、高子？」

「プレゼント」

悪戯を成功させた子供の様に笑う高子。不意打ちへの戸惑いと、申し訳なさから何か言おうとするまゆみの唇に人差し指をあてる。

「まゆみ、もしかして忘れてる？」

「え」

「今日はまゆみの誕生日だよ」

すっかり忘れていた。特区に来るまではなかったのだが、こちらに来てからは、家族が用意したケーキやプレゼントを見てようやく気がつく事がよくあった。

「う・・・でも、いいの？」

「いいのいいの、安物だし、昨日バイト代も入ったし」

ありがとう、そう言おうとして、何か違和感がある事に気がついた。

（え・・・何？）

圧迫感を感じる。

「どうしたの？」

高子は何も感じていない様だ。

もともと、まゆみは魔法による現実への改編、魔法の行使によって起きる魔力の波動に敏感な性質だった。

（これって、魔族？）

人ではありえない、荒々しく凜猛な気配。

まゆみは軽く頭痛を覚えた。が、逆にその事によって、自分の感覚が正しいことを悟った。

辺りを見渡せば、人であふれ返っているものの、恐らく、軍や警察に関わる、戦う事が出来る魔法士はいないだろう。そもそも、絶対数が少ないのだ。彼らは。

（け、警備局に連絡をつ）

携帯をあたふたと取り出すと、後方から爆発音を感じた。

「きゃっ！」

「え、何！？」

辺りに悲鳴が響く。それは先程、二人が買い物をした雑貨屋があった場所だった。

「まゆみ！」

高子が自分の体を楯にまゆみを庇う。焰と、煙に包まれた瓦礫から、それは顔を現した。

キイイイイイイイイ

金属が軋む様な音と共に現れたのは、巨大な黒い蛇。

「ケ、ケツアルコアトルだ」

まゆみは高子の呻く様な声を聞いた。

その黒い蛇はあまりにも巨大だった。頭部は軽自動車程もある。まるで龍の様に雑貨屋から顔を出したそれは、シヨッピングモールの中に巨体を滑り込ませた。

ケツアルコアトル、ランクAの魔族だった。アステカ神話の神の名を冠されたそれは、黒い巨体、無尽蔵の体力、そして獰猛さ。また、命名の由来となった焰を司る魔族である事。

正真正銘、神話級の化物だった。

黒蛇の血の様に赤い目がまゆみを捉える。

「うっ」

「ほらっ、逃げるんだよ！」

高子がまゆみを引っ張り、そのまま御姫様だつこで駆ける。見れば、高子の左手の甲が銅色に輝いている。強化魔法を使っているのだ。

ズルリ、と何かが何かを削る音と共に近寄ってくる。後ろを見れば、ケツアルコアトルが巨体をうねらせて追いかけて来ていた。

「くそ、一体なんなんだっての！」

蛇に睨まれた蛙の心情を強制的に理解させられた。

「あっ」

高子が足を段差に引っ掛けて転ぶ。

「まゆみ！」

まゆみは床に体を投げ出されながら、こんな時まで友人の心配をする高子に感謝の念を覚えた。

しかし、ケツアルコアトルは止まらない。

二人が思わず目をつぶろうとした時、空から僧服を着た天使が舞い降りた。

背中を見せて、蛇と自分たちの間に降り立つそれと、その光景に、まゆみは心が震えるほどの感動を覚えた。

「綺麗・・・・・・・・」

第8話 『煙と土』

『お兄ちゃんの馬鹿』

食卓で、赤ん坊にミルクを上げながら食事を取っていると、従妹の琴音の怨嗟の声が聞こえた。

いつもは寿にお願いしていたのだが、今日はご近所さんとの飲み会に出かけてしまった。シスターのくせに・・・

因みに、寿には夫が居ない。誠が居候を始めた時には既に母子家庭だった。

琴音は食べ終わると、さつさと自分の器を流しに持って行ってしまった。更に、キツと睨んで食卓を後にする。

「あーあ、どうしょ」

投げやりに呟く誠、赤ん坊は誠が持つ哺乳瓶の中身を物凄い勢いで飲み干していく。

「大丈夫かよ、そんなに」

琴音は、寿に似て、顔のパーツのハッキリした美人、の片鱗が垣間見える美少女だ。御淑やかな寿（上っ面は）と違って、年頃の少女らしい、生意気さと活発さに満ちている。

（昔は金魚のフンみたいに付いてきて、可愛かったのになあ）

得てして、娘や妹と言うのはそういうものである。

昔の名残は『お兄ちゃん』の呼び方のみ。呼び方には、遠慮も敬愛も存在しない、歳を経るごとに自分に対して扱いがぞんざいになっていく。年頃の娘を持った中年サラリーマンの悩みである。

随分前に誠の体の成長は止まってしまっているので、誠と琴音の見た目も身長もあまり変わらない。母親の琴音は、女性の割に長身であるから、後数年もすれば色々と追い抜かれるだろう。

ずるずるー、ずる、ずる、ずー

哺乳瓶が空になる。誠の手から奪い取り、吸いつくすと『しけてやがる』とばかりに空の哺乳瓶を放り投げる。

「・・・糞餓鬼が」

子供は好きではない。むしろ、好きな人間がいる事が信じられない。眠ければ泣き、腹が減れば泣く。何処の殿様だと思う。

表向きは温厚な誠だったが、戦う事を生業としているだけあって、本性はかなり凶暴だ。家族には仕事の事は話していないので、あまりそう言った態度は出していないのだが、呑気な顔を見ていると殺意がわいてくる。

（おっと、いけない）

つい苛立つと思いがどんどん黒い方向に向かってしまう。

「お前の親は何処で何してんだよ・・・」

一応は教会で預かり、管理公社の方には迷子の申請をしておいた。親が見つかれば連絡が来るはずだ。

（公社が捨て子を引き取らないのは、もし見つからなかった時にそのままこちら側に引き取らせるためか・・・）

打算、計算に満ちた判断だが、合理性はある。日本本土にはない、行政側のフレキシブルな対応はそれなりに評価してもいいところか。

（さしあたっては、こいつの名前をどうするかだな）

誠が意識を現実に戻すと、目の前に黒い津波が迫っていた。以前、サーフィンに挑戦した事があったが、波の圧迫感海のものその比ではない。

右の拳を固め、頭上に振りあげる。

黒蛇、ケツアルコアトルの鼻先が触れる直前、誠は思いっきり拳を振り下ろした。

ズゴンッ・・・・・・・・・・

音を超えた音、凄まじい衝撃波が辺りを撫でる、均す。

ショッピングモールの床を砕きながら、誠の拳に圧迫された黒蛇は、それでも止まらず誠の脚を下がらせたが、やがて運動エネルギーを維持できずに止まった。

（ランクA、黒蛇ケツアルコアトルか・・・）

突進を止められた黒蛇は、一度頭を引いた。吹き抜け部分に降りると、天井いっぱいには鎌首をもたげる。

（ここまで大物・・・やはり持ってくるべきだったか）

隠密性を優先したために無手の状態だ。しかも、頭部に直接攻撃を加えたにも関わらず、たいして効いている様には見えなかった。

黒蛇が今の一撃に警戒して距離開けたのが幸いか。

誠は後を振り返って、未だに茫然としている女子高生を見た。

「立て」

大丈夫か、などと優しい言葉は必要ない。するべき事を声に出して命令する。ただそれだけだった。

「立て」

眼鏡をかけた少女が跳ねる様に立ち上がる。

「さっさと行くん。邪魔だから」

礼儀正しくお辞儀して、未だに座り込んでる友人に声をかける。

「ほ、ほら、行こう高子！」

しばし果然としていたが、高子と呼ばれた少女は友人に引き摺られる様に去っていった。

黒蛇に向き直る。赤い目を光らせてじっと佇んでいた。

「待たせた様だな」

よい

その声は頭に直接響く様だった。

「ッ・・・言葉を話せるのか！？
ってことは、お前、長命種か」

魔族の中でも、特に力を持ち、知性をを誇ると呼ばれる人外達、それが長命種である。長命種とそうでない魔族の間には埋めがたい隔絶があるのだ。

（これは・・・随分とんでもないのが出て来たな）

表情は冷たいまま、心の中で緊張が走る。

我は黒蛇の盟主なり

天命により、汝らに破壊を齎すものなり

さればこそ、人の子の戦士よ

そなたとの戦いは必定

長命種は最低でも千年近く生きている、本当の怪物達。しかも、ただ力押しで来るだけではない。知性を以って、狡猾に戦う奸智にも長けている。

人間で言うところ、力任せにバットを振るチンピラと剣術の達人位の開きがあるのだ。

（しかも、こいつはまだ魔法を使っていない）

ただの獣であれば、魔族であつてもただ強力なだけだ。しかし、長命種は高い生命力、魔力を活かす力がある。つまり、普通の魔族と違って魔法を使える。

魔族は長命種となると、ランクが一つ上がるとされている。黒蛇ケツアルコアトルはランクAだが、眼の前のそれは実質ランクS、神話級の化物、古から語り継がれた神話や物語の原型とすら言われているのだ。

しかし

時が足りぬ

神たる盟主との

戦いに備えよ

ショッピングモール全体の気温が急激に上がる。

ケツアルコアトルはとぐろを巻くと、接する床が高温を発して溶け出した。

（属性魔法の一つ、炎熱魔法か！）

思わず攻撃に備えるが、熱でマグマと化した店の床に、海に潜るかの様にそのまま姿を消した。

そして静寂が訪れる。

破壊しつくされた商業施設、熱を発するマグマの床がまるで地獄の釜の様だった。

『作戦部第一課行動部隊がまもなく到着します。早急に退避して下さい』

「・・・遅い到着だこと」

二階の手すりに足をかけると、跳躍。既に大きな穴が開いていた天上のガラス窓から外に出た。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「君、大丈夫か？」

「……はい」

第六区域の商業施設街は騒然としていた。

普段であれば、家族連れ、カップル、友人同士の学生で賑わうそこには、警備局の緊急

車両、救急車、新聞記者を含む野次馬の殺気だった雰囲気で、別の意味で騒々しかった。

間一髪のところまで逃げ延びた高子とまゆみは、直前に助けに入った神父の事を話すと、第一部隊長を名乗る現場責任者に面会を求められた。

怪我人用に設けられたテントの一画で、まゆみと共に座りながら、ローガン牧島の事情聴取に応える高子。

（あれは、一体……）

まるで天使の様に降り立った神父は少年だった。自分たちとたいして変わらない年頃に思えた。

強大な魔族に襲われた恐怖、助かった安堵すらも忘れて、高子の心を支配していたのは、

黒い津波を片手でせき止める彼の後姿だった。

美しかった。

強さへの憧憬、高子は自分の将来を魔法士として、軍か警察に進める事を志望していた。加えて、そのための鍛錬にも力を入れていたし、同年代ではかなり優秀な方だと言う自覚もあった。特区という魔法の本場で、学校で力を競い合う友も、実技の講師として学校にやってきた上級資格を持つ魔法士も、あれ程の強さを持つてはいなかった。

（誰なのだろう・・・）

「高子？」

ハツとする。心配そうにまゆみとローガン隊長がこちらを窺っていた。

「・・・ごめん、びつくりしちゃってさ」

ローガンが苦笑した。

「無理もない、鍛えた軍人だって怖い時はあるんだ」

実は憧れていた警備局の、それも第一線の部隊の隊長の言葉に興味を覚える。

「そうなんですか？」

「そうさ、普通は怖くて動けない。訓練して、経験を積んでやっと足が動くようになる。戦えるようになるのはそこからだ」

長きにわたる時間を戦場で過ごした男の言葉は、ありきたりではあったが、それ故に本物の厚みがあった。

「・・・私、魔法士目指してて、でも、何も出来なくて、少し自信がなくなりました」

ローガンはその言葉に少し考える様に眉を寄せると、一転、厳しい顔には似合わない柔和な顔になって応えた。

「私にも年頃の娘がいてな、特区では医療魔法師を目指すと言っている。だが、曲りなりにも魔法に携わっている人間として、心配でならない。戦場に出る魔法士を目指すと言われたら、心配で夜も寝られないだろう」

高子も、そしてまゆみも聞き入っていた。

「だから、プロとしても、一人の人間としても、あまりお勧めできる職業ではない。死にたいと思える事は何度でもあるし、死にかけると腐る程ある」

だが、と続ける。

「娘を戦場に送るよりは大分ましだ」

自分が戦う道を選ばなかったとしても、もしかしたら自分の愛する者が、自分たちを守るために立ち上がってしまうかもしれない。

「魔法士として軍隊や警察に入ると、魔族と戦う事も、テロリストと殺し合う事も沢山ある。だけど、それをさせたくない人がいて、

代わりに自分が辛い思いをしてでも守りたい世界があるのだったら、
とてもいい職業だよ」

第9話 『食い物』

昼過ぎの授業程、時間の流れが遅く感じるものはない。

「・・・この様に、魔法とは元来、魔女における魔女術の様な、体質的に備えた超能力を、学問的、技術的に確立する事によって、人が本来持つ生命力を基点に魔力を・・・」

教室で黒板の前に立つ教師の授業を聞きながら、しかし、意識は別のところに向かってしまうのも仕方のない事だろう。

「魔族は、魔法的力によって体を構成したり、肉体的能力を支えてはいるが、人間の様に魔法を使う事は出来ない。だが、何事も例外はある・・・蓮杖、暇そうだな、答えてみる」

窓の外、雲の形を見ていたら、案の定、それを見とがめた教師に指されてしまった。

「・・・はい」

クラスメイトの苦笑が聞こえる。

「魔族で、人間的魔法の行使を可能とする存在、それは長命種です」

先日戦ったばかりだ。

許しを得て着席する。

一般科目はあまり得意ではないが、魔法の知識に関するものは実

地に基くので豊富にある。

授業を聞き流しながら、ふと、右斜め前方の席に座ってノートを取るエミユルを見る。

意外と成績が良く、勉強熱心なエミユルは真剣な顔で授業に臨んでいた。

そのエミユルが振り返り、誠と眼が合う。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

プイッ

そんな音が聞こえた様な気がした。

（うわぁ）

『大っ嫌い』の件を思いっきり引き摺っている事を確認して思わず目眩がする。

チラ・・・・・・

プイッ

実はさっきからこんなやり取りが続いている。

本人はこっそりやっているつもりなのだろうが、周りからはばれ
ばれである。さっきから、それに気がついたクラスメイトがくすく
す笑っているのが聞こえる。

（やっぱ、俺のせいなんだろうなあ）

今回の件だけではない。

妖精族は、己に最も近い者に合わせて体を変化させる。中等部
時代、浮いていたもの同士でつるんでいたせいだ、エミユルの場合
は自分が対象となった事を、何となくではあるが感じ取っていた。

が

（まさか、ここまでとは・・・）

妖精族は思春期に性別を確定する。エミユルの場合はそれが高等
部に入っすぐの辺りに起こったので、知性はともかく、情緒的に
エミユルは一歳か、二歳児程度の経験しかないのだ。感覚的には、
仲の良い友達が自分を置いてしまった事により、所謂、拗ね
てしまった状態になる。子供であれば直に忘れるからいいのだが、
妖精族のそれは知性も備わっているために恐ろしい程しつこい。

（一週間ってところかな）

中等部時代、すっかり遊ぶ約束を忘れてしまった時は、今と良く

似た状態があつた。種族として執念深いが、エミユルは我慢強い方ではないので、恐らくそれくらいであちから折れてくるだろう。

今は我慢だ。

(だけど・・・)

チラ・・・

プイッ

いちいち、クラスメイトが自分たちを見比べてくすくす笑うのは、如何ともしがたいと考える誠だった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

第七区域の工業地区の近くに建てられたそのアパートはのエントランスに誠は足を踏み入れた。

繁華街に接する形で立てられたアパートは、恐らくホステスなど、そこで働く者達を対象に建てられたらしく、目的の三階に階段で上がるまでに、三人も化粧をして出ていく派手な女とすれ違った。

制服姿の誠は浮いていたが、それを見咎める者はいなかった。ここに住人は他人に興味がない。

外を見ればもう夕方だ。そろそろ、夜の街も本格的に動き始める。

目的の階に辿り着いて、迷うことなく三〇五号室、一番奥のドアの前に立つと呼び鈴を鳴らす。

「は、はい！」

インターホンがあるにも関わらず大きな声で返事して、慌てて玄関のドアに駆け寄る足音が聞こえる。

ズザッ

うひゃあっ

盛大にこけて悲鳴を上げる姿が想像できる様だ。

(・・・・・・・・)

ガチャと音がして鍵が開けられる。

「お待たせしましたあ」

扉が開かれて顔を出したのは若い女だった。

歳は二十歳前後だろうか。身長は、小柄で誠と同じ程度。顔立ちは整っているのに、不自然な程色気を感じさせない。

「・・・・・・・・」

「あ、あの……」

黒く長い髪はぼさぼさの三つ編みでまとめられ、黒ぶちの眼鏡はごつく、何よりも纏っているダルダルのジャージは、恐らく女性の出身校らしき中学の名前が刺繍されていた。

松原ユリアンヌ、ロシア人の祖父をもつ三世らしいが、見た目はまるつきり日本人である。格好といい、言動といい、名前といい、何もかもがちぐはぐな女だった。

ポッ

「……いや、何故そこで赤くなる」

「え、でも、そんなに見つめられると、照れちゃって……」

もじもじするユリアンヌを押しつけて室内に入る。

アパートはの室内は3LDK、アパートという呼び方が似合わない豪勢さと広さを誇っている。廊下を進んで、リビングダイニングに出ると、そこにはアパートの、居住空間としての光景はなく、デスクが島状に並べられ、パソコンが鎮座する。壁際には資料整理の棚が犇めくオフィス空間だった。

「塚本はどうした？」

一人足りない。

「え、えと、つ、塚本さんは、は……」

誠はその様子に苛立ちを隠そうともせずに舌打ちをすると、ユリアンを物置に使っている一室に引っ張っていつて閉じ込めた。鍵もかける。

「あ、あう、酷いですうっ」

抗議の声を無視してリビングの一番奥の机の椅子に腰かけると、ポケットの携帯電話に着信。

「はい、蓮杖」

『流石に鍵をかけるのはやりすぎでは』

凜とした声は、あのオペレーターのものだった。

「お前とはこれで話したほうが早いだろ、ユリアン」

松原ユリアン、その見た目通り、あまり外を出歩く様な、人と接する様な生活はしていない。

所謂、引き籠りである。辛うじてノートではないのが救いと言え
ばそうだが。

（一緒に仕事する人間にとっては面倒な事極まりないな）

対人恐怖症という奇病を患っているユリアンは、人の前では極度の上がり症で話しにならない。通信機越し、何か媒体を挟んでや

つと会話が成り立つ始末だった。

『塚本さんですが』

「あ？」

『今、帰ってきました』

先程では考えられない程凜々しい声で告げると、アパートの玄関から扉を開く音。ぞんざいな足音と共に姿を現したのは、ホスト風の茶髪の男、塚本英四郎だった。片手にジャンクフードの紙袋を持っている。昼食を買いに行っていたらしい。

「おや、大将、来てたんかよ」

「ああ」

ユリアンヌを視線で探す塚本に、同じく視線で物置を指す誠。塚本の顔に納得が現れる。いつもの事、なれた事だった。

塚本にも聞こえる様に携帯の音量を最大にする。

『納得いきません』

「何だ？」

『別に……』

珍しく不明瞭な話し方をするオペレーターはさておき、誠は早速に本題に入る事にした。

「黒蛇ケツアルコアトルの長命種の件は聞いているな」

緩んだ場の空気が一気に引き締まった。

「報告書に出した通り、奴は退却したが……ユリアンヌ」

『はい、情報部の調べでは一度海に出て、海底に潜伏しているとの事です……』

「所詮は情報部の調べだからな、あてにできん」

塚本が拳手する。

「じゃあ、大將は何処にいるって考えてんだ？」

「……そうだな」

大將と呼ばれて顰めながらも、考える様に眼をつむる。

「奴は一度引いたが……実はそれ程離れていないと考えている」

焔を司る魔族である黒蛇が、熱と自分の体で地面を掘削しながら地中を進む。人工島と言っても、科学技術だけでは造られていない特区は、海底に繋がる基礎ブロックを傷付けなければ沈む事はない。えない。

その間の、コンクリートと鉄筋で埋め立てられたスペースに巣を造っているというのが誠の見解だった。

「黒蛇が開けた大穴を辿れば、恐らく奴に辿り着くはずだが」

『未だに熱が収まっていません。それに、情報部の報告の事もあります。殆どの調査力は海上に割かれているので、こちらが調べられる可能性は低いでしょう』

特区の地下に、あれ程の化物が潜んでいる事を多くの者が知らないのだ。正直、ぞっとしない。

「それで、我々としての対応は？」

と塚本。

「対応もくそもあるか、出て来たら叩き潰す。いつも通りだ」

とりあえずの行動指針が示された事に満足したらしい塚本は、勝ってきたジューズをストローから啜る。

『それと』

「何だ？」

『局長から早急に連絡するようにと、先程電話で』

あまり良くなかった機嫌が一気に最悪になるのを誠は感じた。

面倒な予感ばかりして、デスクの上の電話でダイヤルする気になれずにいると、丁度良くそれが鳴りだした。

「・・・」

携帯電話を塚本に放り投げると、深く溜息を付きながら受話器を取る。

「はい、蓮杖」

『お前か、先日は活躍したようだな、警備局第三課課長、蓮杖誠』

局長、桜木巖十郎の声だった。

？

第9話 『食い物』（後書き）

更新に不手際があり、陳謝

第10話 『ペルソナ』

経済特区、通称特区は、日本の領海内に建つ人工島でありながら、日本国に属さない。イタリアにおけるバチカンの様な立ち位置で、司法も外交も行政も、全てが独立している。

世界的に見れば圧倒的に小集団でありながらも、内部における若者の数は意外に多い。需要に合わせて学校も建てられたが、授業内容はともかく、教育委員会もなければ、PTAもありはしない、システムのには未熟が目立つ構造となっている。

学生の權益を守る保護者、外部組織がないため、自然、学生同士が団結して自己防衛を図るのは自然な事である。故に、特区における各学校に設けられた生徒会は、企業における労働組合の様な役割を兼ねていた。

「北条さん、これお願い」

「はい」

先輩から書類を渡された北条高子は、書類に記載された項目に漏れがないか確認して、綺麗にまとめていく。

一六〇センチ代後半という、女性にしては高い身長、運動で鍛えられた体、化粧気がないながらもそこそこ整っている容姿、髪の毛はショート、そして躍動感あふれる雰囲気は、まさにアスリートのそれだった。

高子は一年生ながらも生徒会に所属している。理由は、単に人気

がないからだ。責任が重く、仕事が多く、それでいて旨味がすくない。所属している陸上部の先輩が生徒会長で、頼みこまれて仕方なく、が参加の経緯だ。

（あーあ、退屈・・・）

今は昼休みだ。放課後はまゆみと再び遊ぶ約束をしていたため、自分の分の仕事のノルマを終わらせるためにここですこし書類と格闘している。

高子が今処理しているのは、近所から寄せられたクレーム処理だった。騒音が酷いだったり、交通マナーが悪いと言った苦情の大半はどうしてもいいものであるが、中には生徒の非行、場合によっては現場を押さえた写真付きで送られてくる事もあるので馬鹿には出来ない。大事になる前に、適切に処理する（もみ消す）事も生徒会の立派な仕事の一つだからだ。

（あー、つたく、家出した猫が見つからないなんて知るかよ）

ささくれだつていく精神を自覚しながら、書類を捲るペースを速めていく。

書類の中に硬い感触、これは写真添付の苦情だ。

（つて事は、久しぶりに面倒な現行犯か・・・）

ここ数カ月で得た経験が嫌な推測をさせる。

問題の写真を目にした途端、高子は心臓が止まりそうになる程驚いた。

写真の中には、高子と同じブレザーを着た少年が、中年の男性の首を締めあげている姿だった。

高子の眼には、その人物が、あの少年神父と同じ顔を持っている様に感じられた。

（ち、違う、気のせいなんかじゃない………同じ人だ）

心臓が早鐘を打つのを感じた。

あの事件から、何度か未だに封鎖されている現場の近くまで行つて、神父の姿を探したが、見つける事は出来なかった。

「あれ、北条さん、どうかしたの？」

写真を覗きこもうとする上級生から、慌てて背を向けて写真を隠す。

「……本当にどうかしたの？」

「い、いいえ、外で、いちゃいちゃしてたカップルへの苦情です。ど、どうしようかと思って」

即興で考えた嘘にしては上出来だったかと、慌てながらも自画自賛する。

上級生に一気に納得の表情が生まれる。

「まあ、公序良俗つてのも大事だけどさ………高校生なんだか

ら多少は眼をつむつてくれてもいいのにね」

短い会話を終えてお互い作業に戻る。

だが、高子には神父の写真が頭から離れなかった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

特区警備局には、主に三つの部門がある。

一つは警察的活動を受け持つ警備部、二つ目は軍隊としての活動を行う作戦部、三つ目に諜報機関としての情報部である。

詳しい組織情報は機密に属するため、あまり公にはされてはいないが、その内の作戦部は、第一課から第三課まである。第一、第二は主にテロリストや、魔族の掃討が任務であり、第三課は予備役による後方待機部隊、つまり、書類上のみ存在している部隊だった。

『お前か、先日は活躍したようだな、警備局第三課課長、蓮杖誠』

警備局第三課、厳十郎が誠に与えた支援であり、楔だった。

一般人が戦闘行為に参加するのは、特区でも違法である。それを幫助した者も同罪であり、誠の行動に合法性を持たせる理由、それが第三課だ。

『特区の最終防衛ラインたる第三課の活躍で私も鼻が高い』

「……何の用です、局長」

厳十郎は極めて率直な、言い方を変えれば無駄を嫌う人物である。こういった前置きをする場合は大抵は碌でもない話が後に来る。

そもそも、厳十郎は言葉で労を労ったりしない。口座か手元に札束を放りこむ。それが彼のやり方だ。

誠は勤労意欲の低下と共に、さっさと受話器を降ろしたい気持ちでいっぱいになった。

「局長、貴方が挨拶のために電話をよこすなんて考えられない。さっさと用件を伺いたいのですが」

すると電話の向こうで笑いの気配を感じた。

『まあ、いいだろう』

誠は身を引き締めた。塚本もジューズやポテトから手を放してこちらを見ている。ユリアンも携帯の向こうで固唾をのんでいるだろう。

『黒蛇ケツアルコアトルの長命種と接触した、そうだな？』

「はい、言葉を理解していたので間違いないかと」

しかも、誠の見立てでは、その黒蛇は特区の地下に巣を造っている可能性が高い。

『そちらは少し時間をかけて事に当たる必要があるだろう。だが、問題はもう一つある。先日、海上で領海警備を行っていた警備部の部隊が丸ごと失踪した』

「……失踪、ですか？」

『そうだ、船ごと、しかし、遭難や沈没の可能性は極めて高いとのことだ。加えて、その巡視船が特区人工海岸で座礁しているのが今しがた発見された』

集団失踪、集団帰宅？

訳分らない。

『そして、極め付きは十三使徒が一人、《吸血王》ロードブラムの特区入りが確認された』

「ッ……」

部屋のファックスが動き始めて写真付きの資料を吐き出す。

『ここ十数年は表向きには現れていなかった長命種が、長く人の世に留まる事、あまりにも異例すぎる。集団失踪にしてもそうだが、ロードブラム全て《吸血王》の仕業と考えれば説明がつく』

誠は飲んでいた息を吐いた。

十三使徒。人の範疇を大きく超えた魔法士は国家への帰属か、離反かを強制的に選ばされる。公にはなっていないが、先進国一国に

あたり、一人くらいの割合でいるとされている。十三使徒、とされているが、数自体は二十人程いる。十字教における十二の使徒に裏切り者のユダを加えた事で、人の社会にあってもいつ暴れ出すか、いつ裏切るか分からないと言う皮肉の利いたネーミングだった。

その内、三分の一程は社会に囚われる事を良しとせず、独自に活動している。テロリストの様な活動をしている者もいるので、社会では、使徒は恐怖の対象になっていた。

《墓守騎士》^{グレイフナイト}は特区の守護者であるが、《吸血王》^{ロッドブラム}は独自路線の強硬派として、裏の世界では有名だった。

「ですが、奴は人類敵対路線ではなかった……ルーマニアのかた田舎で中世の貴族み
たいに優雅に暮らしているはず」

「奴自体は百年ほどしか生きていないだろうが……それでも、奴の一族の事を考えれば、昔ながらの暮らしが肌にあっていたという事だろう。贅沢や優雅と言った感覚はないと思うがな」

話を脱線する蔵十郎に無言で先を促す。

「奴は気になったものを自宅としている屋敷に飾る蒐集家としても知られていた。だが、外遊中に、その内の一つが消えていたらしい」

《吸血王》^{ロッドブラム}は当然、それを奪われたと考えた。何らかの形で所在地を突き止め、そこが特区だった。

「奴からしてみれば、特区は宝物を奪った憎き敵だ。ただそこにあると言うだけで、特区も奴にとっては敵対のカテゴリーに入るのだ

ろっ』

そして特区に現れた。頻発する魔族事件の数々……

「……まさかつ」

『そうだ、奴が得意とする魔法の特性を考えれば可能性は高い』

幻狼ベオウルフ

黒蛇ケツアルコアトル

他にもあるらしい、そして警備部の謎の失踪……

『ロードフラム《吸血王》が得意としている魔法は精神干渉魔法、つまり、洗脳だ。彼自身の戦闘能力はそれ程高くないが、その力はランクSの魔族すら虜にする。』

「……それで、奴の宝物の詳細は」

『分かったら苦勞はしない。調査中だ』

「俺と奴がぶつかったら、最悪、特区が沈む」

そちらで対応する事は不可能なのか？

言外に告げたが、厳十郎が返した言葉は予想を反するものだった。

『特区が沈む位ならまだました。これは議長の判断でもある』

「議長、B A B E L 最高評議会議長、ヴラド・ツウペシュがですか？」

確かに敵対する使徒の攻勢にさらされている特区は窮地だ。しかし、そこで議長が出てくる意味が分からなかった。電話の先の老人は、公にはなっていないながらも、警備局を、特区の暴力装置を司る存在なのだ。彼の判断で十分の筈である。

そして、誠はヴラド議長の経歴を頭の中で洗い、一つの結論に達する。

「血縁……ですか」

『そうだ』

《吸血王》ロードブラムとヴラドは血縁に関係にあると言う事だ。つまり、特区の長の身内が人類の敵、知らない者の方が多く、知っている者も黙殺していた事実は危うい天秤のバランスの上で成り立っていたが、ロードブラム《吸血王》が人に対して害を成せば、ヴラド議長の失脚は免れない。特区の支柱たる彼を失えば、特区は世界中から食い物にされてしまう。

『つまり、リスクを冒してでも特区で止める必要があり、それにはお前が最適という結論に達した。戦果を期待する』

通話は斬られた。

「……………」

ツー、ツーという音を聞きながら、今の会話の内容を吟味するよう
に虚空を見据える。

（使徒同士の戦いになる、か）

「随分物騒な話になつてゐる様で」

塚本は再びポテトを貪りながら気を抜いた様子で言った。

『しかし、相手が使徒というのは一大事です。核ミサイルを撃ち合
つて戦争する様なもの』

重苦しい沈黙が降りた。

塚本は居心地悪そうに身を揺ると、立ち上がってファックスが
吐きだした資料に目を通す。

「あー、だが、あれだ、使徒つてのは不老不死ばつかなのかい、こ
いつもこれで百歳だつて言つし、うちの隊長だつて」

誠の体は今の《墓守騎士》^{グレイフナイト}の力を得て以来、成長を止めている。

それも十二年も前の話だ。高校二年生として学校に通う誠だが、実
際は二十七歳で、特区の高校の入学の年齢制限がない御蔭で非合法
な手段を使うことなく通う事が出来ている。

家でも、寿には第三課の仕事に触れない限りで知らせているが、
恐らく琴音は誠が高校二年生の十七歳であると思つてゐるだろう。

（幾らなんでも未成年が警備局の管理職に就く事は出来ないし）

それに不老ではあるが不死ではない。

塚本が誠の携帯電話を切つてよこす。もう必要ないと感じたのだろつ。

「……おつと」

携帯電話が振動、エミユルからだつた。

「はい、蓮杖」

「ま、誠か!？」

幾分上ずつた声に苦笑する。

「これは俺の携帯だぞ、俺以外が出るはずないだろう」

「そ、そつか、そうだよな、うん」

恐らく、『大っきらい』の件をまだ引き摺っているのだろう。もっとも誠自身はすっかり忘れていたが、それを素直に言う程野暮でも正直でもない。

『……この、こ、この間の……』

本当の事を詳しく聞きたいのだろうが、緊張して嚙んでしまうのが微笑ましい。思えば、年齢を偽っているものの、この少女とも五年近い付き合いがあるのだ。身近な少女が歳を経ることに成長していく姿は微笑ましいものがあつた。

（娘がいたらこんな感じなのかな）

あるいは義妹の琴音と共通したものを感じる。もっとも、それを本人に伝えたら頬を膨らませて冷戦続行である。

「……この間のは出鱈目だ」

『……』

「とりあえずはうちで預かってるけど、俺の子供では断じてない」

そう言えば、本当の歳の頃に通っていた学校の同級生の中には結婚して子供がいる者もいる。自分も歳を取った事を今更のように感じた。

『……本当か？』

「ああ」

『本当に、本当なんだな？』

「ああ、しつこいよ」

すると一転、心の底から嬉しそうに宣言する。

『し、信じて得るからなつ、今度は絶交だぞ！』

まるで小学生の仲直りだ。

『じゃ、じゃあ、明日の放課後、大丈夫か？』

「ああ、明日の放課後？
ちよつと待て……」

制服のポケットから手帳を取り出して確認する。

「明日は……と、大丈夫だよ」

『そ、そうか、じゃあ、明日は付き合えよな！』

「わかった、わかった」

約束だぞ！と念を押すエミユルとの電話を切ると、ややポカンとした様子の塚本。

「どうした？」

「……いや、相変わらず見事な変わり身だなんて」

普段の、温厚な高校生と冷徹な作戦部第三課の課長、もとは意図して切り替えていたが、この頃では条件反射にちかいものとなっている。

ぐす、ぐす……くしゅん

噤り泣く声につられて二人が眼を向けると、鍵をかけっぱなしだった物置の部屋の扉からそれは聞こえた。

「うつ、悲しいです、私、誠さんに、そんな優しい声で話しかけてもらったことありません」

しくしく、めそめそ、そんな音が聞こえてきそうなほど陰気な波動を放っていた。誠は心の底から相手にするのを面倒に思った。

帰り支度をする。

「あら、御帰りで？」

「ああ、数学の宿題が残っているんだ」

シニカルに笑いながらシニカルな事を言う誠は学校鞆を肩に担いで家路につく。本当に面倒だったが、物置部屋の鍵をはずしてやる。

ペアと明るい顔で外に出てくるユリアンヌを押し込めてアパートを出る。

数学の宿題の提出期限は明後日だったが、明日はエミユルと約束してしまった。今日中にやるしかないだろう。

（数学は昔から苦手なんだよな）

その事のみが気がかりだった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

昼休み、転寝から目覚めた誠は昨日、第七区域のアパートに設け

られた警備局第三課の事務室での出来事を思い出していた。

一足早く購買のパンを食べ終えた誠は机に顎をつきながら教室の様子を見る。

エミユルは朝から上機嫌だった。いつもは碌に手入れされていない金髪も、今日は櫛で整えられている気がする。髪の毛からはみ出す尖った耳が、先程からせわしなくピョコピョコと動く。

周囲のクラスメイトからは既に事情を看破されてデートだからかわれている。当人である誠の周りには人がいないが、その違いは仁徳か。

中等部時代のクラスで浮いていた彼女（当時は何？）の姿は既になかった。

実年齢が二十七歳で、十も歳が離れていると、中々クラスには馴染めない。そこは、誠にとって過ぎ去った過去だからだ。

何となく手持無沙汰で席をたち、校内を探索する。

黒蛇ケツアルコアトルの事を考えながら、直前に助けた女子高生の二人組を思い出す。

助かっただろうか、幸いにも死者は出なかったそうだから、助かったと信じたい。戦闘においては冷徹でも、人並みの良識と真心は持っているつもりだった。

「その貴方」

自分にかけられた声と気がつくのにしばらくかかった。

振り向くと、ブレザーにスカート、襟に付けられた三年生の徽章は女子の制服。女性にしては高い身長、運動で鍛えられた体、化粧気がないながらもそこそこ整っている容姿、髪の毛はショート、そしてあふれる躍動感。

「貴方に、聞きたい事があるんです」

助けた女子高生の一人、北条高子の姿がそこにあった。

黒蛇や幻狼にも感じなかった、特大の災厄の予感だった。

？

第10話 『ペルソナ』（後書き）

誠は実年齢が27歳で、

外見年齢が15歳、

今は17歳と偽っています。

見た目は子供、頭脳は大人、その名は超戦士誠！

幕間 『銀龍姫』

高速道路の外壁に佇む銀髪の少女はこちらを見下ろしている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

視線が交錯し、少女は跳躍した。

「うわっ」

次の瞬間には彼の目の前に立っていた。10メートルは離れていたと言いつのに、明らかに人を超えた跳躍力。

「お前・・・」

少女は冷然とした声で呟いた。冷たく、硬質な美貌も、彼を嫌悪しての事ではない。ただ、そうある事が自然だからだ。

「お前、親は？」

彼は先程の両親の姿を思い浮かべた。

首を横に振り、それが両親の死を肯定してしまった事を感じ、気が付いたら涙が流れて来た。

「そうか」

嗚咽を漏らして泣く彼に、少女は先程と変わらないフラットな声が響いた。

顔は無表情だったが、その頑なな冷徹さの中に、むしろ少女の途方に暮れた色が感じ取れた。

彼はその正体に興味を引かれて、涙の止まらない瞳のまま少女に目を向ける。

何かを言おうと口を開いて……

オオオオオオオオオオオ

凄まじい大音声が聞こえてきて、結局なにも言えなかった。

生き物の声だったが、明らかに人間ではない。金属的な響きに彼は不安を覚えた。

「来たか」

途端に少女の顔が更に冷たいものとなる。

戦いに臨む戦士の顔だった。

オオオオオオオオオオオ

次の瞬間、凄まじい勢いでそれが彼らの前に降り立った。

転がっていた乗用車をぺしゃんこにして現れたそれは狼の样だった。

しかし、縮尺が滅茶苦茶だった。

明らかに体長20メートルは超えている。

まるで小さな山の様なそれが、灰色の体毛をなびかせている。

「・・・・・・」

彼はその現実離れた光景に何も言えなかった。驚かなかった訳ではない。怖くなかった訳ではない。だが、その明らかにこちらに害意を持っている様に思える存在が、牙をむき出しにして、地面が震える程の唸り声を上げていても、落ちついていられる。

不思議だった。

「怖いか？」

少女は聞いた。

彼は良く分からなかったが、怖くないと答えると、少女は「そうか」と返した。

狼から守る様に彼の前に少女が立つ。

少女は背中で微笑んでいる様な気がした。

第11話 『光の残滓』

「貴方に、聞きたい事があるんです」

少女の声は緊張に強張っていた。

視線が交錯する。通りかかる生徒達が、睨みあう（？）二人に怪訝な眼を向けながらも通り過ぎていく。

（何と面倒な）

誠は迷うことなく踵を返すと、教室に戻る事にした。

「待ってっ」

響く声に、周りが静まりかえる。声の主の少女と一緒に、自分も注目を集めていくのを感じた。

「・・・」

本当に、心の底から渋々と言った感じで振り返る。

「生徒会に、貴方に関する封書が届いていて・・・」

ブレザーのポケットから一枚の写真を取り出す。

「ッ・・・」

誠が『易者』の首を絞めている場面だった。身に覚えがありすぎ

る。

(・・・本当に殺してやろうか)

首を絞めたのは自分であると言う事を棚上げして、心の中で『易者』を吊るしあげる。

誠は、自分の精神状態が《墓守騎士》グレイフナイトのそれに切り替わっていくのを感じた。

顔を片手で覆う。

別に、誠は二重人格という訳ではない。

確かに、学校では警備局第三課課長の自分を出さない様に意識しているのは事実だ。が、学校という場所に安らぎを覚えるのもまた事実だった。

エミユルなどは、もう何年も成長を見守っている少女である。彼女の成長はわが事の様に嬉しく思うことだってあるし、学校の文化祭などの行事でもそれなりに心が沸き立つ。

だが、写真の向こうに移る、《墓守騎士》グレイフナイトとしての自分を見て、そうではない自分に入れ替わっていく様な感覚を覚えた。

「・・・これ、貴方ですよね？」

自分よりも背が高い少女を見上げる。徽章が一年生である事を示している。

（同じ学校だったのか）

「同じ学校だったんですね」

きしくも、考えている言葉をそのままそっくり耳から聞いた。

不愉快を隠さずに顔に出すが、少女は怯まなかった。

しかし、それは同時に、眼の前の少女が誠を、自分を助けた神父であると認識した上でのものであると証明していた。

溜息をつくと、誠は手招きをした。

「・・・ここじゃ都合が悪い」

幾分かホツとした様子で少女が息をつく。

「・・・君、名前は？」

「北条高子といます」

今度は落ち着いた声音でそう答えた。

誠は屋上に向かった。幸い、昼休みの賑やかさもあって目立っていない。

階段を上り、屋上の扉に手をかけようとするが、大きな錠前で固定されていて開けられない様になっている。

「・・・」

誠はそれを素手で引き千切る。

後ろで高子が肩を震わせるのを感じた。どうせ暴力沙汰の現場写真を押さえられているのだ。少し怯えてくれればそれでいい。

扉を開き、もうじき衣替えの様気を肌で感じながら屋上に足を踏み入れる。

「それで、何の様なのかな？
俺に聞きたい事があるんだろう？」

高子は何度か視線を彷徨わせながら、意を決して誠を正面から見て言った。

「まずは、先日はありがとう。命が助かった事は御礼を言わなきゃ
って思ってた」

そして

「あなたは一体誰なんですか？」

唇が震えている。目も真つすぐで、スポーティな少女を感情のない瞳で誠は見つめる。

真面目な少女なのだろう。短慮という訳でもなさそうだ。それ故に

（面倒だ）

心の底からそう思った。助けた事を心の底から後悔したが、見捨てればいいと言う事でもない。人道的にもそうだが、第三課で人類

の味方として戦う事で誠は今の立場を得ている。見捨てるなど論外だ。

誠は堅気の人間に対して、ある種の羨望と尊敬の念を持っていた。それは自身がどうあがいてもまっとうな仕事について、あるいは結婚して子供をつくって家庭を持つのは不可能であると考えているからだ。事実として、誠は不死ではないものの不老である。人並みの人生を若いまま終えるのか、もしかしたら今日明日の命なのか、永遠に死なないのか、分らない。

だが、社会生活を営む上で、確実にそれは障害になる。二十年たつても皺ひとつできないなど、周囲の人間からすれば不気味だろう。

だからこそ、社会の闇を覗こうとする気質に対しては心の底から腹が立つ。自分は既に失っているからこそ分かるのだが、その大事な生活を何だと思っているのか。

「……すいません」

高子が謝って来た。顔に怒気が漏れていたらしい。誠は自制した。

「君は……それを何故知りたいんだ」

嘆息する誠に、やや緊張を緩めた高子は、慎重に言葉を選びながら言った。

「……あの光景が忘れられなくて」

黒蛇ケツアルコアトルを素手で止めた凄まじい光景。

まるで神話の時代の勇者と化物の戦いの様だった。

誠は空を仰いだ。

確かに、自分でも絶大な力を持っている自覚はある。唯一ではないが、各先進国に一人、いるかいないか程度の戦略級魔法士なのだ。それ故に、引きつけてしまう厄介事がある。

自らを上回る遠き存在に心奪われた時、人の心の反応はいくつかに分かれる。嫉妬や羨望、憎悪、そして崇拜だ。この少女は誠の強さの引力に引き寄せられている。

危ないと感じた。

誠にだって堅気を巻きこまないだけの分別も、プロとしてのプライドもあるのだ。

「それでも忘れてもらうしかない」

高子が持っていた写真を素早く攫う。

「あっ」

「こいつは没収だ」

情報元は局長に言って握りつぶしてしまえばすむ。責任は全て『易者』に被ってもらおう。誠は自分の利益になると言う意味で、『易者』が生きていて良かったと思う。

忘れる事だ。もう一度繰り返して、茫然と立ちすくむ少女を置い

て屋上を立ち去った。

▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼

第六区域は先日の大騒ぎで慌ただしい。警備局の隊員にマスコミ、瓦礫の撤去作業の従事者など、本来は商業施設の多い地域だが、その物々しい雰囲気の中で呑気に買い物できるものは、余程の大物か、出なければ馬鹿だ。

そのどちらでもないと自任している誠は、エミユルを外縁部近くの人工海岸に連れ出していた。

第六区域が駄目になったせいでそれなりに人も多かったが、出店も出ている。まだ、海水浴は解禁になっていないものの、店の数とバリエーションは負けないものがあった。

誠は先を上機嫌に歩くエミユルの後について露店街を歩いていた。

「さ」

鼻歌なんか歌っている。

ひとまず、連れて来た場所のチョイスを間違えていなかった事がわかり安堵する。基本的に、女の子という生き物は自分の願いを言わない。男に『悟って?』という難易度の高い問題を繰り出すのが得意技だ。

（エミユルは、元は男の子だったはずなんだけどな）

今ではすっかり、ハードもソフトも女の子である。辛うじて魂の部分に男の子が残っているらしく、口調や仕草は雄々しいものだったが。

エミユルが上機嫌なのは、ただ散歩が楽しいだけではない。その頭、こめかみに近い部分の髪飾りにある。ガラス細工のアジサイをあしらった物で、それなりに値段はしたが、送り主の誠は心の中でガッツポーズを取る。

「これでしばらくは大丈夫そうだ」

「え、何だつて？」

なんでもないとエミユルを軽くいなしても機嫌はいいままだ。上々の戦果と言えた。

誠は叔母の助言に感謝した。

『女の子の機嫌を取りたい時はね、とにかく送って送って送る事よ。趣味にあつてなくても、そのうち琴線に触れるものがあるかもしれないし、怒ってたり不機嫌な時でも、大抵は黙るわ』

金をかければなおよし。

女性でありながら、完全に世の女性を舐め切った発言をした寿だったが、今回の事を見るにあながち見当違いな事を言っていた訳ではない様だ。

随分まわったし、そろそろ休みに喫茶店でも入ろうかと辺りを物色していると、こちらをじっと見つめるエミユル。楽しげだった顔が一転、眉がハの字になっている。

誠は、自分が何か失態を犯したのではないかと焦った。何せエミユルは執念深いのだ。早期解決がミソになる。

「ど、どうした？」

「俺、知ってんだからな」

何がだろう。言いよつの知れない不安が沸き起こる。

（まさか、《グレイブナイト墓守騎士》の事・・・）

「昼休み、一年の北条と会ってただろ」

「へ？」

「恍ける気か？」

今度は目を吊り上げる。

「あ、いや、確かにあったけど、そんな事？」

すると背を向けてぶつくさ言い始める。

不味い事に拗ねてしまった様だ。

しかし焦らない。目をつけていた喫茶店の看板に特大パフェの宣伝がうたれていたからだ。事前にチェックしていた店である。そうそう贈り物で機嫌を取る事は出来ないので、万が一に備えて食い物でつる準備をしておいたのだ。

「ねえ、エミユル、あの店に入ろう」

「……………」

「おっきいパフェがあるみたいだよ」

ピクッ

反応があった。勝機を見出して一気にたたみかける。

「あれって、きっとこの前の雑誌に載ってたやつだよ」

ピクピクッ

心情のパラメータの様に、エミユルの長い耳が反応する。

そつと振り返って来た。

「…………食べ物で釣る気だな」

じと眼のエミユルに焦る誠。

（何故っ、いつもはこの方法で釣れるのに！）

失礼極まりない心の声だ。

だが、エミユルも成長しているのだ。ただの子供から女の子に。

「……まあ、いいよ」

その代わり、誠の奢りだからな！

そう言っただん先に進んでしまふ。なんとか危険水域を脱した事にほっと胸をなでおろす誠だった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

北条高子は誠とエミユルの二人から、つかず離れずの位置を保つて後をつけていた。

（あたし、まるでストーカーじゃない）

自己嫌悪に顔をゆがめるが、二人をつける足は止まらない。

そうしていないと気が狂いそうになる。

高子は考える。これは男女の思慕だろうか？

違つと結論する。これは何か、脅迫観念の様なものだ。

高子はそれなりに魔法を能くする者として、自信があった。黒蛇に心を挫かれた後、舞い降りた天使の様な誠に心奪われたのは事実だ。

偉大な画家の名著を前にした時の感動に近い。

（何でこんな、こんな事・・・）

心が追いかける事を拒否しても、体が心を拒否している。高子は自分の体が誰かに操られている様な錯覚を覚えた。

「う・・・」

声も思うように出せない。引きつったようなうめき声しか出なかった。

「あ、北条さん」

呼びかけられて、高子の心臓は一際大きく鼓動をうつ。

（あ・・・体が）

足は止まっていた。呼びかけて来た声に振り返る。

「・・・先生」

「や、久しぶり、北条さん」

先生と呼ばれた人物は男の様だった。様、と言うのは、その男が余りにも人離れして美しく、中性的だったからだ。

学校の教師ではない。事件に巻き込まれた高子に管理公社側が付けたカウンセラーである。既に心配なしと言う事で治療は終了していたので会うのは久しぶりだ。

（先生の名前ってなんだったっけ）

思い出せない。まあ、先生と言えばいいだけなのだから困りはしないのだが。

「変わりはないかい？」

「ええ、あの、お陰さまで」

居心地が悪い。

「すみません、人と約束しているので、失礼します」

足早に立ち去る高子を見守る男。

その眼は血の様に濃い赤に染まっていた。

第12話 『夜の帳』

暗闇。

夜の帳が下りている。

第七区域の工業団地、複数企業共有の資材管理倉庫は、既に従業員が定時で帰宅しているにも関わらず、人と明かりと音で賑やかだった。

ダダダダダダダッ

「弾幕が薄い！」

相手を人だと思っな！」

人（戦闘員）と明かり（マズルフラッシュ）と音（銃声）である。

銃火にさらされているのは鎖に巻かれた金属製の黒い棺桶だった。

撃たれているのは、棺桶の影に隠れた誠だった。

「何だってんだよ、全く！」

辺りには倒れた警備局第二課行動部隊の隊員達が倒れていた。皆死んでいる。

今日はいつも通り、第三課の仕事として、第七区域に現れた魔族

を斃す事をオペレーターのユリアンヌを通して依頼された。

現場に急行してみれば既に魔族は去り、隊員達が血を流して死んでいる。タイミング悪く突入してきた第二課の本隊とエンカウントし、下手人を誠と勘違いした彼らと戦闘になった。

戦闘といっても一方的に銃撃を防いでいるだけなのだが。

「逃がしはしない！」

部下の死を貴様の命で贖って貰うぞ！」

声の主は警備局第二課行動部隊隊長の女だった。

二十代後半。警備局の行動部隊の蒼い戦闘服に黒いベレー帽。ベレー帽から犬の垂れ耳がはみ出し、腰の後ろからは豊かな毛並みの灰色の尻尾が見える。

背が高いながらも女性らしい曲線に満ちた体型で、色白の肌と整った顔立ちは十分に美人の範疇に入るものだった。

（賢狼族、第二課のマリア・キャンベルか）

賢狼族の特徴である犬耳に尻尾、そして、それ以外はほとんど人間と変わらない事から、比較的に人間社会に深く、多く入りこんでいる種族の一つだ。特に身体能力が高い者が多く、軍や警察でも良く見かけるが、マリアとは今日まで顔を合わせた事はなかった。

当たり前だ。

誠は殆ど秘密警察の様に動き、魔族を始末してきたのだ。先日の

第一課行動部隊とののはちあわせも、本来はありえない事だった。

ここ最近は何かがおかしい、と現実逃避してみる。

「抵抗は無駄だ、大人しく投降しろ！」

現実はいつこく誠を追いかけてくる。

「だから、俺がやったんじゃない！」

しかし、銃声に紛れて向こうにまで声が届かない。

（つていうか、絶対に人の話聞く気がないよ！）

棺桶越しに銃弾を感じながらも、実際はあまり焦っていなかった。

誠の強化魔法は常人のそれを遥かに超える。アサルトライフルの銃弾などでは誠の筋肉を貫くどころか傷一つ付ける事は出来ない。

「・・・だけど、応戦するのも不味いんだよな」

どんどん戦闘意欲がそがれていく。

グレイフナイト

《墓守騎士》として活動している間の峻厳で冷徹な気の持ち様も、今では昼間のそれに戻ってしまっていた。

一瞬だが銃声が止む。

（今だ！）

「話し合おう！」

声を張り上げた答えは銃声だった。

ダダダダダダダッ

（何故だあああああああああああああ！！）

「ふ、ふふ、もういいさ」

ふっきれた、引きつった笑いを浮かべて誠は敵の陣容を確認する。二個小隊規模、魔法士による特殊部隊である事を考えるとかなりの大部隊だ。

因みに一流の魔法士は一人で非魔法士の一個中隊の戦力を持つと言われている。ただの兵隊に換算したら二個大隊、小規模な連隊クルスの戦力が集結している事になる。

（豪華な事だ・・・）

だが、問題は何一つない。

不敵に笑うと、誠は銃声が鳴り止むのを待たずに跳躍、立ててあった棺桶に足をかけると敵陣に身を躍らせる。

「撃て、撃てええええええ！」

驚愕に満ちたマリアは兵士たちに囲まれた中央に居る。魔法士の

戦闘は通常のそれと速度と流動性が段違いだ。指揮官であっても前線に出るが、だからこそ分かりやすい。

銃弾が誠をなでる。着ている僧服は防弾繊維で弾を通さず、着弾の衝撃をもっともせず敵陣に突っ込むと、銃を構える兵士たちを跳ね飛ばしていく。隊員達も強化魔法を使用しているのだろうが、誠の前では兎戯に等しい。

「ぐおっ」

「こいつ！」

そして驚きに固まるマリアの元まで辿り着く。

「くそ！」

咄嗟に腰のホルスターから銀のナイフを抜きだして斬り着けてくるが、そのナイフをかくぐり、後ろから抱き寄せると跳躍。瞬時に集団から距離を開け、抵抗するマリアをいなしながら再び棺桶の前まで戻る。

「は、放せ！」

「五月蠅い、黙っている」

マリアの首筋に手刀を添える。抵抗は止まった。誠ならば即座に首を跳ねる事も可能であることを考えたのだろう。

「攻撃を続けるなら隊長の首が地面に転がる事になるぞ！」

第二課の隊員達は困惑していた。当然だろう、こんな事態は初めてのはずだ。

人質を取る下劣さを自覚しながらも、誠は続けた。

「まず初めに、俺が君達の仲間を殺した訳ではない！
逃げた魔族の仕業だ！」

「信じられるか！」

マリアが再び暴れ始めた。

抱えなおして抱き寄せると再び大人しくなったが、双方の緊張は高まった。

「だ、だったらお前はなんだと言うんだ！」

マリアによる誰何の声を聞いて、安堵する誠。

（やっとそれを聞いてくれたか）

「ああ、俺は」

警備局の作戦部第三課課長兼行動部隊隊長、だが、こんな子供みたいな見た目で信じてくれるものはいないだろう。ポケットの防弾ケースに身分証が入っていた事を思い出す。

取り出そうと右手を自由にし、左手でマリアを抱えなおそうとした時、左の掌に奇妙な感触があった。

「ぐおっ」

マリアはそれでは止まらなかった。

即座にホルスターから拳銃を抜くと照準、誠を八チの巣にするべく発砲。

パンッ、パンッ、パンッ、パンッ

「だ、だから待って！」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ！！！」

聞く耳を持たず、弾切れになると素早くマグチェンジ。

パンッ、パンッパンパンパンパンッ！

銃声はマリアの残弾がゼロになるまで続いた。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

「似てないわね」

教会の横の自宅のリビングで、誠の息子？の無垢な瞳を見つめながら、蓮杖琴音は呟いた。

中学二年生の琴音は、成長途上ではあるものの、確かな美人の片鱗を持つ美少女だった。可愛いと言うよりも綺麗な顔立ちで、大事にされる御姫様と言うよりも家来を侍らす女王様タイプ。

学校でもラブレター、告白を受ける事は良くあるが、絶対に相手にしない。何故、お願いされてまで付き合ってやらなければならぬのか分からないからだ。

あ・・・ぶ・・・

赤ん坊はミルクを飲んだばかりなので機嫌が良さそうだった。琴音がやろうとしたら、例の如く泣きだしたので、寿が全てこなした。その寿は近所のスーパーに買い物中だ。

琴音は自分の胸元を見る。

（ま、まだこれからだもんね！

この前の身体測定でもちゃんと大きくなってたんだから・・・）

だが、母の寿のグラマラスな体型を思い出してさらに憂鬱になる。自分はああはなれない気がする。

学校では陸上部に所属しているので、どちらかというとスレンダー

「な方だからだ。」

「でも、男の人ってああいう方が好きだって言うし……」

学校で男子を大量に振りながら、男の好みについて考える矛盾に気が付いていない琴音。

そう言えば、誠も時々、寿の揺れる胸に釘付けになっているのを見た事がある。誠の見境のなさに憤慨したもののだが、当の寿は笑っていた。

『そう言うのって男の子の本能だから、つい目で追っちゃうのよね』

寿と琴音は母子家庭だ。

そこに誠が加わったのは、琴音が一〇歳になる前の事だったと思う。

本当の兄ではなかったが、琴音は誠の事を兄だと持っている。そして、それは誠も同じだろうとも……

見た目は若者であるのに、妙に落ち着いたと言つか、達観した、老人の様な静けさが誠にはあった。

（クラスの男子では、ああいうのはいなかったわね）

まだ誠が今の自分と同じくらいの年ごろを思い出しても、やはり普通の男子とは違った様な気がした。

よくクラスメイトや女の子の友人にから聞く話だが、兄や姉の年上で異性の親族を持つと、この頃から急速に仲が悪くなるらしい。クラスでよく兄の悪口を言っている友達の事が思い出された。

琴音と誠も、年頃の兄妹である事を意識してそれなりに距離を置いているが、クラスメイトが言う様な、悪感情はあまり理解出来ない。

大抵の場合は、歳の差と言っても、たかが一年から三年程度である。精神年齢も大して変わらない事を考えると、素直に兄や姉とする気にならないのだろう。

だが、誠は違った。少なくとも琴音にとっては違う。

何と言つか、中身と外側が一致しないのだ。

勿論、誠も年相応に笑い、怒り、困り、色々な表情をする。だが、時折見せる真剣な表情、峻厳な眼差しは、琴音でも寒気を覚える程だ。

（特にバイトに行く時）

誠は警備局の事務処理のアルバイトをしていると聞く。かなり不定期に呼び出されるのだが、家を出る間際に見せる表情は、穏やかな中にも恐ろしい程獰猛な何かを含んでいる様な気がしてならない。

「本当に事務処理なのかしら、仕事って」

だが、誠はタグを持っていない。特区の危険な仕事は魔法が必要な筈なのだ。琴音の左の手の甲にも銅色の魔法陣が刻まれている。

ピン、ポーン

呼び鈴が鳴った。

思索を中断してリビングのインターホンに駆け寄ると、受話器を取った。
？

第13話 『空隙』

朝方の通勤ラッシュも過ぎた頃合い。

特区内の幹線道路を走るジェットクリーニングの看板を背負った一台の車が走る。

『お疲れ様です』

未だに外してなかった通信機のイヤホンから洩れて来るユリアン又の労いに返す気力もなく、誠は後部座席であおむけに脱力している。

「酷い目にあった」

マリアの残弾がつき、部下からアサルトライフルを借りようとした隙について逃げだしたのだ。近くに待機させてあった塚本が運転する車に乗り込み、追手を警戒した偽装ルートを通ったら、外は既に明るかった。

（朝帰りになっちゃうな、学校も間に合わない）

蓮杖家は基本的に放任主義であり、昨日も家を出る前に寿に言うてあるので問題ないと思う。

「でも、役得だったんだろう？」

ニヤニヤしながら運転席の塚本が言った。

「・・・黙れ、代金のつりがアサルトライフルの弾でいいんだった

「お前もやってこい」

「いや、それ普通の人間は死んじゃうから。あと、もうすぐ第五区域だから支度して」

誠の自宅のある教会までの運搬役でもある塚本が告げる。

「分かった」

着ていた僧服のベルトをはずして脱ぐ。

誠が下に来ていたのは、シャツとズボンではなかった。まるでライダースーツの様にピッタリと体を覆う、漆黒のボディースーツは革の様な外観ながらも、その実は特区の魔法技術により生み出されたプロテクターだ。伸縮性が凄まじく、この装備にS、M、Lなどのサイズは存在しない。全て同一規格で対応できるという驚異の一品だった。

（特に、俺の場合は伸縮性ってところが重要か・・・）

金属製の留め金を外してプロテクターを脱いでいくと、カモフラージュで車内に吊るしてある大量の服の内の一つ、誠の制服を取りだして着替えていく。ネクタイはしめない。正直、シャツを着て、ズボンをはくまでで精一杯だ。

心の底から衣替えが待ち遠しくなった。

教会の前で車が止まった。

「お疲れ様」

塚本に掌を振りながら車外に出ると一息つく。

学校は確実に遅刻だ。行こうか行くまいか迷うところだった。

（ああ、そう言えば琴音の学校は創立記念日か）

教会の横に立てられた自宅の玄関まで歩いてインターホンを押した。

しかし、待っても誰も鍵を開けにこなかった。

（あれ、開いてる）

扉を開いて靴を脱ぐ。

「おい、琴音？」

リビングに足を踏み入れると誠は凍り着いた。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

予鈴が鳴った。

朝、ホームルームが始まる。

（誠の奴、いないな）

エミユルは斜め後ろの友人の席を除くが、その主は不在だった。

教師が教壇に立ち、出席を取り始める。

「ねえ、ねえ」

隣の席の賢狼族のクラスメイト、アリア大島が小声で話しかけて来た。

「昨日、どうだったのよ」

「え？」

「デートだったんでしょ？」

「ッ・・・」

エミユルの顔が瞬間的に茹でダコになる。

「ば、そんな、お、俺、そんなふしだらなっ・・・」

「だったら、他の女の子が蓮杖君とデートしてたらどう思っつのよ」

アリアの見事なまでの話のすり替えに気がつく事が出来ず、エミユルは口を尖らせてぶつぶつ言い始めた。

分かりやすい臍の曲げ方である。

「でも、蓮杖君の事が嫌いな訳じゃないんでしょ？」

「ん、ああ、まあな」

むしろ好きである。

再び赤くなるエミユル。

「どうしたの？」

「な、何でもないっ」

教師はいつも出席を取り終わると直に出て言ったのだが、今日は違った。

「あー、今日は皆に紹介したい人がいる。英語の補助教員のマイケル先生が本国に戻ってしまった代わりにいらっしゃった先生だ。はい、どうぞっ」

恐らく外に待機していたのだろう。

閉まっていた教室の扉が開いた。

男の様だった。様、と言うのは、その男が余りにも人離れして美しく、中性的だったからだ。銀色の髪は陽光が反射して光っているかの様だ。

ダブルのダークスーツを着こなしている姿は、まるで貴族か王子様で、その顔には完璧なアルカイツクスマイルを浮かべている。

一部を除く女子生徒と、一部の男子生徒の間からため息が漏れた。

男が教壇に上り、担任の横に立つ。

その時、地震が起こった。

ゴゴゴゴッゴバツ！！

地響きの後、爆発。

（え、何だ？）

特区は人工島で、建設に際して自身の振動は無効化される様な構造となっているはずだった。

「う、うわああああああああああああっ！？」

窓際の人間の男子生徒が悲鳴を上げる。

男の事など全て忘れてクラス全員が窓の外を見る。

黒い蛇だった。

その黒い蛇はあまりにも巨大だった。頭部は軽自動車程もある。まるで龍の様に雑貨屋から顔を出したそれは、三階のエミル達の教室を窓から覗いていた。

教室中がパニックになりかけた刹那、男が拍手を打った。エミルも含めて強制的に男の元に視線が集まる。

クラス中の生徒達の視線を集めたのは、音を出した手ではなく、その眼。

赤く、妖しく光る瞳の光だった。

男が微笑む。

（あ……あれ……）

エミユルの意識はここで途絶えた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「……琴音!？」

リビングに足を踏み入れる。

窓ガラスが割れ、物が散乱し、部屋の中央で膝を抱えている琴音がいた。

「おい、どうした!」

肩に触れると、一瞬怯えたようにビクリと震えると、恐る恐る振り返った。

「……………お、お兄ちゃん?」

恐怖に引きつった表情が茫然としたものになり、やがて目に涙を溜めて安堵の嗚咽を漏らす。

琴音を胸に抱き寄せる。肩を震わせて怯える琴音が落ち着くのを待った。

「琴音」

静かに、なるべく優しく問いかける。

「一体何があつた」

「・・・あたし、今日、学校が御休みだったの」

訥々と語り始めた。

「朝、あの子と御留守番してたらピンポンが鳴って」

再び顔が恐怖に染まる。

「変な女の人が出て、それで・・・」

それで

「それでっ、赤ちゃん攫って行っちゃったの！」

誠は室内を見渡した。荒れてはいた室内に赤ん坊の姿はなかった。

（ちっ、分かりやすい目当てだ）

「いきなり、あの子を寄せつけて、でもあたし抵抗して、でもどうにも出来なくなつて！」

「琴音、それはいつごろの話だ？」

「え？」

「・・・十分くらい前・・・多分」

誠は即座に立ち上がって自室に戻ろうとする。密かに設置した監視カメラが犯人を捉えている可能性があった。

「待つてっ」

琴音が誠の袖を掴んでいた。

「・・・あたし、怖い」

体は震えていた。

「お願い、そばにいて・・・」

（無理もないか）

一方的な暴力に晒された直後だ。だが・・・

「甘ったれるんじゃない」

「ッ・・・」

「お前よりも小さい子が危ない目にあっているんだぞ」

琴音は俯きながら誠の袖を放した。

僅かな罪悪感に駆られたが、仕方がない。緊急時だ。

誠はうなだれる琴音の頭に手を乗せた。

「お前が本当に危ない時は俺が駆けつけて守ってやる。大丈夫だ。兄ちゃんを信じろ」

「・・・うん」

もう一度琴音の肩を叩いて二階の自室に駆けあがる。

システムとリンクしたパソコンは待機状態にしてあったので直に起動した。

監視カメラからの記録映像を確認しようとしたところで、ポケットに入れてあった携帯が震えた。

「はい、蓮杖」

『誠さんですか！？』

ユリアン又だった。通信では冷静沈着な彼女にしては珍しい、慌てた声だった。

「お前か、俺は今忙しくて・・・」

しかし、その切迫した声に嫌な予感を感じる。

「いや、いい。何があった？」

『は、はい、誠さんは今は自宅ですよね？』

「ああ」

安堵の空気が伝わってくる。

「・・・一体どうしたと言った」

『はい』

緊張で強張った声が耳元に響く。

『黒蛇ケツアルコアトルの長命種による襲撃が起きました』

「なに！」

『場所は特区第五魔法学院・・・誠さんが通われている学校です』

誠は通話状態を保ったまま携帯をシャツのポケットに入れる。

監視カメラを素早く確認した。

「・・・」

「・・・お兄ちゃん？」

部屋のドアから琴音がこちらを窺っていた。

誠は座っていたパソコンデスクの椅子から立ち上がると、素早く
琴音に歩み寄って言った。

「俺は少し出てくる」

「………うん」

引きとめようとして、先程の言葉を思い出したのだろう。少しの
間があった。

「必ず戻ってくる。寿さんに説明、出来るな？」

「うん」

「よし、良い子だ。では行つて来る」

誠は戦場に向かった。

(……何が起きている)

靴を履いて外に出ながら監視カメラの映像を思い出す。

そこには赤く眼を光らせた北条高子の姿があった。

？

第13話 『空隙』（後書き）

北島、負けちゃったね

幕間 『邂逅』

巨大な獣が宙を舞う。

断じて跳躍している訳でも、駆けまわっている訳でもない。

殴り飛ばされた、その衝撃でだ。

オオオオオオオオオオオ

巨大な狼は、下にあつた乗用車をぺしゃんこにしながら地面に叩きつけられる。直に起き上がったが、ダメージが残っているのだろう。足元がふらついていた。

彼はアップパーカットの姿勢のままでいた少女を信じられない様な目で見える。

実際に、その眼で見ても信じられなかった。彼が好きな変身ヒーローだってここまで一方的な戦いはしない。技と経験を十全に活かして戦い、そして勝つのだ。

だが、眼の前の少女は違った。爪と牙で襲いかかった狼を無造作に殴りつける。ただそれだけだった。タイミングを見計らった訳でも、何でもない。ただ、速さと強さと鋭さが圧倒的に勝っていた。その結果だった。

少女は狼を横目に一台の乗用車の前に立つと、ボンネットに抜き

手を放ち、突き刺したまま片手で持ち上げる。

ビュンッ

何かを引き裂く様な音がしたと思ったら、少女が車を投擲した後の姿勢を見て彼は音の正体を知った。

巨大な狼は避ける間もなく、巨大な質量攻撃を受けて吹き飛ぶ。

空中で上手にバランスを取ると、不利を悟って後を向いて逃げた。

「犬畜生が」

吐き捨てる様に少女が言うと、更に大きい2トントラックを両手で掲げる様に持ち上げて、投げる。

追撃の弾が狼に着弾、燃料に引火して爆発を起こした。

ドオオオオオオオオオオオオオオオ

少女は飛ぶように駆けると、着弾点に至る。

「・・・・・・・・・・」

そこには下半身を潰され、上半身の大半を焼かれて瀕死の狼が息

絶え絶えの状態で唸っていた。

生命力凄まじく、噛みつくとする狼の顎を蹴飛ばして碎くと、返す足で頭蓋を踏み碎く。

そこで事切れた。

少女が彼の元に戻ってくる。

「すまなかった」

謝る少女に彼は何に謝られているのか分からなかった。

「助けに入るのが早ければ、もしかしたら君の家族も・・・」

少女の戦いはそれほどまでに凄まじく、彼の心から家族の死の悲しみを忘れさせていた。が・・・

その絶望が少年に再び押し寄せて来た時、彼はあまりの重さに膝をついた。

どうすればいいか分からなかった。

悲しい、辛い、苦しい、その感情への対処の方法が分からない。あまりの圧倒的なストレスに、彼の精神は限界を迎えていたのだ。

「・・・・・・・・」

少女が手を伸ばす。その様子を茫然としながら見つめ、少女が彼に手を差し伸べている事に暫くして気がついた。

「……一緒に来るか？」

ハッとして少女の顔を見る。

迷う様な、葛藤を感じる様な、そんな目だった。しかし、その中には寂寥と孤独の色を感じさせる。

その目に引かれる様に彼は少女の手を取った。

彼には寄りかかる存在が必要だったのかもしれない。

第14話 『ノーライフキング』

（ここは何処？）

北条高子はただ漠然と、そんな事を考えていた。

そこは巨大な石室だった。石の壁、石の柱、が立ち並び、石の祭壇に石の巨大な像があるその光景は、さながら古代の神殿だ。

祭壇の篝火で何とか明るさを保っていたが、その程度では照らしきれない。野球場の様な広さと高さを誇っている。確認できない程の暗闇の広さを知っている理由は、高子自身が灯りの届かない暗がり

に居るからだった。

石室には沢山の人影があつた。皆が総じて若く、何より同じ服を着ている。特区第五魔法学院の制服だった。

高子も含めて、全てがぼんやりと宙に視線を彷徨わせている。

あぶ・・・・・・・・

胸元から聞こえる赤ん坊の声に引き寄せられる。

（この子・・・・）

自分が何故赤ん坊が抱いているのか理解できない。

何故自分の腕に、そもそも誰の子供なのか。

(・・・思い出せない)

朝、通学途中に意識がぼんやりし始めて、引き寄せられるように教会に辿り着いたところまでしか思い出せなかった。

「その子をこちらに寄こしなさい」

男の声が響く。

(先生・・・)

銀髪の実麗な男、高子のカウンセラーだったはずの男だった。

高子の体が自然に動き、赤ん坊を男に手渡した。

男は満足そうに促すと、もといた祭壇の方に戻って行った。

「・・・」

高子は何も出来ず、言えず、ただ佇んでいるしかなかった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼

男、《吸血王》ロードブラムは祭壇に赤ん坊を寝かせる。

大人しいものだ。もしかしたら満腹のせいかもしれない。

「やっと、やっと取り戻した」

呻くように、嘆く様に、歓喜するように男は呟いた。

高子のカウンセラーをしていた男、世に知られる十三使徒の一人として常の魔法士を遥かに凌駕する戦略級魔法士の一人。吸血鬼だった。

ルーマニアの屋敷から消えた赤ん坊を探し、所在地をつきとめて特区に潜入した。

男の得意な魔法は精神干涉魔法である。これは男が、と言うよりも、男の種族が体質的に備えている特技だ。それを通常の同胞とは比べ物にならない程の出力で発動でき、黒蛇ケツアルコアトルの長命種、ランクSの魔族すらも支配下に置く事が出来る力が、《吸血王（ロードブラム）》を使徒たらしめている理由である。

反面、精神干涉魔法に体質的に専念しているため、他の系統の魔法が全く使えない。故に、絡め手を使わねばならない事が辛い部分ではあった。

特区に入り込み、ランダムに数多くの人間を支配下に置いた。かなり効率の悪い情報収集となってしまったが、目的の赤ん坊を見つけるまでは目立つ訳にはいかなかった。

（警備局は大した問題ではないが・・・）

この地には自分と同じ使徒の一人が守護者として存在している事

を考えるに、その者との衝突は避けられない。

精神干渉魔法の弊害、自我の希薄化は人が社会生活を営む上でかなり目立ってしまう。情報収集の痕跡を誤魔化すためにも、黒蛇をつかつて特区全体の注目を一点に集め、さらに懸念の《墓守騎士》グレイフナイトを引っ張りだす事に成功した。

だが、同時に問題も発覚した。

赤ん坊が《墓守騎士》グレイフナイトの元に居たのだ。

故に、赤ん坊を取り返す過程での衝突は不可避。

彼の者との戦いに万全を期す。

一番の幸運は、北条高子を虜に出来た事だろう。黒蛇と彼の戦闘を目の当たりにし、その正体までも知る事になった数奇な少女。元々あった《墓守騎士》グレイフナイトに対する興味を少し強いものにするだけであったので、大分長い間、人形ではなく自然な人として情報源とする事が出来たのだ。

そして今日、とうとう戦いの火ぶたが切って落とされた。

赤ん坊を奪還し、自らの存在を露わにしたのだ。

黒蛇が地下に構築した広大な巣が戦場、その最深部がこの石室。

「だが、ここに辿り着く事は出来るかな？」

その言葉は、未だに地上に在るであろう宿敵に捧げられた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

虎ノ門の様な第一区域の警備局本部庁舎ビル。

その最上階、幹部役員の会議室はマジックミラーの壁からは晴天が広がる景色が一望できる現代的オフィスのカンファレンスルームだった。ミニサッカーが出来そうな広さの会議室の中心には、二十人は座れるガラスの円卓が鎮座し、壁際には巨大なスクリーンが展開されている。

警備局作戦部第二課行動部隊隊長、マリア・キャンベルは、蒼い戦闘服のまま、ベレー帽は被らずに灰色の犬耳を垂らしたシャギーを揺らして入室すると、円卓の内の一に腰を降ろした。

殆ど席は埋まっている。

「あれ、あたしが最後？」

「そんな事はない」

答えは隣から帰って来た。

第一課行動部隊隊長であるローガン牧島だ。

二人は所属は違うものの、同じ隊長として顔を合わす機会が多かった。マリアにとっては戦友でもあり、年上の友人でもある。

たまに飲みに行くが、機会は多くはない。

『俺は既婚者だからな』

かなりの恐妻家だと聞いた。

若い女性の隊長と言う事でマリアは横のつながりが薄い。部下との信頼関係は厚いが、軍隊において女性を隊長に頂くとする事は、女王様と奴隷の関係に近い。そう言う意味で、わけ隔てないローガンは本当の意味で頼りに出来る同僚だった。

「今回は局長も出席するらしい」

「え、珍しい」

局長の桜木蔵十郎は滅多にこういった会議に出席しない。局長補佐も兼ねる秘書を通して支持を出すのが常だった。

（流石に今回は出て来たか）

先日の黒蛇事件、第六区域に甚大な被害を齎したそれは、今回第五区域の特区第五魔法学院を襲撃し、二学年のクラス分を拉致、地下の巣に引っ込んでしまった。

特区史上未曾有の大参事である。

「しかもそれだけじゃない。今回は第三課も出席するらしい」

「え、予備部隊の？」

書類上のみ存在するとされる部隊の関係者が全体会議に出席する事は今までなかった。

「確かに、今回は総動員で事に当たらないと不味いかもね」

「ああ、だがこのタイミングで表に出てくる事には何か意図を感じるのだが」

ギィ

会議室の観音開きの扉が開かれる。

その人物に、ローガンと MARIA は驚愕する。

「あ、あんた!？」

それはカトリック式の僧服を纏った神父の少年だった。

少年は MARIA の顔を確認して忌々しげに舌打ちすると自分の席を探し始める。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!」

詰め寄って肩を掴んで、やっと面倒そうに MARIA に振り向いた。

「・・・何だ」

「何だじゃないわよ！」

何でこんなところに居るのよ！」

それは会議室にいる全員の困惑だった。訳が分からないものを見る様に全員が誠に注目している。

滅多に驚きを示さないローガンも狼狽と驚愕の表情を表していた。

「何故って、俺もこの会議に出席するからだが」

その言葉に更に混乱するマリアと、どこかで納得を覚えるローガン。局長から聞いた言葉を思い出していたからだ。

ギィ

閉まった扉が再び開き、そこから秘書を伴った局長桜木厳十郎が姿を現した。

「どうかしたのか」

巖のような声で問う厳十郎に、思わず背筋を伸ばすマリア。

「はいっ、申し訳ありません出した……ただ」

素直な疑問を口にする。局長はマリアからしてみれば雲上人。緊張と混乱が口に出させ

たのかもしれない。

「ただ、その少年が会議に出席するという事で……理解できなくて」

すると蔵十郎はしばし間を開けて鼻を鳴らす。

「そんなもの、会議に必要なだからに決まっているだろう」

蔵十郎は少年に目で合図する。

局長の意図を悟った少年は一步前に出て、全体に聞こえる様な声で言った。

「俺は警備局作戦部第三課課長蓮杖誠といいます。今回の作戦では皆さんと初めての顔合わせ、共同作戦となりますが、よろしく願います」

優雅と言える程にお辞儀をした蓮杖課長、誠は困惑し、当惑する面々に嫣然と微笑んだ。

ざわめく周囲を余所に第二課課長であるマリアの上司の隣の席に深々と座ってしまった。普段はどんな事が起きても眉ひとつ動かさない上司が驚いている様を茫然と見つめるマリア。

「それでは始めさせて頂きます」

局長補佐の若い男が口を開いた。

全体の浮ついた空気が引き締まる。

「先日の第六区域における魔族事件、これを黒蛇事件と呼ぶ事になったのはお知らせしたとおり、この背後関係が明らかになったのでお知らせします」

壁の大きなスクリーンに光が灯り、洗い画像が映し出される。そこには銀髪の男が映っていた。

「裏で糸を引いてる魔法士、ロードフラム《吸血王》……既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、十三使徒の一人です」

目を見開くものは多かったが、それでも驚きの声は上がらなかった。

「黒蛇ケツアルコアトルの長命種を精神干涉魔法で使役し、破壊工作に続いて住民の拉致を行いました」

第五魔法学院の写真が映し出される。恐らくヘリから撮影されたであろうそれには、校庭に空いた大穴と、導かれる生徒達、そして黒蛇が遠巻きに移っていた。

「恐らく、黒蛇が造り上げた地下シャフトを利用しているものと思われます」

ロードフラム《吸血王》及び黒蛇ケツアルコアトルの掃討、地下シャフトの制圧、そして人質の解放。

「優先順位としてはどうなっているのでしょうか？」

「不届き者の首が最優先だ」

蔵十郎が告げた。

「根元を絶たんと終わらん問題だ」

元凶を速やかに塵殺せよ。

それが彼らに降された命令だった。

息をのむ者、覚悟を決める者、様々だったが、静かに決意を決めていく面々の中でローガンが手を上げた。

「この場合、作戦部全体の共同作戦となります。隊長格が三人いる事になりますが、指揮命令系統はどうなるのでしょうか」

参加者の眼がローガンに移り、マリア、そして誠に移る。誠の眼から何の感情も感じられなかった。

蔵十郎はしばし目を瞑り、そして言った。

「・・・蓮杖課長、貴様が指揮を取れ」

「俺が、ですか？」

場が再び喧騒に満ちた。

何故、今日初めて現れた新参者にイニシアチブを渡さねばならぬのか、困惑、憤懣。ローガンとマリアは慎重に蔵十郎の言葉を待っていたが、誠は心底面倒そうな様子で言葉を返す。

「・・・この通り、あまり皆さんは乗り気じゃない様ですが」

「放っておけ、大半は戦闘に出撃しないバックアップだ。指揮権が貴様に移るのであれば必要のない者達でもある」

その場の面々が冷水を浴びせかけられたかのように静まり返った。

マリアは手を上げた。

「失礼します。ならば、戦闘員の現場指揮官として、彼の、蓮杖課長である理由を教えてくださいただけるでしょうか？」

蔵十郎の瞳がマリアを射抜く。マリアは緊張に身を固くするが、耐えて見つめ返した。

「・・・理由は二つある。一つに、蓮杖課長は行動部隊長も兼任している。役職的に妥当だと言う事だ」

指揮命令系統上の正当性である。そして

「二つ目は、敵が《吸血王》ロードブラムであると言う事だ。使徒にしか使徒は斃せん」

蔵十郎の言葉を聞き、そして理解が及んだ時、その場は固まった。一部を除いて表情と思考を凍りつかせる。

「あ、あの、すみません」

マリアは顔を引きつらせながら言った。

「そ、それは、蓮杖課長が、十三使徒の一人であると言う事でしゅうか？」

十三使徒、表向きには人知を超える魔法士、人類の敵として捉えられている。息吹きで海を凍らせ、拳で山を穿つ。人を超える人、超人、魔人の類と言うのが社会に生きる者の常識だった。

「使徒の全てが人類に敵対していると言う訳ではない。人類を守護する使徒が居たとしても構わないだろう？」

そして、蓮杖は、《墓守騎士^{グレイフナイト}》は人類を守る使徒だ」

人類が手に入れた、人類を守るためのジョーカー！。

彷徨えるノーライフキング、それが蓮杖誠だった。

第15話 『王の領域』

《吸血王》^{ロードブラム}の本拠地、待ち受けていると考えられるのは特区第五魔法学院の校庭、及び、先日の第六区域のシヨッピングモールであった大穴から繋がる地下空間であると考えられた。

黒蛇ケツアルコアトルを利用して掘り進められた地下シャフトは広大の一言に尽き、距離、分岐、深度はさながら迷宮と言うに相応しい。

そして

ギョアアアアアアアアアアアッ

奇声を発して襲いかかる大小様々なモンスター達。

黒蛇の眷属である蛇族の魔族、蝙蝠や昆虫、それ以外の名状し難い形状のモンスター達が誠達に襲いかかって来ていた。

（くそっ）

マリアが襲いかかって来た有象無象に咄嗟に銃を向ける。

「やめておけ」

誠が静かな声で制止した。なおも接近する魔族たちだったが、それがある一定のラインを超えた瞬間に、突然ミキサーにかけられたかのように肉片となって弾け飛んだ。

棺桶を背負った誠のタツクルに巻き込まれたのだ。

既に第六区域の入り口から地下シャフトに潜入して二時間近い時間が経っている。どれ程の深度に来たかすら分らない。

地下シャフトの直径は五メートル程あった。曲がりくねり、緩やか、平坦、急こう配の連続のそれらは、警備局の隊員として常日頃から鍛え、魔法を駆使する事を前提とした訓練を積んでいるマリヤ達にとってもハードなものだった。

「しかし、魔族との遭遇率が凄まじいな」

ローガンが呆れと恐れを混ぜた声で言った。

「恐らく、《吸血王》^{ロードブラム}が精神干渉魔法で連れて来た魔族どもだろう。俺はともかく、お前達を少しでも削っておきたいと言うところか」

《吸血王》^{ロードブラム}の強大な力、精神干渉魔法以外は極めて脆弱な力しか持たない。ただの人間であるマリヤ達ですら脅威になりえるのだ。

「・・・でも、戦闘能力は大したことないけど、銃で撃つても死なないんですよ？」

その間にあたし達が精神を支配されちゃったら」

マリヤの懸念を誠が鼻で笑う。

「死なないだけだ。銃で穿ち、手足を引き千切り、五体全てを泣き別れにして封印してやればいい。それに、精神干渉魔法には発動に

時間がかかるらしい。戦闘中に操り人形にされる危険性はほぼ皆無だ」

誠の苛烈な言葉に息をのむマリア達。

疲労と経過時間を鑑みて小休止を入れる事になった。

ランクスが潜んでいる暗闇をライトで照らしながらの行軍。幾ら精強な兵士達といっても、長きにわたるプレッシャーに疲労し始めていた。

（あと一時間が限度）

マリアは休みながら計算する。仮に、既に敵が見えているのだったら覚悟を決めるだけだ。問題はなかったらう。だが、終りが見えない戦いに対する心の損耗度は恐ろしい程高い。ローガンとマリアは隊長である矜持から平静を保って見せているが、部下達の限界はそれほど遠くないと感じた。

（だけど、こいつ）

先程から一向に疲労した様子を見せない。

自分ですら顔に出さないのがやっつとであると言つのに。

「法儀式銃弾は貴重だ。後にとっておけ」

襲いかかる魔族を嬉々として引き千切っていく誠の姿は異様だった。

弛緩する心に活を入れて、精神を引き締める。

適度な緊張とリラックスを保つために何か話そうと思った。

「ねえ」

「何だ」

話しかけてから悩む。そもそも話題がなかった。

「・・・とりあえずで話しかけるなよ、任務中だぞ」

「いいじゃない、警戒と策敵はローガンの部隊が担当しているし、今は魔族がいらないから

あたし達は暇でしょう？」

単なる興味本意ではない。連携を高める上での意思統一の意図もあった。

マリアの考えを悟った誠が渋々と聞く体制に入る。

何でそんなに強いのか？

本当に使徒なの？

第三課って他に人いるのか？

様々な疑問、質問が頭に浮かんでは消えて、そして口から出た言葉は考えていたものとは別のものだった。

「あんだ、魔族と戦うのが怖くないの？」

あるいは、これ程の強さを手に入れば恐れる必要もないのかもしれない。

「まあ、sonだけ強ければ怖がる必要も・・・」

「怖しさ」

「え？」

「怖い、だが、それ以上に憎い」

極めて冷静で、冷徹な表情と雰囲気醸し出していた誠が一変する。

(うつ・・・)

怒り、憎しみ、侮蔑、嘲弄、ありとあらゆる負の感情を煮詰めて凝縮した様な圧倒的な覇気がにじみ出て、マリアは圧迫感に息を詰まらせる。

他の休憩中の隊員達の眼も集めてしまい、罰悪そうに誠は感情の矛を収めた。

「・・・すまん」

「うつん、こちらも嫌な事聞いたみたい。御免なさい」

素直に謝るマリアにやや意外そうな顔をする誠。

「何よ」

「いや、謝れる人なんだなって」

失礼極まりない言葉に慚然となるマリア。何か抗議の言葉を発しようとして、出来なかった。

前方の、哨戒していたローガンの部下達がざわめいている。

「どうした」

部下と話し合っているローガンに声をかけた。

「ああ、偵察をしていた者から妙なものを発見したと報告を受けてな。敵陣である可能性もある」

さつと緊張が走った。

即座に休憩を中断して戦闘態勢に入る。

ローガンの部隊の先導に従って進むと、そこには信じがたい光景があった。

「こ、これは・・・」

マリアも、誠すらも驚愕して眼の前のそれを見た。

まず門がある。

黒蛇がその体で押し固め、焼き固めた通路ではなく、唐突に開けた視界の先にはローマのポルトゥヌス神殿を思わせる広大かつ巨大な通路、そしてその先には

「信じられん」

その先には、古代ローマを思わせる都市の光景が広がっていた。

ローマ帝国特有の機能性、合理性と優美さを併せ持つ荘厳な建築様式。広大な都市の中心にはフォロと呼ばれる広場が設けられ、カイサルが建築したとされるマルツケルス劇場にパンテオン神殿まである。

まるで古代のローマ帝国を目の前にした光景だった。

地下であるのにうつすらと明るいのは、随所に設けられた松明のお陰だろうが、焰は赤くない。緑の様な蒼の様な、不気味な光が、そこは現実界ではなく、冥府の始まりを思わせるものだった。

人誰一人見かける事の出来ない死の都市の光景だった。

マリアはこの現象、光景に心当たりがあった。

「・・・これ、『迷宮』だわ」

「何」

誠も、ローガンも、隊員達全てがこちらに視線を向けてくる。

「極めて高位の魔族は、現実を侵食して、自分だけの、自分にとっ

て有利なフィールドを構成する事が出来るって聞いた事があるの。
魔力で支えられた亜空間、きっとこれは『迷宮』だわ。黒蛇ケツアルコアトルの長命種なら可能かも」

そして遙か彼方、古代都市の中に、一際大きなドームを発見する。

「あれが本陣だな」

誠が断言した。

「間違いない。あそこに気配がある」

「そうなのか」

ローガンもマリアも、隊員達もそのドームを見た。

「ああ、気配を隠すつもりもないらしい。挑発している」

緊張に満ちた目を地下都市に向ける中、石畳を踏む音が聞こえた。

「誰だ！」

マリアが上げる誰何の声に反応を示さず、それはポツリポツリと石の建造物の影から姿を現した。

その姿に皆が呆然とする。

「お前達は！？」

海上警備の途中に失踪した警備部第八部隊の隊員達が幽鬼の如く、

赤く眼を光らせてこちらを見つめている光景がそこにあった。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「本当に大丈夫なの、琴音」

「うん、平気よママ」

琴音は母親である寿と共に第五区域内の病院に来ていた。事件に巻き込まれた被害者に怪我がないかどうかの検査が目的だったが、琴音はそれ以外の意図も感じた。

（絶対おかしい。心理テストもPTSDを疑っているんじゃない・
・あれは、正気かどうかを調べるやつ）

「いやあ、申し訳ありませんねえ」

軽薄な口調、軽薄な見た目、そして雰囲気。

誠が家を出て直にやって来た男、塚本英四郎は警備局第三課課長補佐の役職の名刺を差し出して琴音と寿を車に乗せて病院にやって来たのだ。

「本当に態々ごめんなさいね」

と寿。

「いやいや、俺も上司の命令で動いているんで、そこは気にしなく

て本当にいいす」

この塚本と言う男、何から何まで胡散臭い。

寿はすっかり信じてしまっているようだが、塚本の見た目はどう見てもホスト崩れだ。こんな警備局の隊員なんているのか。

「あー、琴音ちゃん信じてないな？」

なれなれしくちゃん付けで呼ぶと、塚本は財布からIDカードを取り出すと見せた。

「これぞ俺の身分が怪しいものではないという証拠です！」

警備局隊員のIDカード。そこには髪も短く刈り込んで、リクルートスーツを纏った塚本の写真と共に、名乗った通りの所属と役職を示す文字列。

怪しい警備局隊員、赤い目をした誘拐犯、そして出ていったきり戻らない誠。

『よし、良い子だ。では行って来る』

琴音が見送った兄の姿は、いつもの温和で優しいそれではなかった。どこか雄々しく、禍々しく、まるで戦いに赴くかのようなだった。

（お兄ちゃんは一切何をしているの？）

「琴音、心配はいらないわ、塚本さんは本物よ」

寿が穏やかな顔で琴音の頭を撫でる。

「塚本さんの上司の方とは面識があるのだけれど、彼だったら第三課を騙る者を許しはしないわ。ここにこうしているのが何よりの証拠よ。そうよね、塚本さん？」

「え、ええ、そうですね、課長だったら確実にミンチにします、そんな奴」

塚本はそれまでの軽薄な調子から一転、顔にびっしり脂汗をかき、顔を引きつらせながら言葉を返す。

寿がにっこり笑う。御淑やかな笑みの中に、都合のいい玩具を手に入れた無垢な子供と悪魔の邪悪さを感じさせる笑みだった。

「ママ、塚本さんの上司と知り合いなの？」

「うん？」

ええ、そうよ……よく一緒にご飯なんか食べるわね」

「あ、あの、奥さん勘弁して下さい。それ以上アレだと俺がミンチにされちゃう」

そのやり取りは看護婦に静かにするように注意されるまで続いた。

第16話 『吸血王』

「お前達は!？」

海上警備の途中に失踪した警備部第八部隊の隊員達は赤い目を光らせて、死霊の如く誠達に近寄る。

(なるほど、精神干渉魔法で支配下に置いたのか)

誠は事態を悟った。

不味い状態だった。他の隊員達が戸惑っている。

「撃て」

誠は短く命じた。

隊員達が、ローガンやマリアも含めて肩を震わせる。

「……でも、あれって」

「局長のオーダーは敵の抹殺のみだ。問題ない」

淡々と、努めて冷徹に命令を降した。

反面、誠は内心で焦っていた。

(こちらの心理的隙をつくつもりか……)

明らかに、誠ではなく隊員達の精神を狙い撃ちにした作戦。ここで誠以外の戦力を削るつもりか。

（やるしかないか）

誠はその身に供給される無尽蔵の魔力で強化魔法を行使する。漏れ出た魔力が突風となって周囲を撫でる中、足で石畳を踏みしめて、一気に足元に力を爆発させて石畳を蹴り碎く。

爆発的運動エネルギーに身を任せて、身近な敵、操られた隊員達を片っ端から薙ぎ倒していく。

ババババババッ

遅れてやってくる銃声はローガンとマリア達からだった。

隊員達からは覚悟の意思が見て取れる。やはりかつての仲間、銃を向ける事は抵抗があるのだろうか。

操り人形達が赤い目を光らせて誠に襲いかかる。武器はなく、素手の攻撃だったが、生身の人間とは思えない程の速さと強さだった。

「これは!？」

明らかに人間を超えている。恐らく、魔法による支配で、無理やり限界を超える力を供出させられているのだろう。その証拠に、敵の体が攻撃を受けている訳でもないのにみるみる血に染まっていく。

襲いかかって来た数人を棺桶を楯にして受け止め、はじき返すと、ローガンとマリア達が追いつく様に出た。

アサルトライフル、強化魔法、そして軍隊式の銃剣を駆使して極めて効率的に敵を屠って行く。力は強いものの、あまり連携と言う言葉を知らない敵に対して、まるで一つの生き物かの様に戦い、圧倒していく。

（ほう、なかなか）

誠は心の中で感嘆した。

個の強さではなく、集団の強さを限界まで高めた合理性、その美しさがあつた。あり方としては誠の正反対に位置するであろう。が、それは決して劣るものではなく、何より力強さを感じさせた。

古代ローマの都市を舞台にした市街地戦。

手持無沙汰になった誠が全体を見渡していると、大通りの先、フオロの噴水に腰かける人影を発見した。

男の様だった。様、と言うのは、その男が余りにも人離れして美しく、中性的だったからだ。銀色の髪は陽光が反射して光っているかの様だ。

手にはタオルケットに包まれた赤ん坊。

誠の本能が大きく警鐘を鳴らす。

（奴だ！）

ロードブラム
《吸血王》は微笑み、戦いへと誘っている。

「上等じゃないか」

隊員達は殆ど敵を駆逐しつつあった。誠は自分の敵に向き合う事にする。

風を切る様に敵への疾走を開始した。

▼
▼
▼
▼
▼
▼

（これで最後）

マリアは銃剣の穂先で敵兵の首を突きながら、全ての敵をせん滅し終えた事を確認した。

瞳が憂いを帯びたものとなる。

今、突き殺した兵の顔には見覚えがあった。挨拶を交わした程度だが、それでもやりきれない思いでいっぱいになる。

「キャンベル隊長」

ローガンが走り寄ってくる。

「・・・そちらも？」

「ああ、終わった」

一瞬、黙禱を捧げる様に眼をつぶると、直に見開き言った。

「キャンベル、お前はここで蓮杖課長のサポートにまわれ、我々は人質の確保に向かう」

「・・・わかった」

ローガンが部下を伴ってその場から消えた。

マリアが誠の姿を探すと、大通りをフォロにかけて疾走、その先にいる美麗な男に迫っているところだった。

「あれがつ」

ロードフラム
《吸血王》だった。

マリアも部下達に戦闘準備、散開を命じようとすると、大きな爆発音が響くのを聞いた。

ゴガッ

凄まじい音と共に前方のドームの天井が破れ、瓦礫を纏いながら巨大な蛇が出現する。

黒蛇ケツアルコアトルの長命種の姿だった。

キイイイイイイイッ

まるで金属が上げる悲鳴の様な鳴き声を上げて上空から誠に突進をかける。

「あっ！」

質量攻撃に押しつぶされ様としている誠に思わず声を上げるが、衝突、大量の土埃の中から、足元に大きなクレータを造って黒蛇を受け止める誠の姿が露わになる。

「おおおおおおおっ！」

雄叫びを上げながら受け止めた蛇の頭を横に流すと、慣性で石畳を滑る黒蛇。

その人知を超える戦いを部下に命令する事すら忘れて見とれるマリアと部下達。

再び《吸血王》ロードブラムに距離を詰めるべく走るが、突如として道を囲む建物が瓦礫と共に崩れた。

ゴガッ、ガラ、ガラ

瓦礫の山から、長命種ではない黒蛇ケツアルコアトルが出現、鎌首をもたげる数は実に八体に上った。

これこそ長命種の恐ろしさ。

黒蛇の盟主たる長命種は、他の同族を従えて戦う事が出来るのだ。統制された動きをする強力な魔族は厄介の一頃に尽きる。

九つの首は一つの生き物の様に誠に襲いかかる。

まるで津波の様に迫る黒蛇たちを跳躍してかわし、頭を踏みつけながら《吸血王》ロードブラムへ接近するべく駆けた。

息をのんで戦闘を見守っていたマリアがハッと現実に戻り、慌てて隊員達に指示を出す。

「全員、散開して配置に付け！」

「で、ですが、一体あの戦いにどう介入しろと」

狼狽する部下に同調する他の隊員達。

マリアは拳を固く握ると、そう言った隊員の一人を殴り飛ばした。

「な、何をっ」

「何をじゃない、しっかりせんか！」

反論を許さない一喝に浮ついた雰囲気引き締まり、背筋を伸ばす部下達にマリアは言った。

「《吸血王》ロードブラムも黒蛇も、奴が、蓮杖誠がどうにかする。我々はただ

攻撃のチャンスを探し、見逃さなければいい、そのための戦闘、そのための待機だ！

理解したらさっさと動け！」

敬礼と共に散開、隊員達が古代ローマの街並みに潜りこんでいく。

その様子を見守りながら、誠の方に意識を向けた。

僧服の少年が棺桶を担いで、巧みに蛇たちをかわしていく。頭を踏みつけ、体を昇り、走り、跳んでいく。

その戦いは凄まじく、幻想的でした。

『蓮杖誠がどうにかする』

どうしてその様な事を言ったのだろう。

確かに強い。が、二人の間には信頼関係などない。そもそも、出合いが最悪だった。

マリアは思わず顔を真っ赤にして胸をかき抱く。

直に状況を弁えて平静に戻るが、心臓の鼓動は治らなかった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

古代ローマを思わせる地下都市、その中でも一際大きい存在感と異彩を放つ石のドームの前まで来ると、ローガンは周囲を警戒しながら中を確認する。

中には学生服を着た人影が多数存在したが、外で大規模な戦闘が起きているにも関わらず、茫然と宙を見上げて呆けている。不気味に赤く光る瞳が印象的で、その空間だけが別の世界を構築している様だった。

「これは・・・」

まるで神殿、儀式が執り行われている様な祭壇は、神聖と言うよりも禍々しく、深い闇を感じさせるものだった。

部下に合図させて中に突入させる。

ローガンも中に入り、近くにいた妖精族の少女の肩を揺する。

「おい、君！」

ぶらぶらと揺するが反応がないという状態がしばらく続いた。

「・・・お、俺は」

少女の口から洩れた奇妙な一人称を怪訝に思うローガンだったが、妖精族はこの年頃まで性別が未分化であると聞いた事がある。それ程不自然な事ではないのだろう。

夢遊病者の赤い光は収まったが、その眼にはハッキリとした自己意識が浮かんでいる様には見えない。

辺りを見渡すと、一人、出口に向かってゆつくりと歩く少女を発見する。

ただ、一人だけ、宙を見上げずに歩く姿は異様で、部下達が視線で指示を求めてくる。

手を出すな、と命令して、少女の動向を見守ると、少女はドームの門を潜って外に立ち、使徒の戦いに眼を向けた。

「君っ、外は危ないから中に」

ローガンが声をかけるが振り返らず、ただ前を見据えてポツリと洩らした。

「始まる」

告げる様に、宣言するように、そして前を見据える目からは赤い光が消えかけていた。

「本当の戦いが、始まる」

ゴッフッ

その瞬間、ドームの外が光と、焰と音に包まれた。

まるで地下都市全体を焼き尽くさんとする焰の嵐が全てを撫でた。

第17話 『怨嗟の炎』

まるでそれは黒い海だった。

また一体の黒蛇が誠の体を喰らおうと大きく開ける口を上に乗って避けると、すぐさまもう一体が絞め殺そうと囲んでくる。

長命種の方は《吸血王》ロードブラムを守護するように遠くで佇んでいる。

避けて、避けて、避けて、いつの間にかリズムが定まって来たところで誠が仕掛けた。

口を開けて突っ込んできた一体を避けずに、上顎と下顎を手と足で支えて勢いに流される。

誠はもう一步蛇の口の中に踏み出し、滑る口の中で四肢を踏む様に力むと、撓めた筋力を爆発させる。

ボゴッ

蛇の顎が外れ、肉を引き裂き、誠の手が口腔内の肉と骨を突き破って頭蓋を突き抜ける。急速に力を失っていく蛇の口から脱出すると、次の獲物に取り掛かる。

再び襲いかかる蛇を跳躍してやり過ぎ、古代の建物を跳躍しながら一体の蛇の頭に乗ると、手刀を眼球に突き刺した。

キイイイイイッ

苦しげな声を上げる黒蛇を意にも介さず、そのまま手を進めて脳漿をすくい出すと、痙攣しながら地面に倒れ伏す。倒れた蛇の口から鋭い牙を引っかくと、太い紐の様な神経も着いてきた。

ボディプレスを仕掛けようとする一体を確認し、誠は手に持っていた牙を地面に垂直に立てると素早く回避。

ゴオオオオオッ

凄まじい音を立ててひび割れる石畳だったが、仕掛けた一体は立てられた牙が体に突き刺さりもがき苦しんでいた。

「・・・やはり、毒があつたか」

黒蛇の動きが次第に緩慢になっていく。今までは牙を直接受けなかったから問題なかったが、一歩間違っていたらと思うと思わずぞつとする。

三体の蛇を無力化した。

薄くなった攻撃を掻い潜り、再び《吸血王》ロードブラムに接近する。

長命種が尻尾を鞭の様にしならせて撃ち払ってくる。近場の建物の上に跳んでやり過ごす、更に大口を開けた牙の一撃を放つてくる。

（くそっ）

ギリギリで避けて着地するが、距離を小さくする事が出来ない。

「はははっ、やるではないか！」

《吸血王》ロードラムが楽しげに声をかけてくる。

長命種は力押しだけではなく、理にかなった技術的攻撃を仕掛けてくる。他の個体とは格が違った。

「私が用意したヒュドラーは最高だろ！」

辺りには他の化物達の姿はなかった。不思議に思っていたが、黒蛇の暴風を見越して、用意しても巻き込まれて死ぬだけで役に立たないからだったのだ。

「くそがっ」

再び集結しつつある黒蛇たちに毒を吐く。

（ヒュドラー？）

「黒蛇ケツアルコアトルの長命種は八体の同胞を従えて戦う姿から、九頭竜ヒュドラーと呼ばれているのだ。最も、貴様ら人間の歴史には刻まれていない程の希少種故に知りはしないだろうがな」

知ったところでどうにもならない。ただ、長命種改め、九頭竜ヒュドラーが本当に神話に出てくるような化物である事が分かっただ

けだ。

馬鹿にした様に笑う《吸血王》ロードブラムに近寄る事すら出来ない。周りの蛇たちはじりじりと距離を詰めようとしていた。

「諦めるが良い、我が息子を預かっていてくれた礼だ。苦しまずに殺してやろう」

「ッ……息子、だったのか」

確かに、普通の赤ん坊とは違うと思ったが、まさか吸血鬼の息子だとは思わなかった。

「そうだ、不届きな人間風情が私から奪い取った息子、取り戻した以上、特区には代償と

して沈んでもらうぞ……くっはっは、我々が脱出した後にヒュドラーに『迷宮』を消失させれば良いだけだ。巨大な空洞を抱えた人工島は、一部ではあるが致命的なダメージを負うだろう」

事態がようやく掴めてきた。子供を取り返しに来たと言う事が。ならばこちらが悪役ではないかと心の中で吐き捨てる。だが、ここまできて和解はありえない。戦うしかないのだ。

「愚かしくも、私と姉上との最愛の息子を奪った罪、贖って貰うぞ
グレイナナイト
《墓守騎士》！」

姉弟による交配。

近親相姦による血の凝縮。純血主義を謳う吸血鬼であれば考えられる事だった。弊害を魔力の強さで乗り切り、より純化した力を振

「貴様らはいつもそうだ。下等な劣等種の癖に我々を見下し、虐げ、あまつさえ、姉上を辱めて殺したのだ！」

侮蔑と殺意を等量にした怒気が誠に向けられる。

「同じ目にあわせてやろう」

腕の赤ん坊を慈愛に満ちた眼差しで撫でながら、

「腹を裂き、臓物を撒き散らしてやる。擦じり、切り取り、凌辱し、全てを虐げてやる」

圧倒的な怨嗟に満ちた呪詛を吐き出す。

（なるほど、貴族主義に留まらない人間への侮蔑は肉親を奪われた恨みによるものか）

姉を無残に殺され、息子の存在によって押しとどめられていた人類に対する恨みが、その誘拐によって爆発したのだ。

「決して許さん、許さん」

《吸血王》ロードフラムの体が歪んで見える。本来可視化される筈のない魔力が、あまりの濃密さに空気を歪めているのだ。

「そして、哀れにも屠殺される人類諸君に言葉を一つ送ろう・・・死ね」

顔はどれ程の恨みと憎しみを込めればそうなるのか分からない程醜く歪んでいた。

解決策は未だにない。

う・・・・・・・・うっ

その瞬間、激流の様に流れていた時間が凍り着いた。

「な、何だ、どうしたと言うのだ」

う、ぶ、びええええええええええええええええええええええ

《吸血王》ロードブラムの腕の中の赤ん坊が突然泣き出した。怒気の魔力にあてられたのだろう。

赤ん坊は泣きだした。

先程の憎しみに満ちた表情も忘れ、《吸血王》ロードブラムは慌てて赤ん坊をあやす。

「おお、よしよし、どうしたと言うのだ。お前の父は母の仇を討つべく戦いに臨んでいると言うのに、お前がその調子でどうする!？」

しかし、父の腕の中に収まるのを拒絶するように赤ん坊は暴れ始めた。

「ぬう、いい加減に・・・・」

誠は近くにあった拳程の大きさの瓦礫を掴みあげると、ヒュドラ
ーの鼻に目がけて投擲した。

「・・・なんのつもりだ」

「あんたは父親失格だ。親のエゴを子供に押し付けるんじゃない」

誠自身、どうするつもりでこのような行動を起こしたのか分からなかった。だが、考えながら、思いついた言葉をそのまま口にしていく。

「御父さんは嫌いだそうだ」

「ッ・・・」

「そもそも、あんたは復讐の事ばかりで息子なんてどうでもいいんだろうが」

答えは蛇の突進だった。飛び退いて避けながら言葉を続ける。

「子供を愛している親の行動とは思えないな・・・案外、姉だから奥さんだかの事もどうでもいいんじゃないのか？」

「・・・・・・・・」

クケケッ

答えは返ってこず、俯いた《吸血王》ロードブラムの口から不気味な笑いが漏

れてくる。

「調子にのるなよおおおおおおおおお、糞虫がああああああああああああああっ!!」

九頭竜ヒュドラ―と《吸血王^{ロードブラム}》を囲むように炎熱の壁が展開する。

ゴオオオオオオッ

まるで竜巻の様に渦巻き、焰が地下都市全体を撫でまわす。

（くそ、魔法か！）

属性魔法の中でも炎熱魔法と言われるそれは、ランクSの魔族の膨大な魔力で桁はずれの威力となって誠に襲いかかる。

それだけではなかった。

「何!」

殺した筈の黒蛇たちが再生し始めている。

「ははは、ヒュドラの神話を知らんのか？

何度殺しても蘇る。この九頭竜ヒュドラ―を殺さない限りな!」

焰の嵐が誠を吹き飛ばす。

誠の意識はそこで途絶えた。

幕間 『始まり』

「泣くな」

彼は指摘されて初めて自分が泣いている事に気がついた。

声は下から響いている。視線を向ければ彼女の姿だ。

倒れていた。

傷はなく、しかし弱弱しく、彼の知る限り、彼女が地に伏している姿は見た事もない。

顔色の悪さを見れば分かる。死が迫っているのだ。

「なんで」

思わず声が口から洩れる。

彼は成長していた。出した声が声変わりしている事に今更気がつく。

しかし、眼の前に倒れ伏している少女は出会ったときから変わらない。

未だに綺麗なままだ。

「私とて、禁咒の大秘法で魂を引き裂かれれば生きてはいられない」

淡々とした声だった。

むしろ、彼の方が声は震えていた。

「何でだよ、納得いかねえよっ」

「・・・」

「俺が、俺が死ぬはずだったのに、不死身のヒーローじゃねえか、なんで死んじゃうんだよ！」

「・・・すまない」

「そんな、そんな、こんな事って・・・」

しかし、眼の前の少女は既に目を閉じていた。

動く気配はなかった。

「・・・」

まだ温かい、少女の亡骸にすぎる様に膝をつく。

「・・・おい」

応えは返ってこない。

「おい！」

本当に少女が死んでしまっ、彼は絶望した様に少女に顔を埋め

た。

感情の濁流は涙すら流させない。

途方に暮れた様に絶望する中、彼は視界に光が満ちている事気がついた。

「・・・これは」

光っているのは彼女の体だ。

その光はやがて彼すらも包み、彼の視界と意識を白く染め上げた。

第18話 『亡者の剣』

「おい君っ、危ないぞ!」

目の前で燃え盛る劫火の竜巻に焙られながら、ローガンに肩を揺すられていた少女、北条高子は現実に意識を戻した。

「え、あ、あたしっ……」

「ッ……正氣に戻ったのか」

ドームの内側を見れば、突如として正氣に戻った少年少女が困惑と恐怖に辺りを見回している。

「不味いな……」

呻く様なローガンの言葉の意味を、高子もおぼろげながら察する事が出来た。

仮に、彼らが恐慌状態に陥って、一斉にドームの外で出たとする。しかし、外は炎熱地獄だ。まともな判断力を恐怖に支配された群衆に求める事は出来ないで、かなり高確率で彼らの命は失われる事になるだろう。

ローガンはドームの中心部で手を打ち鳴らして注意を引く。

「注目、注目してくれ!」

大きな声、というよりも音に反応して、草食動物の様な視線を口

ーガンに向ける生徒達。

「君達を保護に来た警備局のローガン牧島だ。現在、外は危険なので、私を中心に集まって欲しい！」

わらわらと生徒達がローガンを中心に集まって行く。

たまたま近くにいた妖精族の少女が焰に焼かれる都市に目をやり

「あっ」

と呟いた。熱に浮かされたように、寝ぼけた様な声であったが、つられて目を向けた高子は放物線を描いてとんでいく物体に注意を奪われる。

誠だった。棺桶と共に瓦礫の山に突っ込む彼に意識がある様には思えなかった。

「ッ……」

高子は思わず駆けだした。

「あ、君！」

ローガンが呼びとめる声が聞こえたが、無視する。何故自分がこの様な行動をとっているか分からない。ただ、心のうちから沸き起こる根拠のない使命感に突き動かされて高子は灼熱の都市に飛び出した。



古代ローマを思わせる広大な都市の中心部、フォロと呼ばれる広場のには焔の暴風が凪いでいた。

嵐の中心部。故の安全地帯。出なければ、自分はともかく腕の中に収まる赤ん坊はただでは済まない。

「しまったな」

九頭竜ヒュドラ―に全力を出させてしまった影響で、人質の支配が解けてしまったらしい。

《吸血王》ロードフラムは辺りを見渡した。

一面が焔の壁、赤一色だった。これでは《墓守騎士》グレイフナイトがどこにいるか分からない。最後の―撃に手ごたえはあったが、念には念を入れたかった。

「だが、関係ないな」

焔の嵐に晒され続ければ、例え《墓守騎士》グレイフナイトといえどもいつかは体力が尽きる。警備局に至っては意識する必要すらもない。後数時間で火傷か熱中症による脱水症状で死ぬ運命にあるからだ。

九頭竜ヒュドラ―を通して黒蛇たちに命令する。

『奴を探せ、途中で警備局のゴミを見つけたら、喰っても構わん』

ズルリズルリと蛇達が四方に散っていく。

その光景は地獄、這いまわる黒蛇が悪魔の様に見えた。

「さて、私は残りのゴミを掃除することしよう」

遙か彼方、ドームに向かってゆっくりと歩み出した。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

ディープ・ブルーという映画がある。

一九九九年、レニー・ハーリンが監督したパニック・アクション映画だ。

新薬実験用に飼育されていた、巨大かつ高度な知能を有する鯨が脱走、研究所を舞台に人類との生き残りをかけた死闘を演じるといった実にアメリカらしい作品だ。

古代ローマを模した地下都市で、今まさにそれが再現されている。海は焰の暴風雨、サメは黒蛇達だ。

高子は民家の中から大通りを覗く。

ズザアッ、ズザアッ

聞いているだけでおぞましい地響きが遠いものとなって行くのを
感じて高子は安堵の息を吐きかけ、自制する。

（いけない、深く息を吸ったら喉を火傷する可能性があるんだっ）

腫れた喉が呼吸を阻害して窒息すると言う事もありうるのだ。

隣に横たわる人物に目をやる。

誠だった。

瓦礫にまみれて倒れていた誠を、棺桶ごともここまで運んでくるのは強化魔法を使える高子にとってもかなりの重労働だった。鉄製の棺桶が重いのは当然として

（この人、一体何キロあるのよ）

見た目に反する体重である事には間違いない。

誠の体は膨大な魔力を受け入れる訓練を積んでいた経験上、その筋密度は常人のそれを遥かに超える。見た目は子供でも、重量級プロレスラー並みの体重があった訳だが、高子がそれを知る由もない。

外では黒蛇が、恐らく誠や警備局の隊員達を探しているのだろう、徘徊していてこれ以上動く隙がない。

「う……………」

「あ、眼が覚め・・・」

目が覚め得たんですか？

そう言おうとして出来なかった。

目を見開き、全身のバネを使って跳躍、高子の背後にまわると首筋の頸動脈に手をあててくる。

後ろで誠の視線が周囲を眺め、棺桶に眼をやるのを感じた。ようやくそこで勘違いに気がついたらしく、首筋から手を放して距離をあける。

「・・・すまない、どうやら勘違いをしていたらしい」

「まあ、荷物も含めて貴方を運ぶのは大変でしたけど」

「重ね重ねすまない。とんだ恥知らずな真似をしてしまったようだ」

高子が振り返って誠に向き直ると、誠は壁に背をついていた。顔には疲労の色が濃い。

その様子到高子は意外な思いになる。

（この人でもこんな顔するんだ・・・）

勿論、殆ど顔など合わせて事がない。話した事もだ。しかし、第六区域で救われて以来、誠は神代の戦神の様に絶対的な存在の様に感じていた高子にとって、それは驚きに値した。

失望はなかった。

何かを話そうとして、熱気が肌を撫でる。苦痛に眉を寄せると、誠は僧服を脱いで高子に放る。

「これを着ると良い。防弾に加えて耐火機能もある」

逡巡しながら受取り、それを羽織る。小柄な誠の僧服だったが、女性でスレンダーな高子には問題なく着る事が出来た。

「……………」

僧服を脱いだ誠は黒いボディースーツの様なプロテクターを纏っていた。

まるでライダースーツの様なそれは、下にある誠の筋肉を浮かび上がらせている。まるで彫刻の様に美しく、高子はその機能美に満ちた美しい体に眼を奪われた。

「……そんなに見つめられると照れるんだけど」

「あ、あ、御免なさいっ」

微妙な雰囲気気の沈黙が下りる。

誠は焰が吹き荒れる外の景色に目をやった。

「まだ、終わっていない」

「え？」

「まだ終わっていないんだ。戦いが」

誠の眼に再び闘志が灯る。外の焰すら生温い、地獄の劫火の様な焰の戦意だった。

床に横たえてあつた棺桶を肩に担ぐと、外に歩み出そうとする誠の手を慌てて引いた。

「ちょ、ちよつと!？」

「何だ？」

「貴方、まだダメージが抜けていないんでしょう？
こんなの死に行く様なものです！」

いつもの誠であれば冷たく突き放していただろう。だが、高子は命の恩人でもある。僅かな逡巡の後、誠は棺桶を床に降ろすと巻き付けてあつた鎖を解いた。

「・・・それが切り札なんですか？」

「ん？」

ああ、切り札と言えば切り札、なのかな・・・」

曖昧に応えると、解いた鎖を取り去って、棺桶の蓋に手をかける。

「君には見ておいて欲しい」

棺桶の蓋を横にずらす。

高子は姿を露わにした物、否、者に見張った。

「ッ・・・この人・・・」

「俺に全てを与えてくれた人だ」

その眼には慈愛と寂寥、悔恨と憤怒が見て取れた。

棺桶の中から姿を現したのは女だった。歳は十代半ば、銀色の髪に白磁の様な肌、まるで妖精の様な可憐な顔立ち黒いドレスを身に纏い、眼を閉じて胸元で手を組んでいる。

「い、生きていますか？」

「いや、棺桶は棺桶だ。そこに入る生者はいない。ノスフェラトゥを除いてな」

死者という事だ。

しかしその肌は瑞々しく、とてもとても・・・

「死んでる様には見えない、か？」

「・・・はい」

誠は棺桶の蓋を閉じた。

「俺に死体愛好の趣味はないが、死してもなお彼女は俺の楯となり、

剣となってくれている。その事に関しては頭が上がない思いだ」

再び鎖を巻き付けて、肩に担いで外に歩いていく。

「君の善意には感謝している」

呟く様に言葉を残して、疾走、跳躍、誠の姿は直に見えなくなつた。

見送る以外になかつた高子は、胸に去来した、戦いに赴く者を見送る不安と置いていかれる寂しさ、そして死してもなお誠と心を通じ合わせている女性に嫉妬を禁じえなかつた。

女に？

それとも向けられている愛に？

分からなかつた。

第19話 『COYOTE』

ダダダダダダッ

地下空間に銃声が鳴り響く。あまりにも広大で、音の反響も感じられないために地下である事を忘れそうになる。

古代ローマの街並みを、蒼い戦闘服にベレー帽、最新の装備に身を固めた兵士達が駆けまわる。

「チームαとβは法儀式銃弾の一点射にて戦線を維持しろ！」

彼らの銃口の先にいたものは・・・

キイイイイイイイ

市中に放たれた黒蛇ケツアルコアトルの一体が鋭い牙をむき出しにしてマリア達に襲いかかっているところだった。

口の中に銀の弾丸を撃ち込むが大して効いている様子はない。

だが、不快感はあるのだろう。黒蛇は牙ではなく巨体を生かした質量攻撃に切り替えて攻撃してきた。

襲いかかる黒蛇は一体だったが、それでも脅威は大きかった。黒蛇同士の縄張りというか、領分があるらしく、ある一定のラインを超えたら襲いかからなくなってくる代わりに、他の個体が襲いかかってくる。

（こいつら、あたし達を餌と見てる）

ギリツと唇を固く結び、歯ぎしりする。

「おおおおおおおおおおおつ」

黒蛇のタツクル

を跳躍してかわして、頭上に着地、その瞳に銃口を突き刺して引き金を引く。

ダダダダダダダッ

くぐもった銃声が黒蛇の頭蓋に響く。

苦しみ、暴れる黒蛇から飛び降りて距離をあける。

（やったか！）

キイ、イイイ、イイイ

苦しくのたうちまわる黒蛇に余力はありそうだったが、直には動けないだろう。マリアはたたみかけるべく部下に号令をかけようと

して凍り着いた。

苦しむ巨体の影から、もう一体が首をもたげている。

（一体が弱ったから他の個体がなわばりを侵して来たのか！？）

絶体絶命だった。

遠くの個体も興味深げにこちらを窺っている。

（不味い！）

マリア達は死を覚悟した。

一体までならどうにかする事も可能だったかもしれない。マリア達は世界で他にない、魔法運用に特化した特殊部隊だ。その実績と練度は伊達ではない。小国の軍隊であれば、真正面から戦っても勝利を収められるだろう。だが、その理が通じない敵が目の前にいる。

（ここまでか！）

クパツと口から牙を覗かせる黒蛇の姿に思わず目を閉じる。

衝撃を待った。

しかし、それはやってこなかった。

「え？」

目をあけてみれば、黒蛇はマリア達から視線を外して、怪我をし

た個体も含めてドームの方を見つめている。

そして、マリア達を無視して去ってしまった。

安堵の脱力でへたり込んだマリアは、追撃の命令を出す事が出来なかった。

▼
▼
▼
▼
▼
▼

エミユルは肌を撫でる熱風に意識を現実に戻された。

「……」

自分が何処にいるのか分からなかった。

「落ち着いて、落ち着いて私の言う事を聞いてほしい！」

ローガン牧島が声を張り上げているのを感じながら、思い出すのは、意識を取り戻す直前、自分は遠くに何か大事なものを見かけた様な気がした事だ。

見渡す限り、石と石の装飾の神殿の様な空間、頭上にぽっかり空いた穴から微かな明かりが月明かりの様に入りこむその空間にエミユルは覚えがなかった。

（……、何処だよ……）

不安が心を苛む。

しかし、自分は落ち着いていた方なのだろう。見れば混乱と共に泣きだす女の子も見えて取れた。

「何だってんだよっ、くそっ!!」

怒鳴り声が響く。目を向けると、クラスメイトの男子が血走った目で辺りに喚き散らしていた。友人らしい男子生徒が後ろから羽交い絞めにする。

「くそっ、くそっくそおおおおおお!!」

怖い、と思った。

(誠……)

エミユルは身をかき抱くと、心の中で最も信頼する友の名を呟いた。

少し勇気が出て来様な気がした。

「よしっ」

友人の事を考えていようと心に決めた。

エミユルにとって、誠は生涯の半身とも言える(と少なくともエミユルは考えている)存在だ。妖精族の定めとして、共に生きる存在として誠を選んだ。

見た目は十代半ばにしか見えない。しかし、眼は疲れた老人の様

な、歳不相応な知性と落ち着きに満ちた光を灯している。

エミユルは女が伴侶を選ぶにおいて、大きく二つに分けられると考えている。一つは自分が得意とする分野において、自分以上の能力を持つタイプ。寄りかかる相手としてのパートナー。もう一つが自分が得意とする分野以外で魅力を持つタイプ。寄りかかり、また寄りかかって貰える、自分の価値を認識してもらえぬ事に喜びを覚える。

自分は後者だろうとエミユルは考えている。

恐らく誠は神父として教会の仕事を継ぐのだから、将来的な収入は期待できないだろう。金を稼げない男には見向きもしない女がいるが、エミユルは自分自身が稼げば良いと思っていた。経済的な余裕を持った上で、自分の伴侶を打算なく選びたい。

（お、俺ってば、何考えてんだよ！）

頬を染めて思考を中断する。

赤く浮ついた顔が、直に不機嫌そうな、悲しそうな複雑な表情に変わる。

とうの誠と喧嘩中（だとエミユルは思っている）と言う事を思い出したからだ。

（・・・女らしさが足りないのか？）

今となつては、合理的に考えて誠に子供がいるなどありえない事を理解している。だが、大事な友人が自分から離れてしまうという

恐怖を体験してしまったエミユルは悩みこんでしまった。

もともと妖精族は十代半ばまで性が未分化だ。女性らしさ、男性らしさは性別が決まってから追及していくものであるし、エミユルも『ゆつくり考えていけばいいや』などと漠然と考えていたが、ここに至って考える機会が出来てしまった。

（髪でも伸ばすか？）

今になっていきなり女言葉に切り替えたら、誠どころかクラス中から大笑いされるだろう。その光景が容易に想像できて屈辱に赤く染まる。

（うつ・・・くそ、どうしたら）

誠を探すべく辺りを見渡す。同じクラスメイトばかりだから見つかるはずと思って探すか・・・

（あれ、あの人・・・）

ドームの入り口付近で佇む人影。

男の様だった。様、と言うのは、その男が余りにも人離れして美しく、中性的だったからだ。銀色の髪は陽光が反射して光っているかの様だ。

ダブルのダークスーツを着こなしている姿は、まるで貴族か王子様で、その顔には完璧なアルカイツクスマイルを浮かべている。

その男の姿を見て、エミユルの本能が急速に、盛大に警鐘を鳴ら

す。

「ゴミは掃除されるためにある」

男が呟いた言葉はよく響き、ドームの中の全てが男に注目した。ローガンは焦った顔で部下に迎撃の指示を出す。

キイイイイイイイッ

後ろから、のっそりと九頭竜ヒュドラ―が顔を見せた時、エミユルは死を覚悟した。

（誠！）

鎌首をもたげた九頭竜がまるで死鎌の様だった。

ドームの中にいる全てが、自らの未来に絶望を覚えた時、それは飛来した。

ヒュガッ

男に向かって瓦礫の様なものが投げつけられ、九頭竜が素早い動きでそれを防ぐ。

放たれた方を見ると、そこは天井に空いた穴の向こうだった。暗くて、天井からの淡い

光ですら逆光になって良く見えなかったが、何か大きな荷物を背負っているのは良く見えた。

絶望の対抗者が、希望となって現れたのだ。

▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼

《吸血王》^{ロードフラム}は瓦礫が飛来したドームの天井を、ドームの中から天井に空いた穴を通して見つめる。

赤ん坊は炎熱の嵐の風いである部分に残してきた。

《吸血王》^{ロードフラム}は忌々しそうに舌打ちする。攻撃してきた人物の正体は分かっていた。

「あくまで私の邪魔をするか」

歯ぎしりと共に怨嗟の唸り声が止まらない。

「《墓守騎士》^{グレイフナイト}！」

闇の向こうの少年が不敵に微笑んだ気がした。

第20話 『騎士の聖』

「グレイフナイト
《墓守騎士》！」

ロードフラム
《吸血王》の叫び声を聞いて、誠は一先ず自分に注意が向いた事に安堵した。

ギリギリのタイミングだった。

誠は魔族が憎かった。

その超常の戦いに無辜の民巻き込む不屈き者は憎悪に値した。

故に誠は警備局第三課として、特区の守護者として戦っている。

（父さん、母さん……）

魔族事件に巻き込まれて両親は死んだ。

母の胎内にあった、新しく家族となるべき命と共に……

誠の力の及ぶ限り、全ての不条理に鉄槌を降す。それが両親の墓前の前に花束と共に捧げた誓いだった。

そして

「行くよ」

棺桶の鎖を再び紐解く。

「眼前の敵を排除目標と認定」

『承認しました』

天から声が降りてくる。涼やかで美しい、女の声。

呟く誠、訪れた変化は劇的だった。

ゴッ

棺桶の蓋が弾け飛ぶように外れる。そこに現れたのは妖精の様な銀の女。誠と女の周りが燃えているかのように空気が歪んで見えるのは、濃密な魔力の気配によるものだ。

「制約に従い、第一から第十二までの全ての魔力弁を完全開放」

『魔力弁解放』

変化は誠に現れた。

「ぐおおおおおおおおおおおつ」

誠は自分の体に起こった苦痛を堪える。

ゴオオオオオオオオオオオオツ

誠の体から煙が噴き出し、急速に膨張していく。

薄い体が膨らみ、手足が延長される。伸縮性に満ちた黒いプロテクターの下では骨格と共に筋肉が急速に精製されていた。

「おおおおおおおおおおおつ」

雄叫びを上げる様に天に咆哮した誠の姿は少年のそれではなかった。

身長一七〇センチ台半ば、体中に細身ではあるが、筋肉の鎧を全身に纏い、プロテクターを押し上げている。

本来の二七歳という年齢の誠の姿。完成した戦士としての本来の誠だった。

「《龍銀姫》 限定解放」

その瞬間、銀の女の姿が崩れた。

まるで溶かされた金属の様に、女の体が服ごと溶けて、銀色の液体となって誠にまわりついていく。

カアッ

銀の液体は誠の全身に絡みつき、そして凄まじい光を放った後に現れたのは、銀色の騎士だった。

全身を覆う板金の鎧は白銀で、流麗な彫刻が施されて芸術品の様に美しく、そして雄々しい。

頭に被ったクローズドヘルムの頂点からはまるで髪のように風になびく白銀の一房。

誠は鎧の上から拳を握り、開くと穴の淵に足をかけ、跳ぶ。

まるで砲弾の様に鋭角に《吸血王》ロードブラムの前に降り立った。

「俺が何故神父ではなく騎士と呼ばれているか、教えてやる」

誠は躊躇いなく敵の前に立った。かつての誓いを果たすために。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

《吸血王》ロードブラムは眼前に現れた敵と睨みあう。

「これが音に聞きし《墓守騎士》グレイフナイトの聖銀鎧か・・・」

十三使徒と呼ばれる、人を超えた魔法士には何らかの人を超えるためのファクターが備わっている。《吸血王》^{ロードブラム}にとつては精神干涉魔法であり、九頭竜ヒュドラである。そして《墓守騎士》^{グレイフナイト}は咒物《龍銀姫》と契約し、その力を意のままに操る事が出来る事にあつた。

「死してもなお魔力と力を齎す龍人族の女の遺骸か」

「御託はいい」

誠は斬つて捨てた。

「死ね」

光の騎士が爆発的に踏み込んで距離を詰めてくる。その手には楯も剣もないが、《吸血王》^{ロードブラム}を庇う九頭竜の腹に拳を突き立てる。

ドオッ

凄まじく低い音が響き、地震が起こった様な衝撃が辺りに撒き散らされた。九頭竜の体が浮き、苦痛に悶えながら尻尾で迎撃するが、跳躍していなされてしまう。

「流石だな」

《吸血王》^{ロードブラム}は恐怖と驚き、そして感嘆の念を込めて呟いた。

知る者は口を揃えて言った。

《グレイフナイト墓守騎士》は地上最強の陸戦生物であると。

事情通の者、情報を生業にしている者、魔法士、軍の高官、全てが畏怖、畏敬と共に彼の者を語った。

曰く、聖銀鎧を纏った騎士に手を出すな。

「九頭竜ヒュドラーよ！」

ドームの外で燃え上がる焰が強くなり、黒蛇の配下を呼び戻す。

九頭竜が誠に向かって突進する。

誠も同時に距離を詰めた。

衝突の瞬間、凄まじい音が響く。

「おおおおおおおおおおおおおっ」

雄叫びを上げて九頭竜の頭を抱える様に持ち上げると、ドームの外に放り投げた。

（何と言う力だっ）

しかし、《ロードブラム吸血王》は内心ほくそ笑んだ。

外は焰の領域である。ドームの中での戦闘を厭った事だとは理解できるが

（浅慮だったな）

誠も外に出る。

その瞬間、誠を焰の暴風が襲った。

ゴフッ

しかし、誠はその衝撃を少し傾いただけで防ぎきった。

ロードフラム
《吸血王》はその光景に凍りつく。

グレイフナイト
《墓守騎士》の聖銀鎧はあらゆる攻撃を防ぎ、神父の武技はあらゆる敵を打ち砕く。

誠が地上最強の陸戦生物と呼ばれる所以だった。

加えて、咒物《龍銀姫》の力を解放しているおかげで、誠の肉体年齢は大人のそれに戻っている。筋肉の積載量が飛躍的に増した体の剛力は脅威の一言だった。

ロードフラム
有視界領域での不利を悟った《吸血王》は即座に距離をあけるべく古代都市の中心部に後退した。

黒蛇達を追って誠は疾走する。

跳躍して一体に飛び乗り、頭部に拳を打ち付けると鈍い音を立て

て隋が遺骨が陥没する。

「まさか、これ程とはな」

次々と黒蛇達が襲いかかるが、避けるだけではなくカウンターの一撃を的確に加えながら巧みに戦力を削っていく。

吸血王^{ロードブラム}は九頭竜ヒュドラーに命令を降して辺り一帯の地面をマグマにする。

「足元がおぼつかなくてはどうにも出来まい！」

マグマに埋もれて誠が沈んでいく。

逃れようと暴れている様だが、無駄だ。

「くっふっふっふっふっ、っはっはっはっはっは！」

九頭竜が掌握したマグマの奔流に流されて、地面の奥深くに沈んでいくのを哄笑を上げて見守った。

マグマの熱を急速に下げて、赤く煮えたぎった地面をもうもうと湯気を出す硬い石の床に戻す。

「さては邪魔ものは……」

ゴンッ

凄まじい音が地響きと共に鳴り響いた。

「何だ!?!」

ゴンッ、ゴンッ、ゴン!

凄まじい音と共に、固めた筈のマグマが響く様に震えている。

「まさか!」

地面が吹きとんだ。

吹き飛んだとしか形容しようのない、瓦礫が宙を舞い、ロードブラム《吸血王》に襲うそれを九頭竜が払い落していく。

粉塵の中から現れた騎士は、何事もなかったかのように石畳に降り立った。

第21話 『魔滅の銀』

瓦礫を足で踏み砕きながら、誠の心の中には焦りがあった。

成長したからだ、銀の鎧、どれこれも無理をした全力の発露である。そして全力は長くは続かない。

誠の膝から一瞬力が抜ける。

「ッ……」

《吸血王》ロッドフレームはその様子に驚いた様子を見せ、直に勝ち誇ったものになる。

「やはり、限界時間が存在したか、これで貴様の負けは確定した！」

誠は笑う膝に力を入れなおす。

「う、う、お、おおおおおおおおおおおおお
っ！」

四股を踏む様に足を振りあげて、降ろす。

ゴオオンッ！

凄まじい音と共に半径三メートル程がクレーターになる。

再び誠の脚に力がこもり、眼前の敵も目付きを厳しくする。

（時間がない、か）

こんなもの急場しのぎだ。永遠に続く訳ではない。誠の日々の鍛錬は、これの持続時間を延ばすためなのだが、それでも限界は存在する。

一瞬だけ考え、直に誠は決断した。

最後の切り札をきる事にした。

首を動かさず、辺りを見渡して、目的のものを探す。発見

足元の瓦礫を蹴りあげて《吸血王》ロードフラムを攻撃する。九頭竜に防がれるが、崩れかかった廃墟の一つ、その軒先に立てかけられた箒を取ると、柄の部分をつっこ抜いて長い棒を造り出す。

「何をするつもりか知らんが！」

黒蛇達が襲いかかってくる。

それらをギリギリで避けながら誠は手に持った棒に集中した。

「聖銀の祝福を対象物に付与」

『承認、ロングヌスを作成開始』

響いた声が聞こえなくなると同時に、木製の柄に誠の魔力が流れ込む。木目のその上に聖銀鎧の銀が溶けだし、流れ込み、覆っていく。それは膨張と収を繰り返しながら、二メートル程の銀の槍の形となった。

「今更武器など持ち出したところで！」

誠は幼いころに空手を習っていた時期があった。その一環として棒術についても触れた事がある。その応用として、武器を持つ時は決まって槍を使う様に決めている。

槍の攻撃は、究極的には突く事以外にない。それ以外は全て余計なものだからだ。

誠は銀の槍を手にとって駆けだす。

最初に接近した一体の頭上に飛び乗ると、槍を眼窩に突き刺して脳を抉った。

キイイイイイッ

再び一体が倒れる。

しかし、その回復は遅々としていた。

「何だ！」

魔滅の銀の槍は魔族の回復を阻害する。黒蛇程の大型のものとな

ると本体を殺さない限りどうしようもないが、それでも一時的に戦闘不能に追いやることくらいは出来た。

「何故貴様はっ」

《吸血王》ロードブラムの顔が憎しみと悲しみに歪む。

「何故貴様は私達親子の邪魔をする！」

足を止めず、攻撃の手を緩めず、誠は考え、そして言った。

「そんな事も分らないのか」

「何！」

「それはな……」

誠は魔族が嫌いだった。理不尽にその戦いに引き込む者はもつと嫌いだった。化外の戦いは自分達が担当すればいい。それを眼の前の愚か者の様に大勢を巻き込んでする必要など何処にもなかったのだ。

何人死んだと思っている。

どれだけの人が悲しんだと思っている。

いけしゃあしゃあと親子愛をその口で語るか。

万死に値する。

「お前が俺を怒らせたからだっ!!」

槍を構えて突進する誠に九頭竜を通じて迎撃の命令を出す、その全ては誠の後方である。とても迎撃が間に合わない。

「いけ、九頭竜ヒュドラッ!」

他の黒蛇とは一線をかくする圧迫感を以って誠に接近する。

ガッ

予想以上の速さに避ける事が出来ずに、正面衝突した。

大開になった口と牙に巻き込まれぬように手と足で顎の圧力に耐える中、九頭竜は赤い目を光らせて言った。

諦めよ

「は？」

声は最初の時と同様、頭に直接響く様に届いた。

そなたに勝機は無し

我が勝利は揺るがず

故に・・・

抵抗は無駄だと言いたいらしい。

だが、誠はそれを鼻で笑った。

「は、馬鹿かお前は」

怒りと悲しみ、嘲笑と慈愛、そして圧倒的な覇気を込めて告げた。

「それは俺のセリフだ」

誠は手に持っていた銀の槍を握りなおして、照準、投擲した。

九頭竜の頭上を過ぎたそれは凄まじい勢いで風を切り、そして・

・

何？

僅かに遅れて帰って来た九頭竜の反応は困惑に満ちていた。

赤く光った眼は、段々その赤みが薄まり、そして金色の本来の瞳が現れたのだ。

そして、九頭竜ヒュドラーの遙か後方では、誠の槍を胸に受けて倒れる《吸血王^{ロッドラム}》の姿があった。

「あんな奴に俺が負けるわけがないだろうが」

満身創痍の誠は不敵に微笑んだ。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

高子は遠目に、戦いが終わったのを見ていた。

「……………」

口からため息ばかり出る。

凄まじい戦いだった。今まで見た事もない、荘厳で、壮絶で、圧倒的戦い。人類の介入する余地のない戦いだった。

あぶ……………

胸元に抱いた赤ん坊が眼を何かを求める様に宙を手でかく。

炎熱の風に限界を感じた高子は、風が凪いでいる中心部に避難していた。そこで見つけ

たあの赤ん坊を腕に抱いてあやしている。

自分が誘拐した赤ん坊を抱いている。

（どんな猟奇ミステリだ・・・）

内心、自分自身に呆れたが、しかし見つけた以上放っておくわけにはいかない。

ドームの方から戦いが終わった事を知った警備局の隊員達がこちらに走り寄ってくるのが見えた。

救いではなく、安堵でもなく、それは唐突に訪れたカーテンコールの様に去来した空虚な思いは正に終劇のそれに似ていた。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

誠は歩いていた。

「ぐ・・・あ・・・はっ
」

全身が焼ける様に熱い。

煙を上げる体はみるみる小さくなっていき、もとの十代前半の容姿に戻って行く。

鎧も銀色の液体となって溶け落ちて、そして光となって消えていく。棺桶の中に戻って行くのだ。

瓦礫にの道をよろけながら進んでいく。

限界を超えた力を行使した反動だった。

「あつ・・・」

よろけて転びそうになったところを、後ろからついてきていた九頭竜ヒュドラ―が鼻先でそつと支える。

「・・・お礼を言おうか、それとも訳を聞こうか悩むところだけど」

よい

我は楔より解き放たれた

故に戦う定めは水泡となって消えた

むしろ問いたい

主は我の楔を解くに留まった。

いかに

戦った自分を殺さず、戦わず、怨む様子すら見せない誠を不思議に思った様だ。

「そんな余裕はないよ」

この蛇にとっては、操られていたから戦っていたのであって、操られていない以上戦う必要はないと言いたいらしい。

「……………」

いまさらどうする事も出来ないので無視して歩く。

どれ程歩いただろうか。

前方から声が響いた。

「……何の用だ」

それは、銀の塗装がはげてただの棒になった柄に貫かれた《吸血^{ラム}王》だった。仰向けに倒れて、柄が天井を向いている。

致命傷だった。

無尽蔵の回復力を誇るとされている吸血鬼であるが、銀の槍で心臓を貫かれてはただでは済まない。

「……九頭竜の支配も解けたか……二人で私に復讐するつもりか？」

血を吐いた。

「……そんな面倒な事はしない」

九頭竜ヒュドラも興味なさげに誠の後ろに佇んでいた。

「……貴様の言つとおりだ」

「何？」

「私は復讐したかった」

ロードフレーム
《吸血王》は訥々と語った。

憎悪と後悔を乗せて

「私は・・・古き血の因習であると分かっている、姉上を妻として愛していた」

そして子をもうけて、幸せの絶頂の中で、全てを奪われた。

「世界の全てが悪ではない事くらい分かっていたさ・・・だが、私は世界の全てに復讐したかったんだ」

全てを諦め、そして死を悟った男は最後の言葉を述べた。

「・・・息子を・・・」

「・・・」

「息子を、お願いできないだろうか」

誠は頭をガシガシとかいた。

どうにも胸糞が悪い。腹立たしい。悪人ならば最後まで悪人として死ね。

そう言いたかった。

誠は頭を一度、縦に振る。

すると、吸血鬼の男は眼を閉じて、静かにを引き取った。

第22話 『D A W N』

エミユルはドームの外の赤い嵐が収まるのを見て、何かが終わったのを悟った。

突如として現れた黒い蛇を連れた男、そして銀色の甲冑を纏った騎士。

辺りを見渡せば、騒然としながらもその光景を忘れる事が出来ずに呆然とする数人が見て取れた。

既に安全になったらしいドームの外に踏み出す。

未だに引かない熱に肌が痛い。

「よう」

声をかけられて眼を向けるとそこには旧知の男がいた。

「誠！」

走り寄り、駆けより、瓦礫でこけそうになりながらも辿り着いて、壁に寄り掛かる誠に思いつきり抱きついた。

「誠、誠お！」

「痛い、痛い、思いつきり首絞めてる」

涙目になりながら自分の名前を呼ぶ少女の頭を優しく撫でた。

「とりあえず、もう安全だから」

「……うん」

エミユルはやっこの思いで誠から身を引きあはがす。

誠の奇妙な格好に疑問を持ち、そのまま口にする。

「なあ、誠、その格好何だ？」

「あ？」

ああ、これか……。そうだな」

少し悩む様な様子を見て、口を開いた。

「俺が警備局で事務のアルバイトしてるって言っただろ？」

「あ、うん」

「今回の件で人手不足になっちゃってさ、犯に逮捕と安全確認が済んだから、まあ、そのお手伝いを頼まれてね」

こんな嘘くさい話を信じる者はいないだろう。エミユルも本来だったら信じなかっただろうが（純心であって馬鹿ではないのだ）、極限状態に晒された直後のせいで『何故か誠がいる』よりも『誠がここにいて嬉しい！』の状態になってしまっている。

「ほら、中で警備局の人が点呼取っているから行つといで」

「お、おお！」

慌ててドームの中に入り、途中で振り返ってぶんぶん手を振った。
仕方なしに手を振り返して見送る誠。

ザッ

足音が聞こえて振り返ると、そこには満身創痍のマリア・キャンベル隊長がいた。

「意外だわ」

「あ？」

「貴方も普通に笑いかけたり出来るのね」

酷く無礼ながらも的を得た言葉に慄然とした様子になる。

「それにしても疲れたわね」

「お前達は実質何もしてないだろう」

「うぐっ」

ロードフラム
《吸血王》を降したのは実質誠一人の力だ。

そして瓦礫の影からのっそりと姿を現す存在がいた。

戦士よ

九頭竜ヒュドラ―は支配を解かれ、しかし戦うつつもりもないという中途半端な立ち位置にいた。

気がつかなかったマリアがギョツとした顔になるのを横目に誠はヒュドラ―に向き直る。

「ああ、お前か……それで、どうするんだ」

これから

此度の戦い

本意ならざれど

盟主たる我の不覚

我が『迷宮』解かれれば

そなたの住処は崩れ、海へと沈む

誠は顔を顰めた。

確かに、ここまで巨大な空間を構築してしまったのだ。人工島に

は構造上の問題が発生している可能性がある。九頭竜の言うとおり『迷宮』が解かれたら特区は崩壊するだろう。

「・・・どうしたらいい」

話を聞いたマリアが青い顔をしている。

心配はいらぬ

そなたらが望むのなら

我はここにあり

人の世の礎となるだろう

つまり、誠達が望むのなら自分はここに住んで『迷宮』を維持し続ける。

そついうことなのだろう。

「頼む、細かい話はこれから詰める事になるだろうが」

承知

九頭竜は巨体を引き摺っていずこかに消えた。

ずるするとマリアがへたり込んだ。

「何だ、だらしない」

「・・・無茶言わないでよ」

予期せず、九頭竜の巨体が現れれば誰だって驚くだろう。しかも戦った敵だ。ここで襲われたら目も当てられない。

誠はマリアに背を向けてその場を去る。

「ちょっと、何処に行くのよ」

「・・・帰る、今日は疲れた」

それに明日は学校がある。

告げるとマリアは意外そうな顔をする。

「あなた、学生だったの？」

「俺、最終学歴中卒だからさ」

だから、高校生活つてのに憧れてたんだ。

後に手をぶらぶら振りながら棺桶を回収するべくその場を去った。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

事件の翌日、誠は疲れた様子で第七区域の繁華街に佇んでいた。特区でも採用されている赤いポストにもたれかかる服装は学校のブレザーだった。

「考えてみれば、学校がないのは当たり前か」

あれ程の事件があつたばかりなのだ。直に授業再開とはいかないだろう。

手持無沙汰の誠は昼の繁華街で何をする訳でもなくぶらぶらしている。

「ちよつと君」

警備局の警務部、本土で言うと警察官にあたる部署の隊員が誠に走り寄る。

「君、学生だよね、学校は？
こんな所で何してるの？」

どうやら面倒なのに捕まってしまった様だ。

思いつきり溜息をつくと警務部の隊員はムツとした様子になる。

「ちょっと事情を聞きたいんだけど」

誠は懷から警備局第三課課長としてのIDを取り出して放り投げた。

怪訝と苛立ちを等分した様な表情で隊員はそれを受け取ると、中身を確認して茫然となる。

「こ、これは……」

「問題ないだろう？
さっさと返せ」

それでも食い入るように見つめて固まる隊員に溜息を吐く。

「警備局の隊員はいつから上司にそんなぶしつけな態度を取る様になったんだ？」

隊員はビクンと跳ねる様に顔を上げてIDを返し、見事な敬礼を見せる。

「も、申し訳ありませんでした！」

声でただでさえ人通りが少ない道の少ない人の注目を集めてしま
う。

「……もういい、俺は行くぞ」

さっさと踵を返してその場を去る。一度振り向くと、未だに敬礼の姿勢を崩さない隊員を見つけてうんざりした気分になった。

そこでポケットの携帯電話が震える。

「はい、蓮杖」

『私だ』

局長桜木蔵十郎だった。

『先日はご苦勞だったな』

「とんでもない、こちらこそお氣遣い頂いた様で」

先日的一件以来、蔵十郎の私兵という性質をもっていた第三課も他の作戦部と同様、通常局員として扱われる様になった。今日、第七区域の第三課の拠点近くにいるのも、実は警備局の本部庁舎に引っ越すための準備の為なのだ。

「こちらこそ立派な契約違反だ」

『警護対象の事が、気にしなくてはいいいエミユルは、孫は無事だったのだからな』

エミユルは、エミユル桜木は警備局局长、桜木蔵十郎の孫だった。二人とも数える程しか顔を合わせていないはずだが、特区の要人たる局長の家族の一員と言う事で、誠がもう一度学校に通いたいと言う我儘と通してもらった代わりに蔵十郎から言い渡された使命。それがエミユルのお守りだ。

『あれは妖精族の性質上、人と合わせるのが得手ではない。お前の価値は警護のためだけではない』

「どうも、まあ、とりあえず切ります。そのお孫さんと今日は遊びに行く御約束をしているんで」

答えも聞かずに電話を切るとサイレントモードにしてしまう。

暫く歩いていくと、瀟洒な喫茶店の前を通りかかる。

「……………」

ふと違和感を感じて足を止め、テラス席を見ると一人の客を発見する。

初老の男性だった。コーカソイドの顔立ちには皺が深く刻まれており、頭髮は余すところなく白く染まっている。スーツを纏い、スカーフを襟元に巻き、モノクルを嵌める様子は中世の貴族を思わせるが、ただそう言うにはためらわせる様な躍動する生命力が彼の眼にはあった。

「何か用かね？」

「……………いえ」

視線に気がついた老人がそう問い、ややあつて笑った。

「いや、意地悪はよくないな。歳をとると悪くなるものが三つある。何か分かるかね？」

「……………若輩なもので、俺には見当もつきません」

「ふむ、一つに眼だ。最近新聞が読み難い。二つに足で、三つに意地だよ」

にやりと老人が笑う。

「つまり、意地悪になるのだ」

上手い事言った老人は自分の言葉に満足するように頷くと、今度は誠を見て、眼を細めて口調はそのまま、しかし、老紳士然とした様子とは変わって傲然とした王の様に告げた。

「ご苦労だったね」

「はい、ありがとうございます。議長」

BABEL最高評議会議長、ヴラド・ツウペシユの姿がそこにあった。

「身内がかけた迷惑だ。労を労いがてら、お詫びをと思ってね」

全てがこの老人の差し金だったのだ。子孫共の思想に危険を感じ、吸血鬼の赤ん坊を攫いだし、《吸血王》ロイドブラムに誠をぶつける。人魔平等の旗頭の身内が貴族主義ではあまりにも不味い。その問題の処理に誠は駆り出されたのだ。

「・・・不本意ながら微力を尽くさせていただきました」

気に食わないという態度を前面に出した謙遜にヴラド軽く吹く様に笑うと、告げた。

「政治的な配慮で赤ん坊は君のところでお世話になる」

「はあ」

「まあ、実例があるだけに私にまともな子育ては無理だろうし、使徒の庇護のもとで育つのが後後にとっても良い事だろう」

こちらの事情や状況は一切斟酌せずにそう言い放つとさっさと会計を済ませて去ってしまった。

「・・・」

一つ事件が解決した。

だが、解決していない事も沢山ある。

あの赤ん坊は未だに家にいるし、北条高子には何のフォローもしていない。

第三課は晴れの舞台に引き摺りだされ、これからどうなるかわからない。

「ああ、そう言えば」

あの吸血鬼に赤ん坊の名前を聞くのを忘れた。もしかして付けて無かったのだろうか？

「そんなわけないか」

とりあえず和名にしよう。蓮杖をいう名字に似合う名前を。

少年の姿は街の影に消えた。
？

第22話 『D A W N』（後書き）

第一章はこんな感じで・・・
ストックが溜まったら放出していくのでその時はよろ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9367u/>

ノーライフキングダム

2011年9月20日15時13分発行